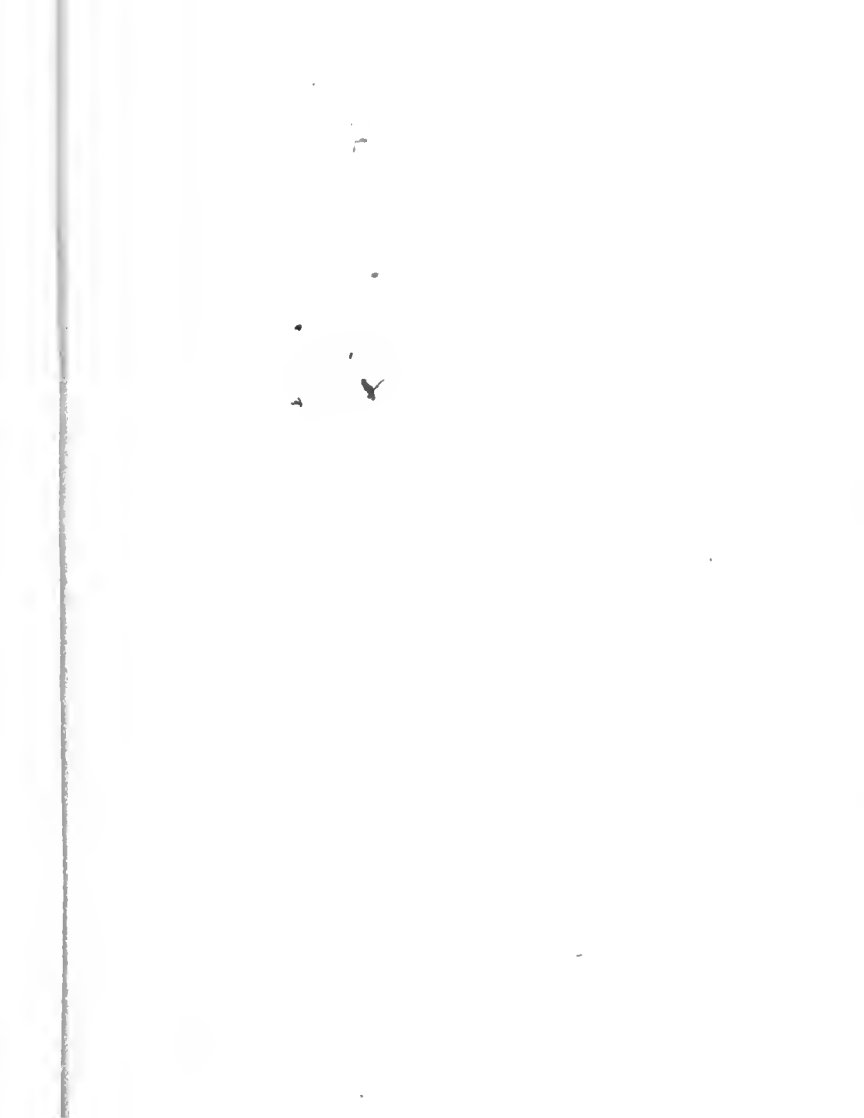


310

74

準十郎著

「マイ・カン・プ」研究



石川準十郎著

ラヒト「マイン・カンプ」研究

前篇（第一分冊）

——單なる Nationalist より Nationalsozialist に至る迄の研究——

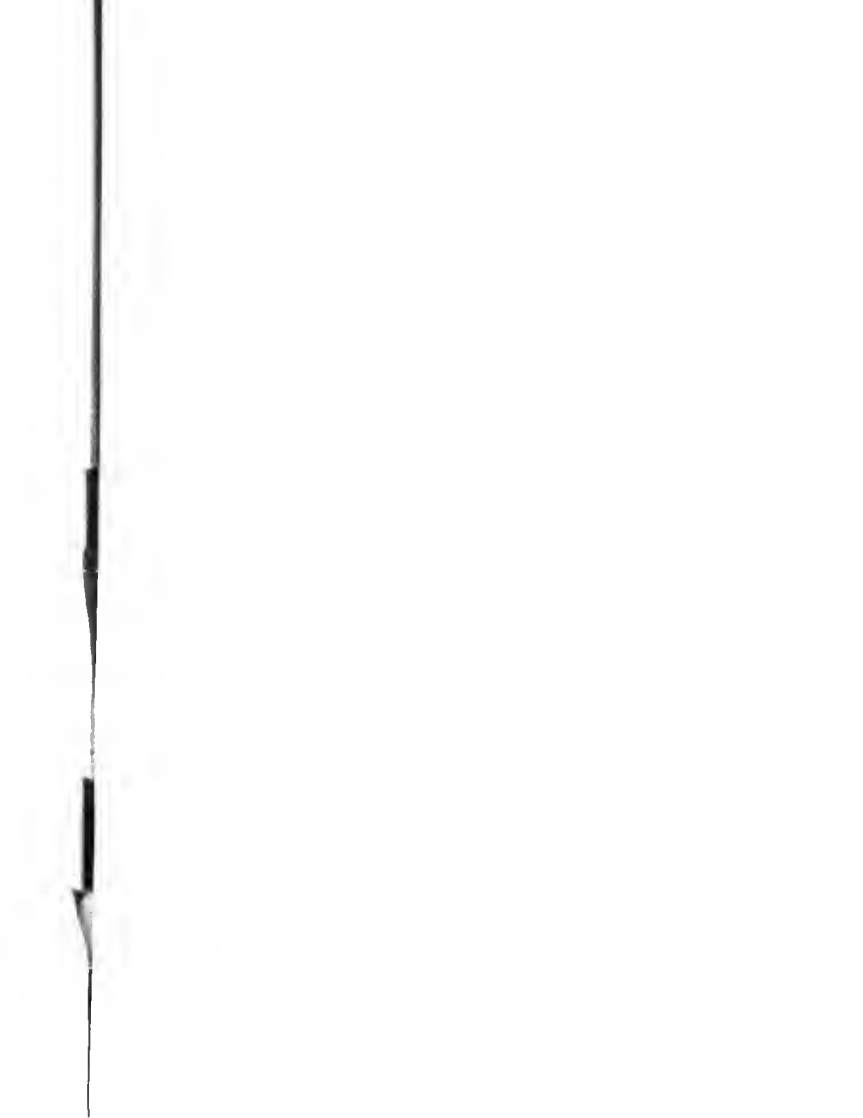
國際日本協會發行



1733



るせ筆執を『ブツカ・ンイマ』
氏ーラトヒの中獄



此書をば私は、何よりも先づ、多年私と思想的の勞苦を共にし來れる私の同志諸君に捧げる。此書が今遅れ走せ乍らも世に現れ得たのは、正に諸君の變らざる隠れたる協力と援助とに因るものである。此書は如何なる意味に於いても、私一個のものではなくして、諸君との共同の所産であり、我々がこれを超えて進まねばならぬ所の我々の一の共同の記念標である。

著 者

序 文

私が本書を綴るに至つた所以の大體は、本書起稿に際しての序言の中にこれを記した。見るが如き祖國最近の事情の下に於いて私は、私の觀たる在るがまゝのヒトラー氏『マイン・カンフ』を讀められず骨抜かれざる眞の獨逸ナチスを、紹介せんと欲したのである。

私は、瘠せても枯れても、日本の國家社會主義者、獨逸ナチス以前からの日本の *Nationalsozialist* である。獨逸ナチスが尙ほ不遇に在り四面嘲罵の中に在つた時に於いてこそ、私乃至我々は、我々の信ずる理由よりして、狂熱を以つて彼等を語り彼等を擁護した。が、彼等の既にその祖國に號令し、世界の脚光を浴びて新たな歴史を創りつつある時に、而して我國にも既にその禮讃者・解讀者の充満してゐる時に於いて、殊更に彼等に就いて語ることは、私の寧ろ潔しとせざる所である。それは、私にとつては一の苦痛でさへある。

私が夙に十餘年前より未だ我國に於いては獨逸ナチスの殆んど問題とされなかつた時より、同志と共に『マイン・カンフ』を譯出研究し、これをそのまゝ埋れしむるに忍びず、その後二度も正式にその出版を企てつつ、その時に於いても尙ほ私の名に於いてこれを出版することを躊躇したのも、

その出版を企てつつ、その時に於いても尙ほ私の名に於いてこれを出版することを躊躇したのも、

右の心情に基づくものであつた。その二度目の企圖の時の如きは、さる大新聞社より出版することに定り、全改譯逐字譯をなし、その最後の原稿を渡した時に、たま／＼獨ソ協定が成立し、平沼内閣の謂はゆる『複雑怪奇』なる内外情勢の出現の爲に出版中止の已むなきに至つたのであつたが、私は運命の我々の努力への殘酷に苦しみつつも、却つて何か知ら救はれたる氣さへした。そしてその後笑つてその企圖及び權利を放棄した。私が單なるジャーナリストであつたならば、如何様にもして夙にこれを出版してゐたであらう。が、私は單なるジャーナリストたるを欲しなかつたのだ。

が、私は、祖國の最近の事情を考へれば考へる程、而して我國のドイツ通諸君なる者のドイツ論乃至ナチス解釋を眼にすればする程、私の觀たる眞のナチス獨逸、私の讀める眞のヒトラー『マイン・カンプ』を、私の同胞に對して傳へるの必要を痛感しなければならなかつた。如何に愚劣の支配する當世とは言ひ乍ら、斯かる眞實が斯くも何時までも蔽はれて宜いものであらうか！ 私は、本文序言の中にも言へるが如く、以前から、單なる翻譯紹介とは別個に、私の觀たる忌憚なきヒトラー『マイン・カンプ』に獨逸ナチスを紹介したく思つてゐた。私は今や日本の品位の爲にも、實に我等の國にも決して御都合主義者のみが居るに非ざることを示す爲にも、その必要を考へた。然るに運命は私をして思ひ切つてこれを決行せしむるの皮肉な機會を與へた。私は昨皇紀二千六

百年の戦争の中にも國を擧げて祝賀光榮の年、米内内閣の有田『皇道』外交の下に於いて、私の我が國家國民を最も禍ひ深く誤るものと信じて已まない所の二つのものの『古支那的皇道主義』と『西歐的自由主義』とを攻撃して、圖らずも當局の忌諱を得、祖國の爲に私の最も必要にして最も寄與し得ると信ずる所の批判的仕事を中止するの已むなきに至つた。私はこれを機會に、私の多年考へてこれまで果し得なかつた本書の執筆に着手した。そしてその一半をば、その少しづゝ成るに従つて、私の同志の發行する雜誌『國際評論』に發表した。

私の此書は斯くの如くして生れたものである。此書は、私にとつては、長い間の私の獨逸ナチズム研究の一の清算であると共に、祖國の現狀に對する私の心からなる警告書である。私は私の此書をば、世の謂はゆる充ち足りたる人々や諸々の事大主義者共に讀んで貰はうとは思はない。新しき時代を望んで、私と同じ様に貧しく生き・苦しみ・悩んでゐる所の人達に讀まれんことを欲する。而して私は信ずる——此書は必らずやさうした新しき時代の考察に役立つであらうことを！

昭和十六年十一月

石川準十郎

目次

題	寄（同志に捧ぐ）……………	Ⅰ
序	文（出版に際して）……………	Ⅱ
序	言（起稿に際して）……………	一

緒	言……………	五
---	--------	---

一、	同書の性質及び由來……………	五
二、	同書兩卷の構成概容……………	三

前篇 批判篇

第一章	生ひ立ちの點檢……………	三
-----	--------------	---

一、	運命の地プラウナウ……………	三
----	----------------	---

第二章 ウィン苦難時代

- 一、幼少時代のヒトラー……………一六
- 二、斷じて官吏たらず……………一六
- 三、若くして既に革命的 Nationalist……………三
- 四、王朝的愛國主義と國民的國家主義の相違……………六
- 五、孤兒となりてウィンへ……………五
- 一、ウィン時代の賜物——社會主義……………六二
- 二、窮乏と悲慘の五ケ年……………六二
- 三、身を以つて社會問題を研究……………四
- 四、如何に改革すべきか……………一〇
- 五、マルクス主義の勃興とその原因……………七
- 六、マルクス主義との衝突から對立へ……………六
- 七、ブルジョア政治にマルクス主義打撃の資格なし……………一六

七、ブルジョア政治にマルクス主義打撃の資格なし……………二六

八、マルクス主義背後の存在としてのユダヤ人……………二四

第三章 ウイン時代諸考察……………二六

一、政治指導者たる者の心得及び資格……………二六

二、多民族國家の必然的運命……………二三

三、議會主義・民主主義に對する考察……………二四

四、神權國家主義は民主主義より惡し……………二五

五、議會主義は何故に排さるべきか(1)……………二六

六、議會主義は何故に排さるべきか(2)……………二六

七、眞のゲルマン民主主義……………二七

八、近世ドイツ史に於ける俗流愛國主義と純正愛國主義の分裂……………二八

九、國家はそれ自身目的に非ず……………二九

十、National 黨＝汎ドイツ黨と Sozial 黨＝基督教社會黨の教訓……………二九

十一、兩黨指導者シェーネレルとリューゲル……………三〇

十一、National 黨	汎ドイツ黨の失敗原因	二〇二
十二、Social 黨	基督教社會黨の過誤	二〇三
十四、民族主義的と社會主義的		二二六
十五、神權國家遂に救ふべからず		二四一
附記	本書續刊諸分冊に就いて	二四六

序　　言

アドルフ・ヒトラー著『マイン・カンフ』(Adolf Hitler, „Mein Kampf“)は、周知の如く獨逸ナチスの『導きの書』であり、今日新興獨逸に於いては國民必需の『バイブル』とされて居る所のものであるが、そは我國にとつても多くの参考とすべき物を藏してゐる。

私は多年、その單なる翻譯紹介をではなく、それとは別個に、一の自由な立場からするその批判解説的紹介を志しつつ、種々の事情の爲にその機を得ず今日に及んだ。然るに我國最近の内外の事情は、私をして、私の解釋に據るその忌憚なき紹介を思ひ立たしめて已まないものがある。私の手許には、夙に十餘年前より同志若干と共に譯出し其後屢々私の手を加へた殆んど完全に近い譯文が存在するが、故あつてその出版を中止されてゐる。私はこの譯文を更に原本と對照し考察しつつ、茲に改めて、私の讀方及び解釋に據るヒトラー『マイン・カンフ』の概要、その眞骨子と思はれるものを紹介して見たいと思ふ。

蓋し、『マイン・カンフ』の邦譯は、非常な抄譯であるが、既に二・三行はれてゐる。全譯もその中に現はれるであらう。が、同書は、たゞ讀んだからと言つて、必らずしもそれで直ちに何人にも理

解されるといふ種類の書ではない。それは、知識よりも寧ろ魂を以つて書かれた書であり、同様の魂、同様の立場の者のみが、ヨク理解し得る書である。これは翻譯の場合に於いても同じである。殊に抄譯の場合に於いては、その重點を何處に求むるかに依つて、甚しく異つたものとなつて来る。一言にして言へば、同じ『マイン・カンプ』を読むにも、官僚には官僚の讀方が有り、ジャーナリストにはジャーナリストの讀方が有り、我々には我々の讀方が有る。私は敢へて私乃至我々のそれが凡ゆる場合唯一絶對に正しいと言ふのではない。只その間には自ら可なりの相違が有らうと思ふのである。而して私は、その我々の讀方及び解釋に依る同書の紹介を此際行つて見ようと思ふのである。若しそれが、從來及び今日我國の多くのドイツ通乃至ナチス理解家諸君の解し且つ説いてゐる所と少からず異つて居たならば、それも無意義ではなからうと思ふ。

本來から言へば我々は、今更ヒトラーの『マイン・カンプ』などを事として居るべき時ではない。我々自らの『カンプ』・我々自らの戦ひを、血と涙を以つて、綴らねばならぬ時である。我々自らの家がどうなるか分らぬといふ時に、他人の家が如何にして潰れ、如何にして再建されたかの研究でもあるまいのだ。が、現下の事情の下に於いては我々は、國家國民にとつて如何に正しく如何に必要であらうとも、我々自らのカンプを綴ることを許されない。政治的カンプは畢竟バルタイ

研究でもあるまいのだ。か、現下の事情の下に於いては我々は、國家國民にとつて如何に正しく如何に必要であらうとも、我々自らのカンパを綴ることを許されない。政治的カンパは畢竟バルタイ

ベヴェーグ（黨運動）であり、諸反對派に對する闘争であり、特に時の支配權力に對する戦ひである。然るに我々は今やさうした事は許されない。その支配權力の爲す所が假令如何に誤つて居り、國家國民を假令如何に危殆に導くものであつても、我々は『一億一心』これと協力し、協力裡にこれを是正して行かねばならないのである。ヒトラーの『マイン・カンパ』は、斯かる支配權力との戦ひの故に、獄舎に於いて書かれたものであるが、我々は獄舎に於いてもこれを草することを許されないであらう。斯かる時に於いては、他人の家が如何にして崩壊し、如何にして再建されたかの研究も、有意義にして且つ有用でなければならぬ。或ひは、それこそが眞に邦家に盡す所以となるかも知れないのである。

たゞ私はどこまで此の研究を續け得るか、自分でも分らない。私自身が日々の糧の爲の仕事に追はれてゐる身である上に、四圍の事情は何時私から筆を奪ふかも、或ひは私をして筆を捨てしむるかも、知れないからである。たゞ私は、最善を盡して、生來の遲筆に鞭打ち、その出来るだけを書き綴つて見ようと思ふ。

尚ほ本序言の中に一言して置きたいことは、私は斷じて獨逸ナチスの『亞流』ではないといふことである。若し斯かる言葉をを用ひるならば私は寧ろ『先流』である。何故ならば、ナシヨナルソ

「シヤリズム」を主張したのは、獨逸ナチスよりも我々の方が遙かに先であつたからである。我國に獨逸ナチスを紹介したのは、恐らく私が最初であつたらうと思ふが、然し私は亞流的考へや立場からこれを紹介したのではない。同じ旗幟の者を端なくも獨逸に見出し、而もその歴史的重大性を固く信じたからであつた。私は最初から彼我の間をハツキリ區別して來た。我々の見地からすれば、彼等の Nationalsozialismus も當然『國家社會主義』と譯されねばならないものを、敢へて『國民社會主義』と譯したのもこれが爲であつた。我々は彼等から多くを學ぶことが出來た。然しそれは主として、方法上運動の方法に於いてであつた。根本に於いては、反ユダヤ主義其他二・三の特殊のものを除く外は、凡て夙に我々も思考し主張して來た所のものであつた。而も主張的には我々の方が、種々の點に於いてヨリ徹底しヨリ進んでゐたと言ひ得る。

然るに當時、我國思想界乃至革新運動界は左右兩派共に、この我々の獨逸ナチスの紹介を冷笑し、ナチスを種々と貶黜排撃すると共に、我々を屢々その『亞流』呼ばはりしたのであつた。『皇道主義經濟』を標榜する資本主義御用思想家の一團はまた、『獨逸ナチスは日本の國家社會主義者の如く資本主義を否定するものに非ず』と力説して已まなかつた。然るに今日、此等の諸君はどうか？果して彼等は今日尙ほ同じ立場を持してゐるか？ 果して時流に乗り遅れざらんとして、ナチスを

く資本主義を否定するものに非ず」と力説して已まなかつた。然るに今日、此等の諸君はどうか？果して彼等は今日尙ほ同じ立場を持してゐるか？果して時流に乗り遅れざらんとして、ナチスを

禮讃してはゐないか？確かに其處にはエビゴーン（亞流）有りき。而してそは何人なりしか？私はこの言葉を彼等に捧げて、私の古くして新しいナチス紹介を始めたいと思ふ。

緒論

一 同書の性質及び由來

我々は、問題の『マイン・カンフ』前後二卷八百頁の大系とし骨子とする所のものを原文に従つて見るに先つて、同書の性質及び構成を大體弄込んで掛ることが必要であると思ふ。

ヒトラーの『マイン・カンフ』は一體、その根本乃至窮極に於いて、先づ、如何なる性質の書であり、何を書いたものであるか？

一言にして言へば、それは一の革命の書であり、その爲の戦ひのことを書いたものである。勿論其處には、上はハプスブルグ皇室のことから下は庶民の淋病のことにまで亘つて、種々の事を書いてゐる。が、それは凡て、彼等の意圖せる革命の爲のものである。勿論その革命は、獨逸國家國民

の復興の爲のものである。が、同書の直接目的とせる所は、飽くまで彼等の革命ニ國民社會主義革命であり、その爲の基礎的論策である。『マイン（私の）キャンプ（戦ひ）』とは、その彼等の革命の爲の戦ひの意味であり、その爲の基礎認識、基礎理念、基礎方法を、彼れ自らの生立ちから前大戦に於ける獨逸の崩壊及びこれに促されたる彼等の運動の開始の歴史と共に書き綴つたのが、取りも直さず著書『マイン・キャンプ』であるのだ。

従つて此の書に、有りふれた意味に於いて、或ひは我國の謂はゆる『思想導導』的意味に於いて、何か『有益』なものと乃至『健全』なものを求むるならば、それは少なからず見當違ひであり困難であらう。此書は前記の如く一の革命ニ國民社會主義革命の方針書であり、マルクス主義、自由主義の支配にとつても元より有難くないものであるが、貴族や軍閥や官僚の單なる國家主義の支配にとつても決して好ましいものではない。何故ならば、其處では同じく打倒の對象とされてゐるからである（これらに取つてナチスの如何なるものであるかは、既に實踐に依つても明らかである）。

この書は外國では屢々、マルクスの『ダス・カピタル（資本論）』と對比されて論評される。マルクスの『資本論』も明らかに一の革命の爲に書かれたものである。が、其處では、その背後の意圖乃至感情は飽迄ユダヤ人的理性の衣の中に隠されてゐる。直接その意圖する革命の理念や方法には

クスの『資本論』も明らかに一の革命の爲に書かれたものである。が、其處では、その背後の意圖乃至感情は飽迄ユダヤ人的理性の衣の中に隠されてゐる。直接その意圖する革命の理念や方法には

何等觸れず、たゞ、資本主義社會は必然的に崩壊せざるを得ないことを理論的に説明して居るに止まる。然るにヒトラーの『マイン・カンフ』は、直接その意圖する革命の理念及び方法に就いて論じ、而も敵に對する熾ゆる憤怒及び憎惡を原始ゲルマン的率直さを以て表はしてゐる。一は飽迄學者的であるならば、一は飽迄戰士的である。金權財閥や貴族官僚の支配する特權社會にとつては、共に『危険』なものであり『物騒』なものであるが、然し前者は間接的であつて、後者は直接的である。或は、前者は陰險であり、後者は率直であるとも言へる。が、いづれにしてもそれは、特權社會の『思想善導』的御用からは遠く距つたものである。

『マイン・カンフ』の如何なる性質のものであるかは、同書卷頭に掲げられてゐる次の序言及び黒枠の題寄に依つても凡そ窺はれる。或る意味に於いて此の兩文は、同書の性質を最もヨク表はして居るものである。

序 言

一九二四年四月一日、私は、ミュンヘン人民裁判所の判決宣告によつて、即日レツヒ河畔ランズベルグ監獄に禁錮の身となつた。

この禁鋼によつて私は、多年の絶へざる活動の後に始めて、これまで多くの人々から勧められ且つ自らも運動上必要と感じてゐた所の著作に、思ひ切つて従事し得るに至つた。そこで私は、前後兩卷に亘る本書に於いて、單に我々の運動の目的を明らかにする許りでなく、またその發展の姿をも併せて叙述すべく決意した。蓋しその方が、一切の單なる教義の論述よりも、讀んで得るところ多かるべしと思はれるからである。

それと共に私は、これを機會に、本書第一卷及び第二卷の理解に必要な限りに於いて、且つ私の人となりに関してユダヤ系諸新聞の日頃事としてゐる惡宣傳の粉碎に資する程度に於いて、私自身の經歷を本書の中に叙べた。

尙ほ私は本書をば、我々と無縁の徒に寄せるものではなく、心から我々の運動を支持し、誠意その一屑詳しい説明を求めて居る所の、我々の運動の關係者に寄せるものである。私は、世の人心なるものは、書かれた言葉に依つてよりも、寧ろ話された言葉に依つて、ヨリ多く獲得されること、この世の一切の偉大なる運動の發展なるものは、偉大な書き手に依つてではなく、偉大な話し手に依つて、齎らされるものであることを知つてゐる。

然し、一の教説の均整あり統一ある主張の爲には、その原則とされる所のものが永しへに確立されてあらねばならない。本書兩卷はその意味で、私が我々の共同の事業に寄せる所の、我々の

はなく偉大な話し手に依つて、齎されるものであることを知つてゐる。

然し、一の教説の均整あり統一ある主張の爲には、その原則とされる所のものが永しへに確立されてあらねばならない。本書兩卷はその意味で、私が我々の共同の事業に寄せる所の・我々の

運動の基石たるべきものである。

レツヒ河畔ランスベルグ要素監獄にて

著者

一九二三年十一月九日午後十二時三十分、ミュンヘン將軍館前及び元陸軍省中庭に、次の人々は、ドイツ國民の再興を固く信じつつ、斃れて行つた。

アルファルト、フェリツクス。商人。一九〇一年七月五日生。

パウリイエドル、アンドレアス。帽子製造人。一八七九年五月四日生。

カツセラ、テオドル。銀行員。一九〇〇年八月八日生。

エールリツヒ、ウイルヘルム。銀行員。一八九四年八月十九日生。

ファウスト、マルチン。銀行員。一九〇一年一月二十七日生。

ヘツヘンベルゲル、アントン。錠前屋。一九〇二年九月二十八日生。

ケルナー、オスカール。商人。一八七五年一月四日生。

クーン、カール。給仕長。一八九七年七月二十六日生。

ラフオツレ、カール。工科學生。一九〇四年十月二十八日生。

ノイバウルエル、クルト。小使。一八九九年三月二十七日生。

バーベ、クラウス・フォン。商人。一九〇四年八月十六日生。

フフォルデン、テオドル・フォン・デル。地方裁判所判事。一八七三年五月十四日生。

リツクマース、ヨハン。退役騎兵大尉。一八八一年五月七日生。

シオイブネル・リヒター、マツクス・エルグイン。工學博士。一八八四年一月九日生。

シトランスキー、ローレンツ・リッター・フォン。技師。一八九九年三月十四日生。

ヴォルフ、ウィルヘルム。商人。一八九八年十月十九日生。

謂はゆる國民的政體は、これらの死せる志士達をば、共同の墓場に埋むることを拒んだ。

それ故に私は今、その共同の記念の爲に、本書第一巻をばこれらの死せる同志達に捧ぐるものである。願くばこれらの同志諸君達に於かれては、本書の血の證人として、永く我々の運動の同志達の先頭に立ち、その行手を照し示されんことを。

一九二四年十月十六日。

レッヒ河畔ランズベルグ要塞監獄にて

アドルフ・ヒトラ―

『マイン・カンフ』を特徴付ける以上の同書巻頭兩文に見るが如く、此の書は獄中で書かれたものであり、而も無縁の徒乃至局外者 (Freunde) に寄せて書かれたものではなく、彼等の運動の關係者

であり、而も無縁の徒乃至局外者 (Fremde) に寄せて書かれたものではなく、彼等の運動の關係者

(Anhängen) に向けて書かれたものであり、特にその第一巻はミュンヘン事件に斃れたる十六名の同志の靈に捧げられたものである。

然らばミュンヘン事件とは何か？ 簡單乍らもミュンヘン事件に就いて語ることは、此の書の性質及び由來を一層ヨク明らかにするものと思はれる。何故ならば『ビーヤホル革命』だの『ビールの泡革命』だのと曾つて反對黨に依つて異名され馬鹿にされたこの事件こそは、ヒトラーをして、今日尙ほ同じく生き残つてゐるゲーリング其他の數多の同志と共に、獄舎に投ぜしめたものであり、其處で此の書を書かしたものであるからである。

それは一九二三年十一月のことであつた。ヒトラー等が正式に、『國民社會主義ドイツ労働者黨』を標榜して運動を開始したのは——因にそれまでの約一年間は單に『ドイツ労働者黨』として活動してゐた——一九二〇年の新春であつたから、正式立黨後都合滿四年目であつたわけであるが、豫ねて社會民主黨及び中央黨から成るベルリン中央政府の覆滅を期してゐたヒトラー一黨は、同じくバワリア州に居住せる前大戰に於ける獨逸陸軍の大立物の一人ルーデンドルフ將軍を擁して、先づバワリア獨立を企て、ミュンヘン某所にバワリア政府首腦者の集合せるを襲ひ、これをしてバワリア獨立を誓はしめると共に、直ちにその必要な行動に移つたのであつた。然るにバワリア政府首腦

者達は——因に當時のパワリア政府は、中央黨のパワリア分身たる或ひはパワリアの中央黨に外ならぬ『パワリア國民黨』を中心として組織されてゐた——その夜の中にヒトラー等との約束を破り、ベルリン中央政府に急援を求め、直ちに軍隊及び警察を動員してヒトラー等を彈壓したのであつた。呼應する筈であつたパワリア政府が、逆にこれを武力鎮壓の舉に出たのである。これが爲にヒトラー等の示威行進は、各所に官憲及び軍隊と衝突し、その包圍射撃を受け、遂に前掲の十六名の即死者を出した外に、數多の負傷者を出し、ヒトラーも負傷し捕へられて、五ヶ年の禁錮刑に處され、前掲文に見るランズベルグ要塞監獄に投ぜられたのであつた（一年許りで出獄）。そして悲憤悲涙に咽びつつ綴つたのが此の書『マイン・カンプ』なのである。

この書が謂はゆる『善良』なものや『健全』なものであり得ないことは元より、屢々言はれるが如き單なる『豫言の書』でもあり得ないことは、以上によつても明らかであらう。

二 同書兩卷の構成概容

問題の『マイン・カンプ』は一の革命IIドイツ國民社會主義革命の爲に書かれたものであり、そ

問題の『マイン・カンフ』は一の革命ドイツ國民社會主義革命の爲に書かれたものであり、その爲に必要とされる種々の究明乃至解明を以つて同書の生命と成すものであることは、上述の如くである。従つて同書を眞に知らんと欲すれば、我々の研究もまた當然右の觀點から、その生命とする所に向けて進められねばならぬ。

勿論人々は今日、この書に對して、その關心の重點を何處に求むるかは自由である。賢明な爲政者諸君は、一の國家主義社會主義革命を説けるこの書の中にも、凡そそれとは縁遠い或ひは全く反對の方向の糊塗方法乃至偽瞞方法のみを見出すことが出来るであらう。惻かな立身出世主義者諸君は、御誂への時局便乗、轉向粉飾の方途乃至便辭を見出し得るであらう。斯かる事はこの書の著者ヒトラーの最も排撃し輕蔑してゐる所であるが、一定の社會、一定の時代に於いては、斯かる事もまた謂はゆる『自由』であり、免れない所であるのだ。それ故にこそ、ドイツに於いても『革命』が、國民社會主義革命が遂に必要だつたのである。革命とは、何よりも先づ第一に、斯かる事及び斯かる徒輩を掃倒することであるのだ。

然しこの書はまた、さうした歪曲の意味に於いてでなくても、種々の異つた觀點から研究され得る。例へば、『英譯本 (Dietrich) なる者の抄譯』は——因に英譯も二つ三つ出て居るらしいが——その廣告文の中に次の如く言つてゐる。『ヒトラーは何故ユダヤ人をいぢめるか？ ヒトラーは何

故オーストリアが欲しいか？ ヒトラーは果して植民地を欲するか？ ヒトラーはロシアと戦ふであらうか？ ヒトラーがその同盟しようと考へてゐる相手國は何處か？ ヒトラーはフランスをどう考へてゐるか？ ヒトラーが今や獨裁者として爲しつゝある事、その追求しつゝある政策は、嚴にこの書の中に述べられてゐる。』と。斯かる觀點から、或ひは斯かる關心を主として、『マイン・カンフ』を読むことも自由であり、可能であり、また有用なこともある。我々の研究も斯かる注意を逸すべきではなく、また逸しないであらう。

が、單に斯かる觀點から『マイン・カンフ』を読むならば、この書の眞髓は遂に理解されないであらう。従つてまた、今日のドイツといふもの、ナチスといふもの、ヒトラーといふものは、眞に知り得ないであらう。

私が斯かる事を敢へて言ふのは、凡て物事は端緒が最も肝要と思はれるからである。前にも言へる如く、この書は極めて多くの事を書いてゐる。ドイツ語の達者な諸君が直接原本に就いて讀むにしても——外國語などの餘り達者な人間は元來ウスツペラで、上滑べりして、却つてダメなものであるが——謂はゆる『林に入つて樹を見て森を見ず』で、その方向乃至その全體の生命とする所を見失ふ惧れがある。曾つて我國には、マルクスを讀んでマルクスを知らぬマルクスかぶれを數多輩

あるが——謂はゆる『林に入つて樹を見て森を見ず』で、その方向乃至その全體の生命とする所を見失ふ惧れがある。曾つて我國には、マルクスを讀んでマルクスを知らぬマルクスかぶれを數多輩出した。我々は『マイン・カンフ』研究に當つて、斯かる無用の道化沙汰乃至混迷を避ける爲にも、豫め同書の本質及び構成内容を大體呑込んで掛る必要がある。これを知れば、既に『マイン・カンフ』は半ば征服せるものである。後はお互ひの魂の問題、性格の問題——ヒトラーに言はせれば Instinkt (本能) の問題——である。

『マイン・カンフ』の本質とする所——生命とする所——革命的目的乃至性質——に就いては既に述べた。同書の構成體系は大體次の如きものである。

第一卷『一の清算 (Eine Abrechnung)』は、その大體に於いて、『批判篇』又は『反省篇』とも名付け得べきものであつて、主として、彼れが國民社會主義運動を始めるに至れるまでの經歷、體驗及びその根本思想に就いて述べたものである。第二卷『國民社會主義運動 (Die nationalsozialistische Bewegung)』は、謂はゞ『建設篇』又は『組織篇』とも名付け得べきものであつて、主として、彼れの戦ひの積極的理念及び方法並びに彼れの政策に就いて述べたものである。即ち私が第一卷(前篇)を以つて『批判篇』となし、第二卷(後篇)を以つて『建設篇』となす所以である。念の爲に左に先づ同書の目次構成を紹介する(括弧内の數字は原本の頁を示し、太字の個所はその比較的長論個所を示す)。讀者諸氏に於いてはこの内容目次をば、本研究の進行途上時々參照して頂き度い。

第一卷 一の清算

序言 題寄

- 第一章 兩親の家にて (S. 1-17)
- 第二章 ウインの修業苦難時代 (S. 18-70)
- 第三章 私のウイン時代よりする一般政治的諸考察 (S. 71-137)
- 第四章 ミュンヘン (S. 138-171)
- 第五章 世界大戦 (S. 172-192)
- 第六章 戦争宣傳 (S. 193-204)
- 第七章 革命 (S. 205-225)
- 第八章 私の政治活動の始まり (S. 226-235)
- 第九章 『ドイツ労働者黨』 (S. 236-244)
- 第十章 崩壊の原因 (S. 245-310)
- 第十一章 國民と種族 (S. 311-363)
- 第十二章 國民社會主義ドイツ労働者黨の創生時代 (S. 363-409)

第二卷 國民社會主義運動

- 第一章 世界觀と黨 (S. 409-424)

第一章 世界觀と黨 (S. 409—424)

第二章 國家 (S. 425—457)

第三章 國籍者と國民 (S. 458—491)

第四章 個人性と民族的國家觀 (S. 492—503)

第五章 世界觀と組織 (S. 504—517)

第六章 初期の戦ひ—演説の重要性 (S. 518—537)

第七章 赤色戦線との闘争 (S. 538—567)

第八章 強き者は孤獨にして最も強し (S. 568—578)

第九章 突撃隊 (S. A) の意義及び組織に就ける基本觀念 (S. 578—620)

第十章 假面としての聯邦主義 (S. 621—648)

第十一章 宣傳と組織 (S. 649—669)

第十二章 勞働組合の問題 (S. 670—687)

第十三章 戦後に於けるドイツの同盟政策 (S. 688—725)

第十四章 東進乃至東方政策 (S. 726—758)

第十五章 權利としての正當防衛 (S. 759—781)

結 語 (S. 782)

『批判篇』(前卷)と謂ひ、『建設篇』(後卷)と謂ふも——或ひは原本で言へば『一の清算』(第一卷)と謂ひ、『國民社會主義運動』(第二卷)と謂ふも——元より大體の區別に過ぎない。第一卷と

雖も批判的記述のみを事として居るのではなく、第二卷と雖も建設的議論のみをして居るわけでもない。元來この二つのもの『批判と建設』とは不可分のものであり、『マイン・カンフ』の場合に於いたるドイツ建設の方針が或る程度まで示されて居り、第二卷の内外政策を論ぜる中には、既に新政策に對する痛烈な批判が示されてゐる。が、その間には、自らその主としてゐる所に相違がある。我々はこの相違に基づき、第一卷を以つて批判的究明乃至記述を主とせるもの、第二卷を以つて建設的解明乃至論述を主とせるものとなし、理解の便宜上、前者を『批判篇』、後者を『建設篇』とするのである。原著者が第一卷に『一の清算』と題し、第二卷に『國民社會主義運動』と題してゐるのも、同様の意圖及び理由に出づるものであらう。

第一卷 (批判篇)

前掲の第一卷全十二章、第二卷全十五章は更に、同じく理解の便宜上、それぞれ次の三大系列に整理統合され得る。而して私は大體この順序を以つて本研究を進めんとするものである。

幼少時代よりウイン流離時代までの論述

前世界大戰よりドイツ敗戦に至るまでの論述

舊ドイツ崩壊より黨運動開始に至るまでの論述

第一卷（批判篇）

前時代よりウイン流離時代までの論述

前世界大戦よりドイツ敗戦に至るまでの論述

舊ドイツ崩壊より黨運動開始に至るまでの論述

第二卷（建設篇）

世界觀乃至國家觀に就いての論述

運動の組織乃至方針に就いての論述

政策殊に對外政策に就いての論述

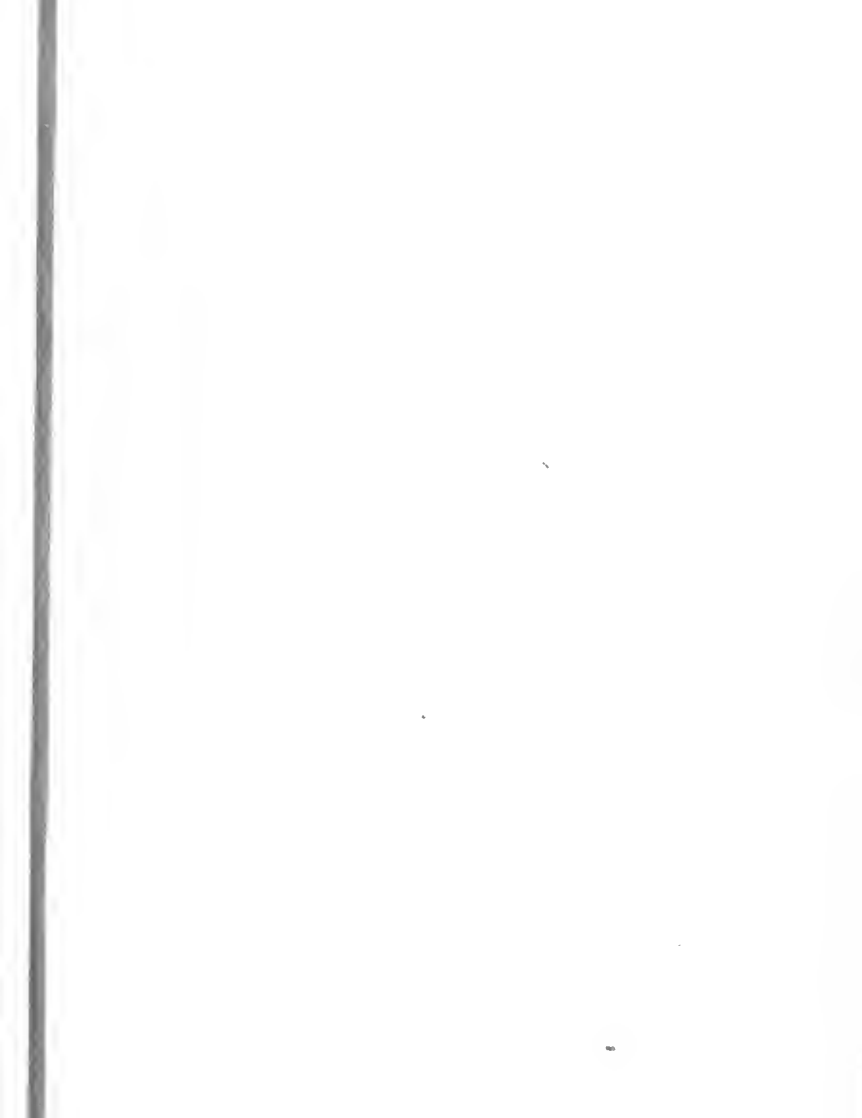
『マイン・カンフ』前後兩卷の構成及び關係は、大體以上の如きものである。若し人々が、第二卷が種々の積極的建設的論述をなしてゐるのを見て、これを第一卷よりも重要なりとするならば、それは一の間違ひたるであらう。假りに同書を一の建築に譬へるならば、第一卷は基礎工事、第二卷は上部構築と謂ふことが出来る。亦これを一の植物に譬へるならば、前者は根、後者は幹と見做すことが出来る。従つて若し人々が、第一卷に説いてゐる所を無視乃至輕視して、専ら第二卷に説いてゐる所を云々乃至眞似するならば、それは畢竟するに基礎工事なき上部構築、根なき幹に終るであらう。前者に説くが如き精神及び經歷の持主にして始めて、後者に説くが如き主張乃至企圖も生きたものたり得るのである。

而して私は、以下、出来るだけ、眞實の『マイン・カンフ』研究、その急所探求の案内役を勤めるであらう。

『マイン・カンフ』引用原文に就いて

これより愈々『マイン・カンフ』内容の研究に入り、多々益々同書の論述を引用する次第であるが、我々の同書譯文は逐字譯し嚴密譯を旨とし、一字一句も疎かにせず、以つてヒトラーの個性乃至持味を表はすに努めた。これが爲にその譯文は、多かれ少かれ難澁に陥るを免れず、讀者諸君には一寸讀みにくい、かも知れないが、暫らく我慢して讀んで行つて欲しい。その中に慣れて却つて味ひ深くなるであらうと信ずる。尙ほ我々の『マイン・カンフ』譯出には、一九三〇年版、一九三三年版、一九三九年版の三版を使用した。而してこの約十年に亘る三版の間には、明らかに異植と思はれる以外には、何等の本質的相違乃至屢々我國に傳へられてゐるが如き何等の削除も無かつた。併せて茲に附記して置く。

前
篇
批
判
篇



第一章 生立ちの點檢

一 運命の地ブラウナウ

凡て物事は最初が困難であり問題である。全發展の方向は既に茲に何持決定されてゐると言つて宜い。善かれ悪しかれ同じく一世を風靡せるマルクスの『資本論』は『商品の分析』を以つて始つたのであつたが——因に、『資本論』と『我が戦ひ』を對比されることは兩著者共に不本意であらうが、マルクス主義とヒトラー主義とは世界的に一大對蹠的な存在たる今日、これも亦一の免れ難き批評と言ふべく、兩著者ともその對比的批評を暫らく甘受すべきであらう——ヒトラーは其著『マイン・カンフ』をば何を以つて始めてゐるか？ 彼れは自らの生立ち——その人間的及び思想的生立ちの記述を以つて始めてゐる。

『私は今日、運命が私にその生誕の地をイン河畔ブラウナウに與へたことを奇しき幸ひと考へてゐる。蓋し、この小さな町は二つのドイツ國家（譯者註・ドイツ本國とドイツ・オーストリア即ちドイツ民族が

ら成る戦後のオーストリアを意味す」の境界に位して居り、この二つの國家を再び結合せしむることこそは、少くとも我々若き者にとつては、凡ゆる手段を盡して遂行せねばならぬ生涯の任務と思はれるのだ。ドイツ・オーストリアは再び母國大ドイツに復歸せねばならぬ。而もそれは決して、何等の經濟的關係を打算しての理由からでもない。否、否、假令それは經濟上から見てもどうでも宜からうとも、或ひは實に有害でさへあらうとも、この結合は行はれなければならぬ。血を同じうする者は、一の共同の國邦に、屬すべきなのだ。ドイツ國民は、その己れの子供達を共同の一國家に抱擁し得ざる限り、植民政策的活動に對して何等の道德的權利をも有しない。ドイツ國の境界がドイツ人の最後の一人までも收容し、而してこれに最早その扶養の保證を與へることが出来ない時に、その時に始めて自國民の危殆といふことよりして、他國の土地を獲得すべき道德的權利を生ずるのである。その時にこそ、鋤も劍となり、その戦ひの涙からは子孫の爲の日々の糧が生じて來るのである。さればこの小さな國境の町は、私には一大使命の象徵の如く思はれるだ』(G 1)

これが『マイン・カンフ』の冒頭である。この冒頭句の中に既に、ヒトラーの全人となり及び全思想が壓縮されて示されて居ると言つて宜い。彼れは、かの古き意味に於ける何等の『神の使徒』でも『天の使徒』でもない。飽くまで『人間の使徒』であり、『血を同じうする者(民族)の使徒』である。

これが『マイン・カンフ』の冒頭である。この冒頭句の中に既に、ヒトラーの全人となり及び全思想が壓縮されて示されて居ると言つて宜い。彼れは、かの古き意味に於ける何等の『神の使徒』でも『天の使徒』でもない。飽くまで『人間の使徒』であり、『血を同じうする者（民族）の使徒』である。

彼れの信ずる者は精々『運命』であり、人類の道義である。勿論彼れも、後に見るであらう如く時々『神』を云々し『天』を云々してゐる。然しそれは結局比喩以上のものではない。彼れにあつては恐らく、『天』も『神』も人間と共に人間の内に存在するものであり、自然及び人間の合理性以上のものではない。従つて人間に合理的にして必要なる事は、『神』の求むる所であり、『天』の命ずる所である。而して歴史は自然と人間が作るものである。それ以上のことは、歴史の不思議な運り、合せ、即ち運命たるものである。——そして彼れはその歴史の不思議な運り、合せに依つて、『二つのドイツ國家』たるドイツとオーストリアの國境に生れたのである。何よりも先づこの二つのドイツ國家を一つに結合せしめねばならぬといふこと、血を同じうする者は同一の國家を形成すべきだといふこと、ドイツ國家がドイツ人の最後の一人までも收容して、共に一生懸命に働き、それで尙ほ喰へなかつた時に、始めてドイツ國民は外に向つて土地を要求する權利を持つのだといふこと、それをば彼れは、『天』や『神』の關係に於いてではなく直接人間、自體の關係に於いて『運命』としてこれを把握し、これが達成を以つてその與へられたる『使命』としてゐるのである。而して『その時にこそ、鋤も剣となり、その戦ひの涙からは子孫の爲の日々の糧が生じて来る』と言ふのである。

〔註一〕茲に我々はヒトラーの思想の近代性を見ることが出来る。ルネサンス以前の政治思想に於いては、斯かる使命は大抵『神』又は『天』の名に於いて把握されたものである。然るにヒトラーは流石に、自由主義・マルクス主義以後の思想家だけあつて、斯かる反歴史的な把握に陥らず、端的にこれを人間の歴史的關係に於いて把握してゐるのである。

〔註二〕ヒトラーがブラウナウに生れたは一八八九年四月二十日であつた。而して彼れがこの書を書いたのは、ミュンヘン事件後の一九二四年、獄中に於いてであるから、當時數へ年三十六歳であつたわけである。

ヒトラーにとつて運命の地ブラウナウといふ所は、可なり詳しい地圖でなければ、地圖にも容易に出て來ない小さな町であるが、ドイツ人の間、或ひは少くともヒトラー等の愛國主義者の間では、一の愛國殉教事件を以つて以前から名高かつた所らしい。彼れはこの町に就いて更に次の如く記して居る。

『それ許りでなく、更に別の點に於いてもこの町は、我々の今日の時代に高く聳へて警告を與へてゐる。今から百餘年前、この眼にも留らぬ小さな町は、全ドイツ國民を湧き立たしむる悲劇的災禍の舞臺として、少くともドイツ年代記の上に不朽の名を留むべき榮譽を持つたのであつた。我が祖國の最も甚しき屈辱の時（譯者註）ドイツが佛國ナポレオンの鐵蹄下に蹂躪された時を意味す』一介の書籍商にして頑強な

今から百餘年前、この眼にも留めぬ小さな町は、全ドイツ國民を湧き立たしむる悲劇的災禍の舞臺として、少くともドイツ年代記の上に不朽の名を留むべき榮譽を持つたのであつた。我が祖國の最も甚しき屈辱の時（譯者註―ドイツが佛國ナポレオンの鐵蹄下に蹂躪された時を意味す）一介の書籍商にして頑強な

「ナイオナリスト」たりフランスの反對者たりしニールンベルグのヨハンネス・バルムは、その不幸の時に於いても尙ほ愛して已まなかつた祖國ドイツの爲に、この地ブラウナウに竊れたのであつた。彼れは、彼れの共犯者ヨリ正確に言へばその主犯者達レオ・シュラーゲル等の名を明かすことを頑として拒否した。而も彼れも亦シュラーゲル等と同じく、或る政府當局者に依つてフランスに密告されたのであつた。アウグスブルグの警視總監はこのあさましき手柄を立て、後のゼーヴェリング君の國家に於ける新ドイツ官廳の模範を示したのであつた。（譯者註―ゼーヴェリングといふ人物は、戦後のドイツに多年内相を勤め警察權を一手に掌握し、ヒトラー等を盛んに彈壓した男で、社民黨切つての腕利きと謂はれた同黨の領袖である。確かナチス把權前に死んだ筈である。）

このドイツ殉教の光輝を以つて飾られたるイン河畔の小さな町に、前世紀の八十年代の終り頃、血統的にはバワリアに屬し、國籍的にはオーストリアに屬して、私の両親が住んでゐたのである。（『ジー』）

ブラウナウがヒトラーの生涯構成にどれだけ影響したか、果して彼れが他の場所に生れたならば今日の彼れで無かつたかどうかは、時代が英雄を作るか英雄が時代を作るかの問題と共に、一個の問題である。が、兎に角、彼れはその出生の地を斯かるものとして把握してゐる所に、彼れの世界觀乃至人生觀が既に窺はれるであらう。

二 幼少時代のヒトラー

運命の地Ⅱ二つのドイツ國家の國境に生れた彼れは、それからどうであつたか？ 彼れの幼少時代は如何なるものであつたか？ これに就いては主として彼れ自身に語らせる。彼れは先づ兩親殊に父なる人に就いて次の如く語つてゐる。

「父は忠實なる官吏として勤め、母は家政に専念し、何よりも先づ我々子供達を何時も變らぬ慈愛を以つて育ててゐた。この頃のことは、私の記憶にはホンの僅かしが残つてゐない。といふのは、數年ならずして父は、この住み馴れた國境の町を去つて、イン河畔の下流へと下り、バツサウで新たな地位に就かねばならなかつたからである。即ちドイツ本國へと移り住むことになつたのである。

當時のオーストリア税關吏の身の上といふものは、全く「浮草」の如きものであつた。その後幾許もなくして父はまたリンツへ廻され、其處で恩給について退職した。だが、この退職も年老いた父にとつては謂はゆる「休養」を意味するものではなかつた。父は既にその子供の時から、貧しい小さな水呑百姓の子として家に安閑としてゐることが出来なかつた。曾つて彼れは、當時未だ十三歳にも充たない幼き身を以つて、背囊を背負ひ故郷ヴァルドフィアテルを飛び出したのであつた。「経験」ある村人の諫めも肯かず、

謂はゆる「休養」を意味するものではなかつた。父は既にその子供の時から、貧しい小さな水呑百姓の子として家に安閑としてゐることが出来なかつた。曾つて彼れは、當時未だ十三歳にも充たない幼き身を以つて、背嚢を背負ひ故郷ヴァルドフイアナルを飛び出したのであつた。「經驗」ある村人の諒めも背かず、

ウィンへと漂泊ひ行き、其處で或る手仕事を習ひ始めた。それは前世紀の五十年代のことであつた。僅か三グルデンの旅費を持つて、目當もなしに世間に飛び出すとは、全く悲壯な決意であつたに相違ない。十三歳の少年の彼れが十七歳になつた時には、既に一人前の職人の修業を了へてゐた。然し彼れはそれに満足することが出来なかつた。寧ろ反對であつた。當時の彼れの長い間の窮乏、絶えざる辛苦艱難は、彼れをしてその折角の手仕事をばまた廢めて、何かモット「高級」なものに成らうとの決心を固めしめた。曾つて村に居た頃の貧しき少年の彼れには、牧師様こそは人間の達し得る最高の者と思はれたのであつたが、今や人の視野を著しく擴大させる大都會に來てからは、官吏といふ職こそ最高のものと思はれるに至つた。困苦と艱難の爲に半ば子供にして既に「老成」せる者の不屈の精神を以つて、この十七歳の若者は、彼れの新たな決心へと凝り進んだ。——そして遂に官吏となつたのであつた。確か・約二十三年の後に漸やく目的が達せられたと記憶する。何か一かどの者になるまでは斷じて懐かしい故郷の村にも歸るまいと、曾つて貧しき少年の身を以つて心に愈じた祈願の條件も、今や實現されたかに見えた。

目的は今や達せられた。が、故郷の村では、誰も最早この昔の少年を思ひ出すことが出来なかつた。また彼れ自身も既に、村に親しみ無き者となつてゐた。

父は前述の様に五十六歳にして遂に退官したのであつたが、然しそれから彼れは一日として「無爲の人」として過すことが出来なかつたのであらう。彼れは上オーストリアの小さな市場町ラムバッハの近くに土地を買つて耕作を始めた。斯くて彼れは、長い間の困苦に充ちた生活を廻り廻つて、再び父祖の業(百

姓」へと立ち歸つたのであつた。』(p. 133)

百姓から出て百姓へ——これがヒトラーの父なる人の生涯であつた。而してこの父の百姓復歸のラムバッハ時代から、ヒトラーの『理想』乃至『思想』が漸次形成され始めた。これはヒトラーの National-socialismus の思想形成の道行、即ち單なる Nationalist (國民主義者) から更に Socialist (社會主義者) にまで成り、遂に National-socialist (國民社會主義者) とまでなつた思想的道行を、後に明らかにする上に重要と思はれるので、左にこの時代に就いての叙述を引用して見る。Nationalist の萌芽は既にこの時代に開始してゐる。

『この時代に私の最初の理想が形成された。當時、戸外を駆け廻ることの多かつたこと、學校までは道も遠かつたこと、殊に母が幾度となく心配して已まなかつたほど極めて臆白な子供達と交際してゐたこと等は、私をして、先づ何よりも、閉じ籠り屋以外の者たらしめずに置かなかつた。従つて私は、當時尚ほ自分の生涯の職業などに就いては殆んど何も考へて居なかつたが、然し兎に角、私の父の様な經歷には最初からどうしても共鳴出来なかつた。私は當時既に、級友達との間に行つた多かれ少かれ激烈な討論の中に、私の演説の才能が自ら修練されてゐたと信ずる。私は小さな首領となつてゐた。この小さな首領は、學校

分の生涯の職業などに就いては殆んど何も考へて居なかつたが、然し兎に角、私の父の様な經歷には最初からどうしても共鳴出来なかつた。私は當時既に、級友達との間に行つた多かれ少かれ激烈な討論の中に、私の演説の才能が目ら修練されてゐたと信ずる。私は小さな首領となつてゐた。この小さな首領は、學校

に於いては樂に且つ當時は極めて熱心に、勉強したのであつた。が、それ以外では、可成り手に餘る代物であつた。私は、開た時にはラム・バツハの僧院で唱歌を教はつたので、教會の素晴らしい儀式の莊嚴さに陶醉するの絶好の機會を屢々得た。その爲に、曾つて私の父にとつて村の牧師様が最高の理想であつたと同様に、當時私にとつて長老様こそは求むべき最高の理想と思はれたのも、無理からぬことであつた。實際少くとも一時は、私は斯うした考へに囚はれたのであつた。然し父は、疊にその子の論争好きなを見て、その爲に別にこれぞと言つて子供の將來の爲に何か有利な判断を下してやるほどに、その辯舌の才能を高く評價することが出来なかつたと同様に、今また長老様にならうといふ少年らしい考への起つたのを見ても、勿論これを理解して呉れるべくもなかつた。父は、私のこの性格上の分裂をばたき氣遣ひ乍ら見守つてゐた様であつた。

果して實際にまた、この私の長老様にならうといふ一時の憧れは間もなく消え失せて、私の氣性にヨリ良く適合した希望が代つて現れて來たのであつた。私は父の藏書を掻き廻してゐるうちに、軍事に關する色々の本を發見した。その中に、一八七〇——七一年の獨佛戰爭に關する普及版もあつた。それは同戰爭當時の出版物で、二巻から成る挿繪入りのものであつた。この本は今や私の愛読書となつた。そしてその偉大な英雄的闘争は、やがて私の最大の内部的精神的經驗となつたのであつた。この時から私は、戦争乃至軍人に何等かの關係を有する凡ゆる事柄に對して、益々熱中するやうになつた。

然しこのことはまた、私にとつては、別な點からも重要な意義を持つものたらざるを得なかつた。私

は、勿論尙ほ甚だ不明瞭な觀念に於いてではあつたが、茲で始めて次の如き疑問に襲はれて來た。この戰へるドイツ人と、然らざるドイツ人との間に、何か相違が有るのであらうか？ 有るとすれば、如何なる相違が有るのか？ 一體、何故に、オーストリアもこの戰爭にドイツ人と共に戰はなかつたのか？ 何故に私の父や其他の凡てのオーストリア人もこれに参加しなかつたのであるか？

そもく我々は、他の凡てのドイツ人と同じドイツ人ではないのか？

我々は、一體、元來皆一緒のものではないのか？ この問題が始めて私の小さな頭を掻き亂した。而して私は、この哀切なる疑問に對して、次の様な答へを聞かなければならなかつた。必らずしも凡てのドイツ人は、ビスマルクのドイツ國に屬するの幸福を有するものではない、と。

それは何故であるか、私はこれを理解することが出来なかつた。(p. 61—5)

三 斷じて官吏たらず

少年時代のヒトラーを物語る一つの好個のエピソード（挿話）は、彼れ自ら記してゐる所の・職業の選擇に『官吏か畫家か』に就いての父との争ひであらう。斯かることは何處にも有り勝ちのことであつて敢て異とするに足らぬ所であるが、ヒトラーの場合に於いてはそれが可なり深刻なものであり、その爲には父は憤死ではないが、少なくとも大なる憂ひを残して突如死んで居るのであ

業の選擇Ⅱ『官吏か畫家か』に就いての父との争ひであらう。斯かることは何處にも有り勝ちのことであつて敢て異とするに足らぬ所であるが、ヒトラーの場合に於いてはそれが可なり深刻なものであり、その爲には父は憤死ではないが、少なくとも大なる憂ひを残して突如死んで居るのである。と共に、これも、單に親子の謂はゆる『新舊思想の衝突』と見らるべきではなく、古き Nationalism と新たななる Nationalismus との衝突と見らるべきものである。以下ヒトラー自身をして語らせる。

『私は勉強せねばならなかつた。』

父は私の性格全體から見て、殊に私の氣質から見て、文科系統の中學校は元來私に不向きなものと結論し得ると考へたのであつた。父には、寧ろ、實業學校の方が私に適する様に思はれたのであつた。殊に私に圖畫の才能が明らかに現れてゐるのを見て、父は一層この意見を強くした。父の確信に依ると、圖畫はオーストリアの中學校では全く輕んじられてゐるものであつたのだ。然し父をして斯かる意見を抱かしめたに就いては、恐らく、父自身のこれまでの生活上の苦勞も與かつて原因してゐた。その苦勞の経験が彼れをして、在來の基本學科を非實際的なものと思はしめ、比較的輕くこれを評價せしめたのである。然しその根本原因は、矢張り父は、彼れの息子も彼れと同様に當然官吏たるべきであり、是非さうさせねばならぬといふ意向を持つてゐたことであつた。父は自分の少年時代の苦勞を思ふにつけても、その後には彼れの官吏の地位をば、それが全く彼れの鐵の如き不屈の勤勉と自らの實力との結果に他ならなかつただけに、人一倍偉いものに考へたのは、全く無理もないことであつたのだ。この父の自力成功者の自負が彼れをして、その息子をも自分と同等の・出來るならば勿論それよりもモット高い・社會的地位に就かせた

いものと、考へさせたのである。殊に父は、彼れ自らの勲勉に依つて今や、その子の立身をヨリ容易ならしめ得るに至つてゐただけに、一層その感を強ふるのであつた。

父には、曾つて自分がその爲に全生涯を捧げた程のものが、まさか子供に依つて拒絶されようとは、どうしても考へられないことであつた。従つて父の決心は單純であり鞏固であり、明瞭であつて、彼れ自身の眼からすれば言ふまでもない自明のことであつた。それにまた、最後に、全生涯に亘る苦しい生活闘争に依つて厳しくなつてゐた父の性格にとつては斯かる事柄の最後の決定を、自分から見れば全く無經驗な子供自身に委せるなどといふことは、到底許し得る所ではなかつたのだ。又そんなことをさせては、子供の今後の生活に對して、父として彼れの有する權威と責任とを遂行する上に、甚だ宜しからざる忌むべき結果を齎らすものと考へられ、父の從來の職務遂行の觀念にも適合し得ないものであつた。

而も、それにも拘はらず、遂に、父の考へとは異つた事態に立ち到らざるを得なかつた。

當時私は、十一歳になつたかならぬか許りであつたが、生れて始めて父への反對を餘儀なくされた。父は、その一度心中に定めた計畫乃至目論見をば、飽くまで頑固に斷乎として押通さうとした。然し彼れの子供もまた、自分に全く合はない或ひは少ししか合はない考へを拒否するに頑固であり強情であつた。

私は官吏になどなるものかと思つた。種々の説得も「厳しい」叱責も、私の反對を毫も動かすことは出来なかつた。私は官吏にはなるまいと思つた、斷じて、斷じて、なるまいと思つた。父は、自分の生涯を細々と話して聞かせ、官吏の職業に對する私の愛好や熱心と呼び起さうとしたのであつたが、その試みは

自分は全く合はない、或ひは少ししか合はない考へを拒否するに頑固であり強情であつた。

私は官吏になどなるものかと思つた。種々の説得も「厳しい」叱責も、私の反對を毫も動かすことは出来なかつた。私は官吏にはなるまいと思つた、斷じて、斷じて、なるまいと思つた。父は、自分の生涯を細々と話して聞かせ、官吏の職業に對する私の愛好や歡心と呼び起さうとしたのであつたが、その試みは却つて悉く反對の効果を來たした。自由の無い人間としてひたすら役所の室の中に坐つて居らねばならず、且つ自分の時間も自由に使用することが出来ないで、一定の命ぜられた型の中へ自己の全生涯の内容を當嵌めて行かなければならぬといふやうなことは、考へても私には全く欠伸の出るほど不愉快なものであつた。

このことは又、正に他のあらゆる者ではあり得ても、少なくとも世間の謂はゆる「柔順しい」子供でなければなかつた私に、果していかなる考へを起させたであらうか？ 學校の方はお話にならぬほど樂だつたので、私は室に居るよりも外で太陽の下に飛び廻つて居る方が多かつたほど、多くの暇な時間があつた。若し今日、私の政敵が、御親切にも、注意深く私の生涯を當時の少年時代に至るまで仔細に吟味して、この「ヒトラ」が少年時代既に如何に我慢ならぬ悪戯を行ひ居つたかを、心ゆくまで明瞭にして呉れるならば、私は幸福なりし當時の思ひ出でから今日でもなほ興へられるもののあることを、天に感謝するものである。草原や森は、當時絶ゆる間ともなかつた父との「對立」が何時もその憂さの遣り場を見出したところの私の演武場であつた。

愈々實業學校へ通ふやうになつても、この状態には殆んど變りなかつた。

而も今度は更に、新たな對立まで必然的に起つて來た。

私を官吏にしようといふ父の意向に對して、官吏の職そのものに對する私の主義としての嫌惡が對立してゐただけの間は、この衝突はまだまだ我慢の出来るものであつた。その限りでは、私は自分の考へを獨

り心に秘めてデット抑へてゐることも出来、必らずしも口に出して異議を申立てる必要もなかつた。將來斷じて官更などにはなるまいぞと自分で秘かに固く決心するだけで、心を完全に落付けるに充分であつた。この決心をば私は絶えず持ち續けて居た。ところが、父の計畫に對して私自身の一つの計畫が立ち現れるに及んで、問題はむづかしくなつた。これはすでに十二歳の時に初まつた。どうしてそんな氣になつたかは今では自分ながら分らないのであるが、ともかく或る日のこと、私は畫家に、美術家になるべきだといふことをハッキリと考へた。私の圖畫の才能は實際確かなものであり、父が私を實業學校へ出したのも一つは正にその爲でさへあつたのだ。然し父はそれだからといつて、私を本職の畫家に仕上げようなどとは、恐らく夢にも考へて居なかつた。寧ろ反對であつた。或る日、私が父の希望を改めて拒否した後で、それならお前自身では一體何になりたいと思ふのかと始めて質問され、私が殆んど躊躇する所なしに堅い決心を始めて突然口に出した時、父は驚いて暫らくは口も利けなかつた。

「畫家に？　美術家に？」

父は私が果して正氣なのか否かを疑つた。或ひは聞き誤りではないか、誤解ではないかとも思つたらしかつた。が、それが確かにほんとうであるかと分り、而も私の意圖の熱烈なるを知つた時、父は頭から斷乎として反對した。父の決断はその場合全く單純であつた。私に實際に具はつてゐる才能を何んとか考慮するなどいふことは、その場合全然問題にならなかつた。

「美術家になど、わしの眼の黒いうちには斷じて許さない。」と言ふのであつた。が、彼れの子供も、恐ら

斷乎として反對した。父の決断は、その場合全く單純であつた。私に實際に具はつてゐる才能を何んとか考
慮するなどいふことは、その場合全然問題にならなかつた。

「美術家になど、わしの眼の黒いうちは斷じて許さない。」と言ふのであつた。が、彼れの子供も、恐ら

く他の色々の性質と共に、彼れと同じ様に多情な性質をも彼れから受け繼いでゐたので、これも彼れと同
様の頑固な答へを繰返した。たゞ、その答への内容は言ふまでもなく反對なだけであつた。

兩方共に頑張つて譲らなかつた。父は飽くまでも彼れの「斷じて……」を棄てず、私は私の「どうあら
うとも」を言ひ張つた。

この事は勢ひ更に甚だ面白くない結果を來した。老いたる父は不機嫌となり、そして私も亦父を大い
に愛して居ただけに、ひどく氣持ちが悪くなつた。父は、私の將來畫家にして貰ひたいといふ希望をば悉
く拒否した。私は私で更に一步進んで、それならばもう勉強などは一切したくないと宣言した、老いたる
父は今度は膝々親の權威を容赦なく押し通さうと掛り出したので、さうなると私の右のやうな度々の「宣
言」は、その宣言しただけ却つて馬鹿を見ることが必定であつた。そこで私はそれから口は何ごとも言
はず、たゞ凡てを實行の上に移して父を脅かした。私は、父が若し實業學校で私の成績の悪いのを見たな
ら、厭が厭でも私の夢みてゐる幸福へ私を向はせて呉れるであらうと考へた。

この推測が當つてゐたか何うかは私は知らない。兎に角先づ、學校で私が目立つて不成績であつたこと
だけは確かであつた。私は好きな學科だけは勉強した。就中、後日畫家として必要であらうと思はれたも
のは残らず勉強した。反對に畫家として大切でないと思はれたものや、さうでなくても私の興味を餘り惹
かなかつたものは、完全にこれをサボつた。この時分の私の成績は、科目上に於いて又その評點上に於い
てつねに極端から極端を示してゐた。「優」及び「良」に竝んで「可」もあれば「不可」もあつた。地理の

成績は、い、い、い、優劣であり、世界歴史の成績は尙ほそれ以上であつた。この好きな兩科目では、私はクラスで群を抜いてゐた。」

四 若くして既に革命的ナシヨナリスト

ヒトラーは、前記の如くに、官吏を『最上の者』と考へてゐた父と將來の問題に就き激しく争ひ、その爲に學業まで廢さうとした程であつたが、然しこの父との『カンフ』は長くは續かなかつた。何故ならば、この争ひの間に父は突如として、彼れが十三歳の時に、死去したからである。而もその二年後には更にまた母を失ひ、彼れは十五歳にして孤兒となり、曾つて彼れの父が十三歳にして故郷を後にウインへと漂泊らひ出た如く、彼れもまた子供にして『何か一かどの者』に成らうとして——但し官吏以外の——ウインへと漂泊らひ出なければならなかつたからである。

が、さうした事に就いては尙ほ後に見ることにし、茲で我々は、この少年時代即ち右のウインへ出るまでの時代に於ける彼れの思想に就いて見ることにしよう。一言にして言へば、この時代に於つて既に彼れは熱烈な Nationalist であつた。彼れはこの時代を回想して、同じく第一卷第一章『兩親の家に』の中に、次の如く記してゐる。

出るまでの時代に於ける彼れ思想に就いて見ることにしよう。一言にして言へば、この時代に於て既に彼れは熱烈な Nationalist であつた。彼れはこの時代を回想して、同じく第一巻第一章『兩親の家にて』の中に、次の如く記してゐる。

「その後久しい年月を経た今日、當時の成果を改めて眼前に検討して見る時、私は特に重要なものとして次の二つの顯著な事實を見る。

第一に、私は、ナチ、オナリストとなつてゐた。

第二に、私は、歴史を、その意義に於いて、理解し、把握するに至つて居た。

對オーストリアは一の「多民族國家 (Nationalitätenstaat)」であつた。

この事實が斯かる國家に於ける各人の日常生活に對して、如何なる意義を有するかは、畢竟、ドイツ本國の國民には到底——少くとも當時は——理解し得る所ではなかつた。彼等は獨佛戰爭に於けるドイツ軍陸の難民に充ちた凱旋があつてから以後は、日を遂うて益々他國に於けるドイツ民族といふものを疎んずるやうになつて居た。彼等の一部の如きはこれを最早全然尊重することが出来ず、或ひはまた敢へて尊重しようとしなかつた。特に彼等は、ドイツ・オーストリアに關しては、その腐敗墮落せる王朝と、その根底に於いて依然健全なる國民とを、餘りにも簡單に混同したのであつた。

若しオーストリアに於けるドイツ人が實際に優秀な血統でなかつたならば、オーストリアは一のドイツ國家であるといふやうな誤つた考へをドイツの中に起させた程の絶大な極印を、人口五千二百萬の國家(舊オーストリア)に印刻するだけの力は到底持ち得なかつたであらうことを、人々は理解しなかつた。オーストリアは一のドイツ國家であるといふが如き考へは、なるほど重大極まる結果を伴ふ一の妄想ではある

が、然しそれは東部邊境^{オーストリア}一千萬のドイツ人にとつては、一の光輝ある證明でなければならぬ。ドイツ語、ドイツ式學校、ドイツの制度等の爲の、東部邊境ドイツ人の一步も譲らざる不斷の闘争に就いては、ドイツ本國ではホンの僅かの人々しか知らなかつた。今日、自國數百萬の同胞までが同様の痛ましい苦難を押し付けられ、本國から切り離され、外國の支配下に在つて、共同の祖國を夢み憶れつゝ、少くとも神聖なことの何を意味するか、比較的廣く理解されるに至つて始めて、自國民の爲に闘はねばならぬといふの久しきに亘つて、ドイツ本國を正に東方に守備し、ドイツ本國が植民地獲得に没頭して、面前の自らの血と肉とを顧みなかつた時代に於いて、宣撫工作を以つて能くドイツ語國境を守り通した所の、獨ドイツ東部邊境ドイツ民族の偉大さを量り知ることが出来るであらう。

何處でも、而して常に、各凡ゆる闘争に於いて然りであるが如く、舊オーストリアの言語戰に於いても三つの階層があつた。闘争者、中間者、裏切者の三者である。

この相違は既に學校に於いて現はれ初めた。蓋し、その闘ひの波が來たるべき世代の培養地たる學校を恐らく最も強く洗ふことは、一般に言語戰の著しき特色とするところである。この戦ひは子供を日常でと行はれ、子供達に對して次の如きこの闘争の最初の呼掛けが向けられた。

「ドイツの男の子よ、汝はドイツ男兒の一人たるを忘るゝなれ！ ドイツの少女^{キム}よ、汝はドイツの母の一

人たらんことを心せよ」と。

若人の心を知る者は、若人が斯くの如き戦ひの呼び聲にいと喜んで耳を傾けるものであることを理解

して行はれ、子供達に對して次の如きこの闘争の最初の呼掛けが同けられた。

「ドイツの男の子よ、汝はドイツ男兒の一人たるを忘るゝ忽れ！　ドイツの少女よ、汝はドイツの母の一

若人の心を知る者は、若人が斯くの如き戦ひの呼び聲にいと喜んで耳を傾けるものであることを理解し得るであらう。彼等は斯くて、彼等独自の方法と武器とを以つて、百種百様の形態に於いて、その戦ひを展開せんと努める。彼等は非ドイツ的な歌を歌ふことを拒み、ドイツの偉人から遠ざけようとされ、ばされるほど、愈々以つて益々これを崇拜するに至る。食べるものも食べないで貯めた小銭を大人の軍用金にと積み立てる。彼等はドイツ人ならぬ教師に對しては、信じられないほど耳ざとく、同時にまた反抗的である。禁ぜられても自分の民族の徽章を付け、それが爲に罰せられたり打たれたりしてさへも、却つて喜ぶ。斯様に彼等は小さくして既に大人の立派な映懷である。たゞ、往々にして彼等の方が、ヨリ遙長にして且つヨリ正しき心意を持つてゐるだけである。

私も曾つて、比較的年少にして既に、習オーストリアの民族闘争に参加することが出来た。南境地方及び學校團體の行ふこの闘争に召集され、矢車菊と黒赤金の色（譯者註「舊ドイツ國旗の配色」）によつて意氣昂められ、「萬歳」の叫びを交はしつつ、制止や刑罰も物ともせず、皇帝讚歌の代りに「ドイツ・ユンバー・アルレス」を歌つたのであつた。謂はゆる「民族國家」の所屬者達が、尙ほ自民族に就いてその言語以上に殆んど知ることの無かつた時代に於いて、我々少年は斯様に政治的に教育されたのであつた。私は當時既にどつちも付かずの曖昧な層に屬してゐなかつたことは、言ふまでもない。やがて間もなく私は熱烈なドイツ國權主義者（ドイツナシ「Deutschnationale」）となつた（註）。但しこれは今日の我黨の概念とは勿論同じものではない。

私のこの發展は極めて急速な進歩を見、既に十五歳にして私は、王朝的、愛國主義、民族的、國家主義、との相違を理解するに至つた。而して私は當時既に、専ら後者のみに益々親しか様になつてゐた。(p. 8—11)

〔註〕茲に言ふ「ドイツナチオナーレ」とは、「ドイツナチオナーレ・フォルクス・バルタイ」のことと謂はゆるドイツ國興黨流の單なる純粹的國家主義を意味するのではないかと思はれる。

『腐敗墮落せる王朝とその根抵に於いて依然健全なる國民』、『王朝的愛國主義 (dynastischer Patriotismus) と民族的國家主義 或ひは國民的民族主義 (völkischer Nationalismus) の相違』——とは、一體如何なる意味のものであらうか？ 『王朝』とは言ふまでもなく王室及びそれを取巻く政治を意味するものであり、我々日本人にとつては右の如きことは容易に理解され得ない所である。或ひは、人に依つては、他國のこととは言ひ乍ら、許すべからざる『不穩』なものにさへ聞えるかも知れない。が、我々はこれらの問題をば尙ほ後の問題とし、ヒトラーの續いて説いてゐる所の彼れの歴史研究に就いて聞かう。蓋し彼れの歴史研究こそは、彼れをして斯くも『不穩』なる愛國者たらしめたものであつたのだ。

るかも知れない。が、我々はこれらの問題をば尙ほ後の問題とし、ヒトラーの續いて説いてゐる所の彼れの歴史研究に就いて聞かう。蓋し彼れの歴史研究こそは、彼れをして斯くも『不穩』なる愛國者たらしめたものであつたのだ。

「ハブスブルグ王國の内情を何等研究するの勞をとつたことのない人々には、右の如きことは恐らく充分理解されないかも知れない。學校に於ける世界史の教育のみが能く、この國に於いて、既に斯かる發展への萌芽を必然的に培つてゐたのであつた。これに反して、オーストリア特殊の歴史なるものは、これに密接に結び付いてゐるものであつて、これをドイツ史とオーストリア史とに分つが如きことは、到底考へらるべくもないのだ。然り、さればこそ、ドイツ國が結局二つの勢力範圍に分裂し始めた時、その分裂は實にドイツそのものの歴史となつたのだ。

ウインに保持されてゐる會つてのドイツ帝國神型〔神聖ドイツ・ローマ帝國〕の帝印は、不可思議な魔法の如くに、一つの永遠の共同體の擔保として作用し續けるやうに思はれる。

ハブスブルグ國家の崩壞の時に當つて、オーストリア・ドイツ民族の發せるドイツ母國との合同要求の切なる叫びは、實に、全オーストリア・ドイツ民族の胸底深くまで、こんでゐたところの、片時も忘れぬ父なる國への復讐を希ふ感情の迸りに他ならなかつた。然し乍らこのことも、若し各オーストリア・ドイツ人の歴史教育が斯くの如き一般的思慕の原因でなかつたとしたら、到底理解さるべくもないであらう。歴史教育の中には、一の汲めども盡させぬ泉がある。この泉は特に忘却の時代に於いては、無言の警告者として、一時の安樂を超越して、絶えず過去への回想を通じて新たなる未來に就いて囁くのである。

謂はゆる中等學校に於ける世界史の教育は、然るに、今日でも尙ほ甚だ芳しからざることは言ふまでも

ない。次のことを理解してゐる教師は殆んど有るか無いのかの状態である。即ち、歴史教育の目的といふものは決して、歴史上の年代や事件を丸暗記したり並べ挙げたりすることに在るのではないといふこと、某々の戦争が何時始まつたか、或る將軍は何年に生れたか、或ひは更に或る國王（大抵餘り重要でない所）が何時その傳家の王冠を戴いたか、凡そさうした事を生徒が知つてゐるかどうかといふ様なことは、何等肝腎の問題ではないといふことである。否、右い様なことは、全く以つて、殆んど問題にならないものである。

歴史を「學ぶ」とは、我々が眼前に歴史の出來事として見る所の種々の結果が、その發生するに至つた所のそも／＼の原因たる諸々の力を探求し發見するに在る。

讀むことでも學ぶことでも、その要訣は本質的なものを憶え、非本質的なものを忘れるに在る。

一人の先生を、我々の歴史の教授及びその試験に對してこの見方を根本方針とすることを知つてゐた稀に見るに對して恐らく決定的影響を及ぼしたのであつた。リンツの實業學校に於ける私の當時の先生、レオポルド・ベツチ博士がそれであつて、この先生には右の要求が眞に理想的に具現されてゐた。溫和な態度の中にもまた嚴平たる處のある老先生であつたが、彼れは時に魅惑的熱辯を以つて我々の心を捉へた許りでなく、眞に我々の魂を奪ひ去ることさへあつた。今日でも私は心に微かな感動を以つて、この老人を思ひ出す。彼れはその火の如き説明を以つて我々に現在をすつかり忘れさせ、これを過去の時代へと拉し去り、

ド・ベツ博士がそれであつて、この先生には右の要求が眞に理想的に且現されてゐた。溫和な態度の中にもまた嚴乎たる處のある老先生であつたが、彼は特に魅惑的熱辯を以つて我々の心を捉へたり許りてなかつた。彼れはその火の如き説明を以つて我々に現在をすっかり忘れさせ、これを過去の時代へと拉し去り、何千年もの遠くの霧深き中から乾からびた歴史的回想を引出して、これを生々しき現實にまで生かして見せたことが、幾度であつたか知れない。我々はその時には、幾度となく、燃ゆるが如き情熱を湧き立たせられ、時には感動の餘り、涙さへ流して、講義を聴いたものであつた。

更にこの先生は、現在から過去を説明し、過去から現在に對する結論を引出すことを知つてゐたので、我々は愈々以つて幸ひであつた。斯くして彼れは、他の何人にも脱して、當時我々を悩ましてゐた日常問題の凡てに對する我々の理解を高めて呉れた。我々小さき者の民族的熱狂性は、彼れにとつては我々を教育する一つの手段となつた。即ち彼れは、我々の民族的名譽感情に訴へ、それに依つて始めて、他の如何なる手段を以つてするよりも速やかに、我々臆白通を取鎖めたことが度々であつた。

この先生のお蔭で、歴史は私の好きな科目となつた。

それと共に正に私は——恐らくこれは先生の望まぬ所であつたらうが——當時既に若き革命家となつてゐた。(カ——13)

ヒトラーがその少年時代に於いて既に、一の革命的ナチオナリストであつたことは、以上に依つて明らかであらう。ナチオナリストとは一言にして言へば、民族主義者——國家主義者のことであり、その主義理想の爲に積極的に戦ふ者乃至戦はんとする者の謂ひである。單に一の職業としての官吏

や軍人になることは、何等のナチオナリスト、何等の愛國者をも意味するものではない。而してヒトラーは、その少年時代より、苦難に充ちたオストマルク（東部邊境）のドイツ人として、正にドイツ民族主義—國家主義の爲に戦へる者であつたのだ。その邊の俄かナチオナリストや轉向者共とは、ワケが違ふのである。

〔註〕 尙ほ右引用文中にヒトラーが歴史研究に就いて言つてゐること、例へば眞にナチオナリスムス史の研究であるといふこと、歴史研究の要諦は『本質的なもの』を憶へて『非本質的なもの』を忘れて了ふに在りとしてゐる點の如きは、正に至言と言ふべきであり、我國に於いても參考とされて然るべきであらう。ヒトラーが普通の謂はゆる政治家ではなく、寧ろ何よりも先づ思想家である事は、斯かる點にヨク現れてゐる。

五 王朝的愛國主義と國民的國家主義の相違

我々はこのヒトラーの少年時代の思想をいさ少し、少くともこれに就いて彼れの語つてゐる最後まで、追求して見よう。蓋し、私に依れば——因にヒトラーも同じ様なことを言つてゐるが——人

我々はこのヒトラーの少年時代の思想をいさ少し、少くともこれに就いて彼れの語つてゐる最後まで、追求して見よう。蓋し、私に依れば——因にヒトラーも同じ様なことを言つてゐるが——人

間の思想なるものは、勿論素朴な形態に於いてではあるが、原則として既に少年時代に於いて本質的に現れるものであつて、その後の發展はこの少年時代に育まれたものの發展に過ぎないものである。従つてまた、ヒトラーが如何なる思想及び性格の持主であるかも、その少年時代に於いて、或ひはその少年時代との關係に於いて、最もヨク窺はれるのである。

ヒトラーは、前に引用せる所に見る如く、『既に十五歳にして私は王朝的な「愛國主義」と民族的な國家主義との相違を理解するに至つた。而して私は當時既に専ら後者のみに益々親しむ様になつてゐた。(Ich schon mit fünfzehn Jahren zum Verständnis des Unterschiedes von dynastischem „patriotismus“ und volklichem „Nationalismus“ gelangte; und ich kannte damals schon nur mein „das letztere“)』と言つてゐる。これは一體どういふ意味なのであらうか？王室中心の愛國主義と、國民の民族的國家的愛國主義とは、どうして異なるのであらうか？勿論、ドイツに於いてもオーストリアに於いても當時極めて盛んであつたが如く、無暗と王室乃至皇室の『神聖』を擡ぎ、その名と權威とに依つて國民を制壓し、自己の目的を達成せんとするが如き一部階級の愛國主義と、一般國民の民族一體觀念同胞一體觀念の自然の迸りたる國家主義、愛國主義とは、種々の點に於いて異なることは明らかである。が、ヒトラーの言ふ意味は、果して、單にそれだけの意味なのであらう

か？ 一體、曾つての『神聖ローマ帝國』オーストリアに於いては、皇室と國民乃至民族の關係はどうなつてゐたのであらうか？ ヒトラー乃至ナチスは、ドイツに於いてもオーストリアに於いても、その最後には、貴族・軍閥・官僚・財閥の聯合軍から成る謂はゆる復辟派と生死の闘争を演じ、遂にこれを血を以つて創したことは、我々の記憶に向は新たな事實であるが、ヒトラーはオーストリアに於いてその王室を如何に考へてゐたであらうか？

ヒトラーが歴史土権に見る愛國愛民の人物たることは、今日殆んど何人もこれを疑はないであらう。が、彼れがその少年時代より、愛國者は愛國者でも、激烈な反王室の悲しき愛國者であつたとは、餘り注目されて居ない様である。祖國を愛し同胞を愛するが爲に、彼れはその生國オーストリアに於いて——結局ドイツに於いても——反王室、反帝政主義者たらざるを得なかつたのである。それは何故であつたか？ オーストリア王室は甚しく反民族的、反國民的であつたからである。『王朝的愛國主義』と『國民的國家主義』の相違は茲に根源する。ヒトラーは前掲の如く歴史の先生に就いて叙べ、これは恐らく先生の望まぬ所であつたらうが、私は當時既に若き革命家となつてゐた」と述べた後、更に次の如く言つてゐる。

となつてゐた』と述べた後、更に次の如く言つてゐる。

『これはどの先主の下にドイツ史を勉強しながら、誰か能く、その王室の爲に斯くも非道に國民の運命を害されたる國家の敵とならずに居られたであらうか！

過去及び現在に亘つて、あさましき自己自身の利益の爲に常にドイツ國民の利益を裏切り來たれる王朝に對して、誰か能く飽くまで忠節を守り得たであらうか！

このオーストリア國家は我々ドイツ人に對して徹頭の愛情をも持たなかつたこと、然り、而して今後も結局全然これを持ち得べくもないことを、我々は年少と雖もどうして知らずに居られたらうか！

ハプスブルグ王室の所業についての歴史的認識は、更に日常の経験によつて益々強められた。北に南に他民族の毒素は我がドイツ民族の身體を侵蝕し、ウインさへも見入／＼うちに非ドイツ的都と化して行つた。「王室」は機會ある毎に益々チエコ化して行つた。斯くて、オーストリアに於けるドイツ民族の最惡の敵たりしフランツ・フェルデナンド大公が、彼れ自らを手を貸して造つた所の彈丸によつて斃れたのは、正に永遠の正義の女神の手、その奇蹟なき報復の拳であつた。彼れこそは實に、上層よりせるオーストリア・スラヴ化の本尊であつたのだ！

ドイツ民族に課せられたる負擔は巨大なものであつた。彼等の税と血との犠牲たるや窮くべきものであつた。而もそれにも拘らず、少しでも眼の開いた者は何人でも、その凡ての犠牲は結局無駄なものであることを認めざるを得なかつた。而も更にその場合、我々を最も遺憾たらしめたものは、その凡ての行方方は、ドイツとの同盟に依つて、道徳的に覆ひかくされた事であつた。ドイツとの同盟に依つて、この古き

君主國に於けるドイツ民族の徐々の翦滅が、ドイツ國そのものからまでも罷容されることになつたのである。オーストリアが相變らず一のドイツ國であるかの如き觀を外部へ向つて粧ふことを心得て居たこのハプスブルグ家の欺瞞は、同家に對する憎惡を高め、遂にこれに對する激しき反抗と同時に蔑視まで呼び起すに至つた。

たゞオーストリア自體に於いては、當時から既に専ら「その任に在りし人々」のみは斯うした一切に就いて何等知る所が無かつた。彼等は恰かも盲人の如くに何も分らずに死屍の側に遊歩し、その腐敗の微候の中にも尙ほ寧ろ「新らたなる」生命の表微を見出すものとさへ考へて居たのであつた。

若きドイツ帝國とこのオーストリアの僞國家 (Gekünstel) との不幸なる同盟のうちにこそ、後の世界大戰の、從つてまたドイツ崩壞の、萌芽が含まれてゐたのである。

私は本書の叙述のうちに後に尙ほ此の問題を根本的に取扱はねばならぬであらう。茲にはただ、私は畢竟するに既に年少の時に於いて次の見解に達してゐたといふこと、而してこの見解はそれから最早私を離れ去ることなく、寧ろたゞ益々深まるのみであつたといふことを確言するに止めて置く。

即ち、ドイツ民族の確保は先づオーストリアの否定を前提とするといふこと、更に、國民的感情なるものは王朝的愛國主義と如何なる點に於いても一致するものではないといふこと、就中ハプスブルグ王室はドイツ國民の不幸にとつて決定的なものであるといふこと、此の見解である。

私は當時既に此の認識よりして次の歸結を引出して居た。即ち我がオーストリア・ドイツ人の故郷「大

即ちドイツ民族の確保は先づオーストリアの否定を前提とするといふこと、更に、國民的感情なるものは、王朝的、愛國主義と如何なる點に於いても一致するものではないといふこと、就中、ハプスブルグ王室は、ドイツ國民の不幸にとつて決定的なものであるといふこと、此の見解である。

私は當時既に此の認識よりして次の歸結を引出して居た。即ち我がオーストリア・ドイツ人の故郷へ大

「ドイツ」への熾烈なる愛とオーストリア國家に對する深き憎惡これであつた。」(S. 131-134)

オーストリア王室がオーストリア・ドイツ民族乃至オーストリア國民に對して、如何なる害惡をなしてゐたかは、茲に詮索の限りではない。それは後にまたヒトラーが憤激を以つて語つてゐるところである。たゞ我々は此處に、不幸なる王室と國民との關係の示唆深き一例を見る。ヒトラーは何よりも先づ民族主義者である。若しオーストリア國家が一民族から(或は一民族に近き近親民族から)成つて居り、而してオーストリア王室は該民族の歴史的血緣的中心であつて、斯かるものとして該民族の爲に統治するものであつたならば、その國民から背離した政治も有り得ず、ヒトラーの如き愛國者をして反逆者たらしめることも無かつたであらう。否、恐らく彼れもまた、或ひは彼れこそ眞に、王室の熱烈な支持者であつたであらう。が、オーストリア國家はヒトラーの言つてゐるが如く一の『多民族國家』であつた許りでなく、その王室は何等その國民乃至民族の血緣的中心として同國民乃至民族の爲に統治するものではなく、かの『神聖ローマ帝國』以來、謂はゆる『神の代理者』たるローマ法王を通じて『神』の命を受けて、『神』及び自らの爲に、謂はゞ『神』から與へられたる私有財産としてその國家及び國民を統治するものであつたのである。極端に言へば、

その國民は家畜乃至家財以上に出でず、これを煮て喰はうが焼いて喰はうが、賣り飛ばさうが、皇帝乃至王室の自由であつたのである。それは國民に對して何等責任を有せず、たゞ『神』に對して責任を有するのみである。このことは、歐洲中世約十世紀に亘つて謂はゆる『暗黒時代』を形成せる『セオクラシー(神の政治)』の支配及び思想を知る者にとつては、直ちに理解される所である。この時代に所謂はゆる『教政一致』、『政教一致』の最も理想時に行はれた時代であつたのだが、同時に亦それは、その『暗黒時代』の名の示すが如く、人類一切の進歩の停止された最も不幸にして最も非道な時代であつたのである。それ故にこそそれは、謂はゆるルネサンス(文明復興)と共に、革命に依つて打破されなければならなかつたのである。職業神托者とその一黨の『神』は、ヨリ高き人類の『正義の女神』に依つて、倒されなければならなかつたのである。

勿論、如何に『神』の命を受けて現世統一を使命とせる 神聖ローマ帝國』の後身乃至繼承者と雖も、近世も最近の世界大戦前まで、完全に斯かる非人道的政治思想を以つて臨んでゐたわけではなかつたであらう。が、當時専ら『その任に在りし人々』ハプスブルグ王朝人士は、近世的施政を糺ひつつも、その古き政治思想から脱却することを知らなかつたのである。のみならず、既にその歴史的積悪は如何ともし難きものとなつてゐたのである。斯くてオーストリアに於いては、『王朝

なかつたであらう。が、當時専ら『その任に在りし人々』ハプスブルグ王朝人士は、近世的施政を粧ひつつも、その古き政治思想から脱却することを知らなかつたのである。のみならず、既にその歴史的積悪は如何ともし難きものとなつてゐたのである。斯くてオーストリアに於いては、『王朝的愛國主義と國民的（民族的）國家主義の相違』は、蓋し、必然であつたのであり、ヒトラーをして反王朝的愛國者たらしめたこともまた已むを得なかつたのである。

然し、この『王朝的愛國主義』と『國民的國家主義』乃至『國民的民族主義』の分裂は、何處に於いても必須といふ性質のものではないことは、この場合充分注意されなければならない。これは、國家論上―國體論上の一大問題たるものであり、これが論究には別に獨立せる一書を宛つるも尙ほ多しとしないものであるが、今これに就いての私見を端的に述べれば次の如くである。血統的事實的にも統治的規範的にも、或はドイツ思辨哲學流に言へばザイン（實在）的にもゾルレン（當爲）的にも、その王室は、その國民の外に一の全く別種の存在として高く超絶してではなく、その國民の中に深くその民族的血縁的中核として存在し、斯かるものとして、自らをその中に含む一全體としての國家國民（Nation）の爲にこれを統治する時に於いては、兩者は立派に一致し得る。その場合に於いては、王室の爲に盡すことは取りも直さず國家國民に盡す所以であり、國家國民の爲に盡すことは取りも直さず王室の爲に盡す所以であり、兩者は一體であり得る。

然るにオーストリアに於いて兩者が分裂しなければならなかつたのは、前記の基礎條件を缺いてゐたが爲に外ならない。即ち其處に於いては、王室ハプスブルグ王室は、元來は勿論ドイツ民族

に出づるものであつたが、事實上、その多年に亘る結婚政策その他の爲にその本來の民族的性格を失ひ、血縁的に最早如何なる民族の中心でも代表でもなくなつてゐた計りでなく、その統治思想上、その『神聖ローマ帝國』以來の謂はゆる『神權國』の考へを脱せず、國民から高く超絶せる存在として君臨してゐたのである。これが爲にその施政は勢ひ非民族的・非國民的なものたるを免れず、その國民はハプスブルグ王朝にとつては唯だその盛榮を維持せんが爲に必要な手段以上のものではなく、遂に『王朝的愛國主義』と『國民的國家主義』とは相容れないものたらざるを得なかつたのだ。而してこれは、王室の罪たるよりも、寧ろ王室を取巻く爲政者階級の罪たるものであつた。彼等は餘りにも無自覺にして、時代の推移も國民の要望も知らず、たゞひたすら王室を『神聖化』しその權威を振りかざすことに依つて國民を統治するに努め、斯くすることに依つて實は何よりも先づ自らの地位及び特權を維持してゐたのである。ヒトラーの言葉を以つてすれば、謂はゆる『死屍の側に遊歩』乍ら、これを死屍とも見る能はず、却つてこれを『新たなる生命の表徴』とさへ考へ、ひたすら權勢政治を事として一路『崩壊』へと歩んでゐたのである。この爲政者階級の度すべからざる無知・無識・無能・恥知らずが、ヒトラーの如き深き愛國愛民の子をもして反逆者たらしめると共に、遂にオーストリア國家をして我れと自ら崩壊せしめたのだ。

「からざる無知・無識・無能・恥知らずが、ヒトラーの如き深き愛國愛民の子をもして反逆者たらしめると共に、遂にオーストリア國家をして我れと自ら崩壊せしめたのだ。

『歴史を「學ぶ」とは、我々が眼前に歴史的出來事として見る所の種々の結果が、その發生するに至つた所のそも／＼の原因たる諸々の力を探求し發見するに在る』とは、ヒトラーの歴史研究に就いて言つてゐる所であるが、『マイン・カンフ』を研究するとは、右の如き事をヒトラーの論述の背後にまで、謂はゆる紙背にまで、讀みとることに在らねばならない。

この『王朝的愛國主義』と『國民的國家主義』の問題は、單に會つてのオーストリアの問題ではなくして、凡ゆる王朝國家の問題たるであらう。多かれ少かれ會つてのオーストリアと同様の素因を内有する國に於いては、何處に於いても、多かれ少かれ同様の結果を免れないであらう。殊にその王朝支配が明らかに非國民的非民族的たる所に於いては、兩者の分裂は決定的であり、古き前者は新たなる後者に依つて取つて代られることも亦必須である。ヒトラーが『王朝的愛國主義』と『國民的國家主義』の相違を喝破してゐる點は、人々の至深の注意に値ひする所でなければならぬ。

六 孤兒となりてウインへ

ヒトラーが紅顔の少年にして既に革命的愛國者であつたこと、而も王朝的愛國者ではなくして國民的民族的愛國者であつたことは、以上の如くである。我々は、『マイン・カンフ』第一卷第一章に

叙べてゐる所のこの彼れの幼少時代乃至少年時代（或ひは故郷時代）の點檢を了へるに當つて、最後に、同じく彼れの同章最後に叙べてゐる處に従つて、その不幸なる孤兒化とその爲の立志出郷、藝術に就いて語つて居る點の如きは、彼れの人となりを示すものとして重要なものであるが、この案内人は斯かる點に就いてはトント不案内であり、また餘り關心も有しない者であるので、凡てヒトラー自身をして語らせる。

『私が學校に於いて教へ込まれたところの・物事を歴史的に思考するといふ態度は、爾來最早私から決して離れ去ることはなかつた。世界史は私にとつては益々、現代の歴史的處理に對する・従つてまた政治に對する・理解の役めども竭させぬ泉となつた。此處に於いては私が歴史を「學ばん」とするよりも、寧ろ歴史が私を「教へん」とするかの如くであつた。

私は既に年少にして早くも政治上の「革命家」となつたのであつたが、これと同じ若さにしてまた隣國上の革命家ともなつた。

上オーストリアの主都には、當時、比較的惡くない劇場があつて、大抵のものは其處に上演された。私は十二歳の時、其處で始めて「ウィルヘルム・テル」を観た。その後二・三ヶ月にして「ローエングリン」を観たが、これは私の見た最初のオペラであつた。忽ちにして私は魂を奪はれて了つた。バイロイトの巨

上オーストリアの主都には、當時、比較的悪くない劇場があつて、大抵のものは其處に上演された。私は十二歳の時、其處で始めて「ウィルヘルム・テル」を観た。その後二・三ヶ月にして「ローエングリン」を観たが、これは私の見た最初のオペラであつた。忽ちにして私は魂を奪はれて了つた。バイロイトの巨匠「ワグネル」に對する若き感激は、その止る處を知らなかつた。私は次から次へと彼れの作品に引き付けられて行つた。而かも私は、それが地方の興行として地味であつたことの爲に、却つて後に至るまで興奮を可能とする様な印象を與へられたことを、特に幸福のことであつたと今日考へて居る。

そんな風であつたから、私は十代の年頃——それは唯だ全く傷ましい思出のものであつたが——を通り越した後には特に、曾つて父が私の爲に選んだやうな職業に對する私の心の底からの嫌惡の情を愈々固めさせられたのであつた。私は、官吏となつたら決して幸福になるわけがないといふことを益々確信するやうになつた。そればかりでなく、實業學校に於いても、私の圖畫の才能は認められて來たので、それから私の決心は愈々以つて鞏固となるばかりであつた。

願はれても脅かされても、此の決心は微塵も變らなかつた。私は畫家にならうと思つた。そしてどんなことがあつても官吏にはなるまいと思つた。

たゞ年を経るに連れて建築への興味が次第に顯はれて來たのは不思議であつた。

當時私はこれをば、單に私の繪畫の才能に伴ふ自然の發展であると考へ、そして此の自分の藝術的領野の擴がることを心ひそかに喜ぶばかりであつた。

他日、事情が全く一變すべしとは、思ひも及ばぬところであつた。』(S. 14—15)

彼れは斯うした時代の途中に、十三歳にして、突如として父を失つたのであつた。而もそれから二年後には、更に母を失はねばならなかつた。そして、會つて彼れの父が五十年前に、十三歳にも充たざる幼少の身を以つて、ウインに漂泊らひ出たと同様に、彼れもまた十五歳か十六歳の身を以つて、『何か一かどの著』に成らうとして、ウインへと漂泊らひ出ねばならなかつたのである。下級官吏の遺兒手當などでは、『自分一人の生命を保つことさへ出来なかつた』のである（因にヒトラーは『マイン・カンフ』の中には何等記してゐないが、女の姉妹が一人か二人あつたらしい）。然しその時には彼れは既に、思想的に一の立派な『革命的ナチオナリスト』となつて居た。この立派な然し小さな『革命的ナチオナリスト』は今や、孤兒となつて、『手には着物や下着類を詰めた行李を下げ、胸には不動の決意を秘めて』問題の都ウインへと出て行つたのである。

『私の職業の問題は、かねて期待し得たよりも速かに決定されねばならぬことゝなつた。十三歳の時に、私は全く突然父を失つた。平素まだ／＼元氣であつた父は、突然卒中に倒れ、何んの苦もなく此の世を終つたのであつた。――殘る我々を深き悲しみに沈めながら。父が子供の爲にその苦しき

生活の行路を保護すべき衣食の道を講じてやらうとして、最も多く期待して居たところのものは、當時は

まだ達せられてゐなかつたらしい。然し父は、當時まだ父にも私にも分つてゐる筈のなかつた事實に對し

十三歳の時に、私は全く突然父を失つた。平素まだ／＼元氣であつた父は、突然卒中に倒れ、何んの苦

もなく此の世を終つたのであつた。――残る我々を深き悲しみに沈めながら。父が子供の爲にその苦しい生活の行路を保護すべき衣食の道を講じてやらうとして、最も多く期待して居たところのものは、當時は

まだ達せられてゐなかつたらしい。然し父は、當時まだ父にも私にも分つてゐる筈のなかつた未來に對して、全く無意識のうちにではあつたにせよ、既に或る胚種を植ゑ付けてゐて呉れたのであつた。

初めのうちは勿論、生活の外見の上には別段變つたことも起らなかつた。

母は恐らく、父の遺志に従つて私の教育を續けること、即ち私をして官吏たるべく勉強させることを、義務と思つてゐたであらう。私自身はどんなことがあつても官吏にはなるまいと、以前にも増して固く決心してゐた。私は中等學校の教材や教育方針が、私の理想から次第に遠ざかつて行くに連れて、内心、學校などは何うでも宜いといふ考へが益々募つて行つた。そのうちに私は、何かの御助けのやうに、急に病氣に罹り、此の病氣が二・三週間で、私の將來の方針や家の中の長い間の論争問題を解決した。私は肺をひどく悪くしたので、醫者は、行く／＼はどんなことがあつても私を役所などには動めさせないやうにと母に懇ろに忠告した。同時に、實業學校の方も少なくとも一ヶ年間は休學せねばならなかつた。これまで私が心に願ひ、その爲に絶えず争つて來たところの年來の望みが、此の事件によつて、殆んど獨りてに實現性を帯びて來たのであつた。

私の病氣の様子を見て母は、爾後私を實業學校から退かせて、アカデミーへ通はせて呉れることを承諾した。

唯だもう契しき夢ではないかと思はれるほど無上に幸福なる日々であつた。そして實際又それは、たゞ一片の夢とならねばならなかつた。二年の後、母の死が突然私の契しき計畫を打碎いて了つたのである。

母は長い苦しい病氣の揚句死んで行つた。始めから快癒の見込みなどは到底無かつた。それでも母の死によつて受けた打撃は大きかつた。私は父をば尊敬して居り、母をば愛して居たのであつた。

今や窮迫と無情の現實とに直面して、私は急に決心を固めなければならなかつた。父の遺した債かばかりの金は、母の重き病のために大部分使ひ果されて居た。私に授かつた遣兒手當などでは、自分一人の生命を保つことさへ出来なかつた。そこで私は、何とかして自分でパンを得る方法を講じなければならぬ運命となつた。

手には着物や下着類を詰めた行李を下げ、胸には不動の決意を秘めて、私はウインへと向つた。曾つて五十年前に父が成し遂げた所のものを、今や私も運命から闘ひ取るべく期したのであつた。私も何か^ひかど^りの者に成らうと志したのであつた。——但し、官吏にだけはどんなことがあつても成るまいと決心しつゝ』(8. 15—18)

第二章 ウィン苦學時代

一 ウィン時代の賜物——社會主義

我々は既に、少年時代に於けるヒトラーの人となり及び思想に就いて見た。如何に彼れが若くして既に、『革命的ナチオナリスト』であつたかを見た。而してその彼れが、同じ若さにして、相次いで兩親を失ひ、孤兒となりて、將來の途を立つべく、首都ウィンへと出て行くのを見た。それは『マイン・カンフ』第一卷第一章『兩親の家にて』の記してゐるところであり、ヒトラーの人間的及び思想的發展の謂はゞ第一段階を成すものである。次に我々は、同第二章『ウィンの修業苦難時代』に進んで、この彼れがウィンに於いて如何に艱難し、何を學び、如何にして一の Sozialist (社會主義者) にまで成つたか、而も何故にマルクス社會主義者と成らずして、反マルクス社會主義者、國民社會主義者と成つたかを見るであらう。それは彼れの人間的及び思想的發展の謂はゞ第二段階を成すものである。この段階に於いて彼れは、從來の單なる Nationalist から Nationalsozialist にまで成つてゐるのである。而して其後更に、戦争といふ第三段階を経て、その人間的及び思想的

の傾向及び體驗を強化されると共に、その奮起の一大刺戟を與へられ、彼れの政治的活動即ち公然 National socialism 運動が始められるのである。

彼れが孤兒となつて苦學力行を志しウインへと出て行つたのは、彼れが何歳の時か、正確には『マイン・カンフ』に記してゐないので分らないが、恐らく母が死んで間もなく、十六歳か十七歳の時と思はれる。彼れの生れたのは一八八九年であるから、従つて、今世紀の五、六年頃、丁度日露戦争の頃であつたと思はれる。これより前彼れは二度ほど同市を訪れたことがあつた。一度は母が『その最後の病苦に在つた頃、アカデミーの入學試験を受ける爲に』、一度はそれよりも前に、『十六歳にならなかつた時』、單に見物の爲にであつた。彼れは、そのウイン時代の記述の冒頭に、この先行の二度のウイン訪問、殊にそのアカデミーの繪畫科の試験を受けて、建築科には向いてゐるが繪畫科には不向きな故を以つて、これを落第せしめられた時の思出及び經緯に就いて述べた後、先づ次の如く言つてゐる。

『さて私は、母の死後、今や三度目に、そして今度こそは多年暮すべく、ウインに赴いた時、彼れ此れと時の經つにつれて、私には落付きと決意とが戻つて來た。私は以前の勇氣を回復し、自分の目標を斷乎として見定めた。私は建築家に成らうと決意した。凡そ障害なるものは、我々がこれに降伏すべく存在す

の如く言つてゐる。

『さて私は、母の死後、今や三度目に、そして今度こそは多年暮すべく、ウインに赴いた時、彼れ此れと時の經つにつれて、私には落付きと決意とが戻つて來た。私は以前の勇氣を回復し、自分の目標を斷乎として見定めた。私は建築家に成らうと決意した。凡そ障害なるものは、我々がこれに降伏すべく存在するものではなくして、我々がこれを打破すべく存在するものである。而して私はこの障害を打破して行かうと決心した。曾つて貧しき村の少年及び靴屋の小僧から身を起し、職ひ抜いて遂に官吏にまで到達した父の面影を絶えず眼前に想ひ浮べつてである。私の場合には既にその基礎が父の場合よりも良くなつてゐたので、その闘争もまた遙かに容易でなければならなかつた。當時私にとつて運命の苛酷と思はれたものも、今日では私はこれを神の配慮として謙へるものである。困窮の女神は私をその腕に抱へて、屢々私を挫かうと脅やかしたのであつたが、それに依つて私は却つて反抗の意志を強められ、結局常にこの意志が勝利したのであつた。

私が不屈の人間となつたこと、また將來共に不屈であり得ること、それはこの時代の賜物である。而もそれにも増して尙ほ當時に感謝することは、この時代が私を安樂な生活の空虚から引離して呉れたこと、何じき母の甘へつ子をその軟らかき褥しゝもから引下し、新たに悲痛といふ夫人を母として興へて呉れたこと、厭がつて逃れようとする者を、敢へて艱難と貧困の中に投げ込み、而して後年彼れがその爲に戦はねばならぬ所のものを教へて呉れたことであつた。』(S. 19—20)

ヒトラーは、右にその感謝を以つて言つて居るが如く、このウイン時代に『安樂な生活の空虚から引離』され『艱難と貧困の中に投げ』込まれ、『後年彼れがその爲に戦はねばならぬ所のもの』を

知つたのであつた。『後年彼れがその爲に戦はねばならぬ所のもの』とは、要するに、貧しき者・虐げられたる者の爲の社會改造の意味であり、社會主義の意味である。彼れはこれをウイン時代にく、同情者ではない。否、往々にして逆でさへある、が、權門や金持ちに何不足なく育つた者は、如何に理解的同情的言辭を弄しようとも、その眞の理解者・その眞の味方たり得ない。若しヒトラに、このウインの『艱難と貧困』の時代が無かつたならば、彼れの謂はゆる『新たに悲痛といふ夫人を母として與へられる』ことが無かつたならば、彼れは恐らく從來の單なる國家主義者に止まり、社會主義者にまでは成らず、従つてまた今日の彼れは無かつたであらう。眞に自ら體驗せる者のみが眞にその主張者たり得るのである。

二 窮乏と悲慘の五ヶ年

ヒトラは然らばウインに於いて如何に艱難辛苦したか？ 今世紀の初め五、六年頃と言へば、後に『勞働者の都』と稱されその社會施設の行き亘れるを以つて誇れるウインの都も、未だ殆んど何等さうした見るべき施設の恐らく無かつた時代である。僅か十六歳か十七歳の子供が、其處で寄

ヒトラーは然らばウインに於いて如何に艱難辛苦したか？ 今世紀の初め五、六年頃と言へば、

後に『労働者の都』と稱されその社會施設の行き亘れるを以て誇れるウインの都も、未だ殆んど何等さうした見るべき施設の恐らく無かつた時代である。僅か十六歳か十七歳の子供が、其處で寄

る邊もなく、自ら働らいて生きねばならないといふことは、如何に困難なことであつたかは、凡そ想像が付くであらう。彼れは初めは『臨時手傳ひ工(Hilfsarbeiter)』（我國の謂はゆる人夫）として、次には『小さな傭工(Kleiner Meister)』として（ペンキ傭工などを勤めてゐたといふ）、自らのパンの爲に働らいたのであつた。そしてお定りの飢餓に常に見舞はれてゐた。飢餓は彼れの當時の唯一の友人であつた。彼れは次の如く記してゐる。

『多くの人々には罪なき歡樂の都と思はれ、充ち足りた人々の祝宴の場所と思はれるウインの都も、私にとつてはたゞ、悲しい哉、私の生涯に於ける最も悲惨なりし時代の生々しき思出の地に過ぎない。

今日でも尙ほウインの都は、私にはたゞ暗い思出を起させるだけである。この驕奢な都市の名は、私には直ちに五ヶ年の窮乏と悲慘とを思ひ起させる響きを持つてゐる。五ヶ年の間私は初めは臨時手傳ひ工として、次には小さな傭工として、自らのパンを稼がねばならなかつた。それも、日々の飢餓を凌ぐにさへ足らぬ程のホンの僅か許りのパンであつた。飢餓は、當時、たゞ一人だけ、殆んど私を見棄てたことなく實直に何事も私と共にした所の・私の忠實な従者であつた。私の買ひ求める本は、そのいづれとしてか、彼れの干渉を伴はざるはなかつた。私が一度オペラを見にでも行かうものなら、それから幾日も續けて、彼れはまた私の伴をした。私はこの無情な友人と何時も争ひが絶えなかつた。』(S. 30—31)

彼れは更に別の個所に當時の情態に就いて次の如く言つてゐる。

『當時私にとつて、仕事そのものを見付けるといふことは、大體に於いて大して難かしいことではなかつた。といふのは、私は勿論熟練工ではなく、單に謂はゆる手傳ひ工として、また多くの場合臨時傭ひとして、日々のパンを稼がねばならなかつたに過ぎないからである。』

私はその場合、かのヨーロッパの古き塵を奴足から拂ひ落して、新たなる世界の中に新たなる生活を立て・新たなる故郷を獲得しようといふ嚴平たる決心を以つて立つ所の・凡ての人々と同じ立場に立ち上つた。今は最早、職業や身分に對するこれまでの偏つた考へ方や、環境や傳統といふやうなものから凡て離れて、自分達に提供される利得は何んでもこれを擲へ、そして正しい仕事であるならば、それが如何なる種類のものであつても、少しも恥づべきでないといふ考へに益々徹底しながら、如何なる仕事にでも喰ひ付いて行く。私は斯くして、自分の新たなる世界へ全身を打ち込み、全力を以つてこれを切抜けて行かうと決心した。

私は早速、其處には常に何等かの仕事の有ることを知つた。がそれと同時にまた、その仕事が如何に容易に忽ち失はれるかを知つた。

間もなく私は、日々のパンを獲るの途の不安定なことが、新生活の最も大なる暗黒面であることが分つた。』(254-255)

私と對峙する處には常に何等かの仕事の有ることを知つた。がそれと同時にまた、その仕事が如何に容易に忽ち失はれるかを知つた。

間もなく私は、日々パンを獲るの途の不安定なことが、新生活の最も大なる暗黒面であることが分つた。(p. 113)

これは労働者も労働者・自由労働者の生活である。斯かる有様であつたから、パンを口にし得ない日も幾度となくあつたであらう。然し彼れはこの時代に最も辛く勉強したのであつた。そして後に於ける彼れの行動の基礎を作り上げたのであつた。

『然しこの時代に私は、以前に見られなかつたほど辛く勉強した。私の目指す建築術及び食べる物を節約しての時たまのオペラ見物以外には、私の楽しみとしてはたゞ書物有るのみであつた。』

當時私は、限りなく多く讀み、而も根本的に讀んだ。私の労働の餘暇に残された時間は、餘り所なく勉強に向けられた。斯くして數年ならずして私は、今日尙ほその恩澤を蒙つてゐるところの知識の基礎を作り上げたのであつた。

而もそれのみに止まらなかつた。

この時代に私に、私の現在の行動の磐石の基礎を成してゐる所の一の世界觀乃至人生觀が出来上つた。私は、斯くして曾つて出来上つたものの上に、其後、ホンの僅かを單に學び加へれば宜かつただけで、何等これを變更する必要などはなかつた。

否、寧ろ反對である。

私は今日次の如く確信してゐる。總じて全く創造的な思想なるものは、その苟くも存在する限り、既に若き時代に於いて根本的に現れるものであると。私は老年の智慧と青年の獨創性とを區別する。前者は、

長年の生活の経験の結果として、その精到さと慎重さに於いて、ヨリ長ぜそのものを認められるに過ぎないが、後者は、その餘りに豊富なる爲に、差し當つてこれを洗練する暇もなく無機識に諸々の思想や理念を産み出すものである。青年の獨創は建築の素材と未來の設計とを提供する。老年の智慧はこの素材と設計とから、その礎石を取り出し、これを積み重ね、その建築を建てる。但し、謂はゆる老年の智慧が青年の獨創性を窒息せしめない限りに於てである。』(C. 22)

この窮乏と艱難の中の勉強は、彼れをして何よりも先づ、謂はゆる『小ブルジョアの考へ』の狭い世界から脱却せしめ、ヨリ廣く、ヨリ深く、ヨリ正しく、人世及び人間を知るを得せしめたのであつた。苦勞せる者必ずしも此世のヨキ理解者たらず、往々にして寧ろ反對に、度すべからざる分らず屋や鼻持ちならぬ威張り屋が多いものであるが、ヒトラーはその點に於いては逆であつた様である。彼れは自らの生活を省みて次の如く言つてゐる。

『この時代(「ウイン苦學時代」)の初まるまで私が父の家に於いて送つてゐた生活といふものは、世間一般の人々のそれと比べて、さほど或ひは全然、異なる所は無かつた。何の心配もなく私は、来る日／＼を迎へることが出来た。其處には社會問題などといふものは一つも無かつた。私の少年時代の環境は、小市民の

『この時代（「ウイン苦學時代」）の初まるまで私が父の家に於いて送つてゐた生活といふものは、世間一般の人々のそれと比べて、さほど或ひは全然、異なる所は無かつた。何の心配もなく私は、来る日くを迎へることが出来た。其處には社會問題などといふものは一つも無かつた。私の少年時代の環境は、小市民の

層から、従つて純粹の手工労働者には殆んど關係の無い世界から、出来てゐた。斯く言へば或ひは一見甚だ奇異に感ぜられるかも知れないが、この經濟的には全く榮えない小市民階級と、腕一つの労働者との間に横はる所の溝といふものは、往々にして人々の考へる以上に深いものであるのだ。この深き溝——殆んど敵對とまで言ふべき程の——生ずる原因は、つひ此頃漸やく純粹の労働者の水準から浮び上つた様な一群の連中が、再び元の殆んど顧みられるなき身分へと轉落することを、或ひは少くとも依然として斯様な身分に數へられることを、怖れるといふ所に在る。更にこれに加ふるに、彼等は其の多くの場合、この下層階級に於ける文化の貧困や、その相互の交際に於ける夥しき粗野蠻行などに就ての、不快な思出がある。彼等自身もその社會生活に於いては尙ほ低き地位にあるので、その折角征服して來た斯かる低き教養及び生活の段階と接觸することは、凡そ彼等の堪へ難き苦痛であるのである。

却つて上流の地位に在る者が、謂はゆる「成り上り者」の場合に見られるよりも、比較的平氣で、その最下級の同胞の地位へと身を落して行くことの多いのも、右の如き事情から來るものである。

驚し、成り上り者といふものは、何んと言つても正に自己の實力を以つて、從來の社會的地位から更に
●●●高い地位へと翻ひ上つた者である。

ところが、この歴々非常なる苦難を伴ふ闘争は、結局に於いて同情心といふものを枯死させて了ふ。自己の生存の爲の痛ましい程の苦闘が、取残された者の不幸に對する感覺を麻痺させて了ふのである。

この點では、運命は私に温かであつた。運命は私を、父が會つて棄て去つた所の貧困と不安との世界へ再び突き戻すことに依つて、狭い小市民的教育の眼隠しを私の眼から取去つて呉れたのであつた。今や私は始めて、眞に人間といふものを知るやうになつた。空虚な外觀や粗暴な外貌と、その中にひそむ内部的本質とを、區別することを覺えるやうになつた。(ムビーグ)

三 身を以つて社會問題を研究

ヒトラーは、この時代にまた、身を以つて『社會問題』を研究——と言ふよりも寧ろ體驗した。後年彼れが公然一の『社會主義者』として戦ふに至つたのは——因に、彼れが公然一の『社會主義』を標榜して戦ふに至つたのは、彼れが政治運動に入つてから、即ち三十歳以後のことに屬するが——全くこの『窮乏と悲惨』のウイン時代の經驗に基づくものである。彼れにあつてはその研究は正に一の生死の闘争であつた。何故ならば、彼れ自身、問題のどん底に生活して居たからである。社會問題とは要するに、虐げられたる階級の生活の問題であり、その解放の問題である。彼れはこれを如何に把握したか？ 彼れは先づこの問題に就いて次の如く語つてゐる。

る。社會問題とは要するに、虐げられたる階級の生活の問題であり、その解放の問題である。彼れはこれを如何に把握したか？ 彼れは先づこの問題に就いて次の如く語つてゐる。

『ウインは、世紀の改まる頃から既に、社會的に面白からぬ都となつてゐた。

稠密たる富裕と慘憺たる貧困とが、激しい流轉をなして對立してゐた。市の中央や中心に近き諸區には多民族國家の怪しき魔力を以つて脈打つ所の人口五千二百萬の國の鼓動がよく感じられた。眼を眩す許りの豪奢に輝ける宮廷は、諸州の凡ゆる富と知識とを磁鐵にも似た力を以つて吸引してゐた。更に之に加ふるに、ハプスブルグ君主制そのものの強大なる中央集權があつた。

この作用の中に、色々の民族の寄り集りから成る民族難炊を一の固まつた形態にまで統合すべき唯一の可能性が與へられてゐた。その結果こそは實に、上級及び最高諸官廳を特に普通以上に首都の君主居城地に集中することになつたのである。

然しウインは何と言つても、舊ドナウ君主國の政治的思想的の中心地であつたのみならず、またその經濟的中心地であつた。將校や官吏や藝術家や學者の軍勢に對立して、それよりも尨大なる勞働者の軍勢が存在し、貴族や商人の富裕と對立して、慘憺たる貧困があつた。環狀通りの宮殿や邸宅の前には、何千といふ失業者が徘徊し、かの舊オーストリア凱旋道路の下には、水道の薄汚^{schmutzig}や泥濘の中に、無數の貧無し者が竄めいて居た。

社會問題を研究するには、ドイツの如何なる都市もウインに優れるはなかつた。然し誤解してはならない。社會問題の「研究」は決して上から見下しただけでは行はれ得るものではない。言はゞこの毒蛇に咽喉を扼されて息の根を絶たれるまでの經驗に自らを曝したことの無い者には、その毒牙の怖しさは決して

分るものではない。この身を以つてする経験の無い場合には、淺薄なる空談か或ひは不實なる感傷の外には何も生れて來ない。而してその兩者共に有害である。前者は決して問題の核心にまで突き入ることが出來ず、後者はその核心を逸して了ふからである。凡そ、幸福に恵まれた人々や自分の手柄で出世した人々の大多數が日常として居る如き、社會的困窮に對する無關心や、「民衆と心を共にする」てふ上衣ズボンの姿の或る種流行婦人連の、内實甚だ傲慢たると共にまた屢々臆面もなく浮つ調子にして、而も常に如何にも慈悲深げの慈善的振舞ひほど、世を毒すること甚しきものを私は知らない。これらの人々は、いづれにしても、その本能なき理性 (instinkloos verstand) を以つてしては到底考へ得ない程、深き罪を犯して居るものである。さればこそ彼等がその社會的「考へ」を實證した場合の結果といふものは、彼等自身も驚かざるを得ない如く常に害であり、往々にして反抗的擯斥をさへ受けるのだ。而して彼等はこれをば、民衆の忘恩の證明として考へる様なことになるのである。

社會的活動 (社會改革運動) なるものは、斷じて左様なことを事とするものではないといふこと、殊に感謝などを要求すべき性質のものではないといふこと、何故ならば、それは實に仁慈などを施すものではなくして、權利を回復するものであるからといふこと——このことをば斯かる種類の人間共は容易に理解しようとなしない。

私は、斯かる方法で社會問題を學ぶことから免かれた。社會問題は、社會問題の苦難の奥底にまで私を引入れることに依つて、私をして「研究」せしむるといふよりも、私自身に對して自らを試験せんと欲し

なくして、權利を回復するものであるから、いふこと——このことをば斯かる種類の人間共は容易に理解しようとする。

私は、斯かる方法で社會問題を學ぶことから免かれた。社會問題は、社會問題の苦難の奥底にまで私を引入れることに依つて、私をして「研究」せしむるといふよりも、私自身に對して自らを試験せんと欲し
て居る様に思はれた。而もこの小兔が無事に上つ健全にその實驗に堪へ得たのは、社會問題の功績たるものではなかつた。(G. H. Hill)

凡そ社會の改革に於いては、充ち足りた階級の一般的無關心と共に、『民衆と心を共にする』などといふ上層遊閑階級者連の『如何にも慈悲深げな慈善的振舞ひ』ほど、有害なものはないといふと、社會改革の活動なるものは左様なことを事とするものではなくして、民衆の失はれたる或ひは奪はれたる權利を回復するものであるといふこと、これがヒトラーの根本認識である。この考へは、マルクス主義を始めとする一般社會主義の社會運動に大體共通とする所であつて、その點に於いてはヒトラー乃至ナチスも一般社會主義と同じわけである。それ故にこそまた一の社會主義であるのである。が、然らば、如何にすべきか？ 我々はこれを聞く前に、いさ少し、彼れが彼れの經験せる勞働者の悲惨な生活及び運命に就いて記してゐる所を見よう。彼れは、彼れの然りであつた謂はゆる『手傳ひ工』乃至『臨時傭ひ』——我國の謂はゆる『人夫』——の仕事の不安定に就いて述べた後（前に引用）、次の如く言つてゐる。

『熟練した』勞働者は、成る程、未熟練者の場合の様に然く頻繁に路傍に放り出されるといふことはない。が、彼等と雖も斯様な運命に對して全然無難であるといふわけではない。彼等の場合には、仕事の缺乏の爲にパンを失ふといふことのない代りに、工場閉鎖や彼等自身の同盟罷業といふものがある。』

『田舎者の若者——多くは、仕事が比較的に樂であると思はれ且つ實際に樂でもあるといふことや、勞働時間が比較的短いといふことから心惹かれ、また大抵は都の放つ眩ゆき光に吸ひ付けられて、都會へとさ、び、ひ、出て来る所の——彼等は未だ所得の安全に慣れてゐる。彼等は仕事を代へるにしても、少くとも新しい職場の見通しが付いた時に始めて、元の職場を去るといふやうにするのが普通である。……………

彼等もまた不安の運命を身に受けるだけの覺悟はしてゐる。彼等は、大抵、幾らかの金を持つて大都會へと出て来る。それ故に、不幸にして暫らくの間は何等の仕事も見付からなかつたとしても、初めのうちは別段絶望落膽を必要としない。が、彼等が一旦見付けた職場を間もなく失ふことになる、事態はヨリ悪化して来る。新たに職場を見付けることは、殊に冬季には、不可能ではなくても甚だ困難な場合が多い。初めの一週間はそのまま過ぎて了ふ。そこでは彼等は、彼等の勞働組合の金庫から失業手當を受け、出来るだけ上手に切り抜けて行く。然し、手許の最後の一銭までも使ひ果し、組合金庫からも、打續く失業の爲に、手當支給を停止されるといふことになる、茲に愈々大困難が到來する。今や彼等は食に飢え、空腹を抱へて諸所を彷徨し、最後の持物までも質に入れたり、賣拂つたりする。斯くしてその身なりは益々見すばらしくなり、外に出て身も魂も毒せられる標々巷へと沈淪して行く。それから更に宿無しと

粟の爲に、手當支給を停止されるといふことになる、茲に愈々大困難が到來する。今や彼等は食に飢ゑ、空腹を抱へて賭所を彷徨し、最後の持物までも質に入れたり、賣拂つたりする。斯くしてその身なりは益々見すばらしくなり、外に出て身も魂も毒せられる様な巷へと沈淪して行く。それから更に宿無しと

もなれば、殊に——普通よく有る例だが——それが多である場合には、悲慘は愈々以つて極つて来る。漸やくのことで彼等が或る何等かの仕事に有り付いたとする。然し其處にもまた同じ運命が繰り返される。彼等は二度目にまた同様の打撃を受け、更に三度目には恐らくその打撃は一層ひどくなる。然し、斯くしてその絶ゆること無き不安定に直面するにつれて、彼等は次第にこれを何とも感ぜずに堪へ忍んで行くことが出来る様になる。反覆が遂に習慣となるのである。

斯くて、曾つては勤勉だつた人間も、次第に、たゞ卑しい利益の爲に彼等を利用せんとする者の道具となつて行く様な人生觀に完全に落ち込んで了ふ。彼等は、自分自身の過ちも無しに仕事を無くしたことが度々である爲に、終ひには失業の一度や二度の多少などは何んでも無くなつて了ふ。それが、最早經濟上の權利を闘ひ取るものではなくして、國家的・社會的又は一般文化的價値の破壊を事とするものである場合でも、平氣となつて了ふ。例へば彼等は、ストライキ好きとまではならぬまでも、ストライキなどは平氣に行ふ様になる。

斯様な過程を私は何千といふ例に就いてハツキリと知ることが出来た。その状況を長く見て居れば居る程、私は始めは多數の人間を燃え立たせるほど惹き付けて置き乍ら、終ひにはこれを無慙にも摺り潰して了ふ所の、この大都會に對して、愈々嫌惡の情を増す様になつた。

人々は其處に來たるや、さうした民衆の中に加つた。人々は其處に留まるや、さうした運命の中に没して行つた。

私も亦、生活の爲に、この世界的都市の中を引廻された。それ故に私は、斯様な運命の作用を身を以て経験し、これを心に味ひ盡すことが出来た。私は其處に尙ほ一つのことを發見した。就職から失業へ、失業から就職へと、絶えず無激に變化するといふことは、それに依つて生ずる収入及び支出の絶えざる動搖と共に、大抵の人々に節約觀念並びに細心なる生活節度の考慮といふものを、永久に無くさせて了ふといふことである。……………」

「家庭の方とは見ると、其處には妻や子供の有る場合が屢々有る。妻子もまた既に斯うした生活に染つてゐる。夫が元來妻子に對して優しくあり、夫らしく父らしき態度を以つて妻子を愛して居れば、尙ほ更然りである。さういふ場合、週給は二・三日の間に家族全體の手使ひ果されて了ふ。金のある二・三日の間は、皆で充分に食べたり飲んだりして、更にその週の残りの幾日かはまた同じ様に空腹を抱へて通して行く。さうした時には妻はこつそりと隣りや近所の知合ひに行つて、幾らかの金を借りたり、また小賣店に少許の借りを作つたりして、その週の残りの不如意な日々を支へようとする。晝飯時には家族はホンの御粗末なる食膳に就き、或ひは全くこれを抜きにすることも屢々有る。皆で次の給料日を待ち焦れ、給料日のことを言ひ交はしつつ、色々の計畫を立てたりする。そして腹をすかせ乍ら、やがてそのうちに再び來たるべき幸福を夢みてゐるのである。

斯くして子供達も既に幼少にしてこの苦境に慣らされて了ふ。

が、夫が始めから自分勝手な行動をし、妻がこれに對して、殊に子供の爲を思つて、反對する様な場合

び來たるべき幸福を夢みてゐるのである。

斯くして子供達も既に幼少にしてこの苦境に慣らされて了ふ。

が、夫が始めから自分勝手な行動をし、妻がこれに對して、殊に子供の爲を思つて、反對する様な場合

には、みじめな結果を來たす。その時には、口争ひや喧嘩が起り、而も夫は妻から益々離れて、一層酒に親しむ様になる。土曜日と言へば定つて夫は酒にひたる。そこで妻は、自分や子供達の生きる爲には、格闘してまで僅かの金でも取上げねばならない。而も大抵の場合は、工場から酒場への途中に於いて待伏せしてその金を握ぎ取らなければならない。終ひには夫は、日曜や月曜の夜になつてから、酒亂となつて、而も一文残らず使ひ果して歸つて來る。そんな時には、往々にして世にも憐れな光景が展開される。

私は何百とも知れの實例に就いてこれを見聞した。初めは不快に感じ、反感さへも覺えたのであつたが、後にはこの痛ましき悲劇の凡てを理解し、その根深い原因を理解する様になつた。それは惡しき境遇の不幸なる犠牲なのである。』(p. 188)

四 如何に改革すべきか

ヒトラーに據れば、前掲に見るが如く、労働者階級乃至無産者階級が稍々もすれば身も心も荒み果て、敗德的となり、反國家的とさへなるのは、結局その『惡しき境遇』の爲であり、その『不幸なる犠牲』に他ならないものである。

然り、『それは惡しき境遇の不幸なる犠牲なのである』。この根本認識無き所には眞の社會改革、

眞の國家革新は有り得ない。何故ならば、若しそれがその境遇即ち社會關係の爲でないとするれば、何等進んでこれを改革する必要はなく、嘗その哀れなる乃至憂ふべき人間共をば、餘りその極端に陥らない様に時々何等かの方法に於いてこれを扶助してやり、精々その間に謂はゆる『思想善導』に依つてその不心得を論し、以つてこれを改心せしむれば宜いことになるからである。我國の『愛國革新派』殊に單なる日本主義や皇道主義を標榜して居る者の多くは今日でも尙ほ、稍々もすれば、社會組織や國家機構の云々を以つて唯物的なりとしてこれを排し、諸々の社會的國家的惡現象を以つて當事者の『精神』の至らざるの故に、換言すれば謂はゆる『不心得』に歸してゐる。さうしなければまた、彼等の日頃説く『精神主義』は機械的精神主義は成立しないのだ。が、流石にヒトラーは、偉大なる精神家であるが、斯かる痴見には陥らなかつた。斯かる見解なるものは、或る特殊の狭い範圍に就いてのみ妥當するものであつて、社會的認識としては虚偽でありウソであるのだ。それは、その根本に於いて、一時我國にも流行を極めたヒトラーの謂ゆる『上衣ズボン姿の流行婦人共』や流行作家共、流行評論家共の、心にもなき社會改革的プロレタリア的言動と同じく誤れるものであり、世を改革するどころか、世を毒するも甚しいものである。この二つのものは、一見甚しく異つて、實は共にその最初より誠意無く魂ひ無き——ヒトラーに擴れば『本能なき』——認識た

共』や流行作家共、流行評論家共の、心にもなき社會改革的プロレタリア的言動と同じく誤れるものであり、世を改革するどころか、世を毒するも甚しいものである。この二つのものは、一見甚しく異つて、實は共にその最初より誠意無く魂ひ無き——ヒトラーに擴れば『本能なき』——認識た

る點に於いて、本質的に同じものである。さればこそ、曾つて恐しく左翼張つて階級的なことを言ひ、一切の國家主義的傾向をば國家社會主義に至るまで『反動』呼ばはりして居た徒輩が、今日平氣で『日本主義』だの『皇道主義』だのと稱し、殊更に精神的國家的なこと、謂はゆる『神がかり』なことを言つて、その陣營に據つて時局に便乗し、何んの良心の苛責も感ぜずにケロリとして居れるのである。

ヒトラーが斯かる愛國革新派、斯かる真正及び擬似神がかりの一派とは最初から如何に異なるものであつたかは、既にこれまでに見て來た所にも窺はれると思はれるが、殊に彼れが後に公然一の『社會主義』をその黨名にまで敢へて表はせる所に最もヨク窺はれるであらう。彼れ自ら記して居る所に據れば——これは『マイン・カンフ』第二卷に記してゐる所であるが——彼れがその黨名にまで敢へて『國民社會主義ドイツ労働者黨』と公然一の『社會主義』を表明するに至つた一つの理由は、斯かる似而非愛國革新派、神がかり愛國派から自らを峻別し、マルキシズムに對すると同様にこれに對して容赦なく戦はんが爲であつたのである。ヒトラーに據れば實にこれらの徒輩は、その眞正と擬似との如何に拘はらず、國家社會を反動化し、混迷化し、その進展を阻害する以外の何物でもないのだ。而してそれといふのも、前記の社會問題に對する『本能なき』爲の根本認識の缺如

に原因してゐるのである。労働者階級乃至無産者階級の精神的及び肉體的な憂ふべき現象——『それは惡しき境遇の不幸なる犠牲なのである』といふこと、これである。

然らば、これをば如何に改革すべきか？　これが全面的解答としてはナチオナルソツイアリズムスがある。が、今はそれが問題ではなくて、その根本認識乃至根本態度が問題である。ヒトラーはこれをば原則として如何に改革すべしといふのであらうか？　既に『それは惡しき境遇の不幸なる犠牲なのである』からには、その結論は自ら明らかでなければならぬ。即ち、その惡しき境遇、惡しき社會關係の斷乎たる打破革新有るのみでなければならぬ。ヒトラーは、彼れの經驗せるウインの労働者の悲惨なる状態及び運命に就いて叙べた後、次の如く語つてゐる。

『私は今日、私にこの悲惨な社會の學校に入ることを命じた神慮に對して、如何に感謝してゐることであらうか！　この學校では私は自分の氣に入らないことでも、最早これを忘れることは出来なかつた。この學校は私を迅速に而も根本的に教育して呉れた。

當時私は、私の周圍の人々に對して失望しみたいと思へば、彼等の外面に現れた態度や生活と、さうした彼等の出て來た理由とを、區別することを知らねばならなかつた。斯くしてのみ、この社會の生活も凡て、失望することなしに堪へ得られるのであつた。この見方からする時には、前記の如き不幸や、悲惨な汚濁

當時私は、私の周囲の人々に對して失望しまいと思へば、彼等の外面に現れた態度や生活と、さうした彼等の出て來た理由とを、區別することを知らねばならなかつた。斯くしてのみ、この社會の生活も凡て、失望することなしに堪へ得られるのであつた。この見方からする時には、前記の如き不幸や、悲惨な汚濁

や頽廢を見ても、最早さうした人々が心に思ひ浮べられずして、寧ろ、さうした悲しき法則の悲しき結果が思ひ浮べられるのであつた。斯くして私は、私自身の生活闘争も決して彼等に劣らず困難なものであつたのだが、その困難を以つて能く、悲しき感傷などに陥つて遂にその様な發展過程の頽廢の結果に陥る様なことから免れたのであつた。

否、それだけに止まらなかつた。

既に當時私は、この状態を改善する爲には、次の如き一の二重の方法の有り得るのみであることを看取して居た。

「ヨリ善き我々の發展の基礎を作り出すといふ最深の社會的責任感と、これに加ふるに、矯正し難き既成の妨害物を打倒するといふ斷乎たる決意、これである。」

自然が既存のものの維持によりも、種の擔當者としての新生のものの養育に最大の注意を傾注するが如くに、人間の生活に於いても亦、既存の惡しきものを強ひて改善するよりも——それは人間の資性といふものを考へる時に九九パーセントまでは先づ不可能なものである——寧ろ來たるべきものの發展の爲にヨリ健全なる進路を最初から保證する方が、ヨリ肝腎たるべきである。

既に私には、ウインに於いて生活の苦闘を續けてゐる間に次のことが明らかとなつて來てゐた。即ち、社會「改革」活動なるものは、安寧福利を圖るといふ様な滑稽にして且つ無用なる御節介の中に、その使命

を見出すべきではなくして、寧ろ、各人を墮落へと導かずには已まぬ或ひは少くともさうした誘惑の怖れある様な我々の經濟生活及び文化生活の組織の中の根本的缺陷を、除去することの中にその使命を見出すべきであるといふこと、これである』(pp. 9—30)

以上に見るが如く、ヒトラーに據れば、世の多くの人々の疾苦頹廢を救ひ、社會を善くする爲には、それらの人々に對して説教したり或ひは姑息な救済を施したりするよりも、彼等をして必然的に斯かる狀態に陥れてゐる所の當該社會關係・社會組織を斷乎として、倒壊革新することが肝腎であり、先決問題たるものである。殊にヒトラーに據れば——これは後に紹介する別の個所に説いてゐる所であるが——爲政者階級を教化し覺醒せしめて、これに依つて一時代の改革を圖るといふ様なことは、全く無駄なものである。何故ならば、爲政者階級なるものは原則として——個人としては例外は有るが——元來左様な『本能』乃至良心を具へたものではないからである。彼等はその本質上、新しき時代の建設の爲には、打倒されねばならぬ『既成の妨害物』に屬する、とヒトラーは見てゐるのである。

近世無産大衆の疾苦頹廢を救済する爲には、その根本乃至究極に於いて、近世社會組織の變革を必要とするといふこと——この見解もまた大體に於いて一般社會主義に共通する所のものである。

近世無産大衆の疾苦頽廢を救済する爲には、その根本乃至究極に於いて、近世社會組織の變革を必要とするといふこと——この見解もまた大體に於いて一般社會主義に共通する所のものである。

社會主義の社會主義たる所以の一つは茲に在ると言つて宜い。マルクス以前の社會主義はこれが實を一部篤志家乃至君主に期待し（それ故に空想的社會主義と稱さる）、マルクス社會主義はこれをプロレタリア階級、近世賃銀労働者階級といふ特殊の階級に托し（それ故に科學的社會主義と稱しプロレタリア社會主義と稱せらる）、ヒトラーの社會主義はこれを廣く國民同胞、庶民に托したものであつた（それ故に國民社會主義と稱す）。而してプロレタリア社會主義はロシアに於いて、國民社會主義はドイツに於いて、既にそれぞれ政權を掌握し、その理想とする社會改革實現の過程へと入つてゐるのであるが、然し、善かれ惡かれ、そのいづれも一時代を茲にまで導くには容易なことではなかつた。社會改革の斯くも困難なる所以は何處に在るか？ その所以は元より一・二に盡きるものではないが、その重大な一つは、前述の根本原因（社會關係）に對する人々の認識の不確實乃至不純に在ることは争はれない。ヒトラーはこれに就いて次の如く至言してゐる。

『この亡國的罪惡に對して最後の斷乎たる手段を遂行するの困難なるは、實に、斯かる時代現象の内部的理由乃至原因に對する判斷の不確實に基づくこと少なからざるものである。

この判斷の不確實なるものは要するに、斯くの如き頽廢の悲劇に對しては己れも罪ある爲の感情から由

來するものに外ならないが、この不確實こそは常に一切の眞摯強固なる決斷を妨げ、従つてまた、自己保存といふ極めて必要なる方便の場合であつても、その實行は常に動搖して定まらず、勢ひまた貧弱にして且つ中途半端なものになつて了ふのである。

斯くの如く自己の罪惡意識の陰影に依つて最早曇らされることのなき時代に至つて、始めて、時代はその内部的落付きも得、大膽に假借するところなく冗枝を切り雜草を刈るの外部的力も得られるのである。

オーストリア國家は、社會的司法も立法も殆んど録に知らなかつた程であるから、その眼を覆ふ罪惡の蔓延を免除することの宜い加減さもまた、飛び投げて甚しいものであつた。(S. 30)

これを要するに、ヒトラーに據れば、眞の社會改革なるものは、その社會害惡の根源たる社會組織の缺陷を確實に認識して、これに對して、當該時代よりも後世のことを考へて、大膽な根本的免除のメスを容赦なく加へねばならぬものであるが、さうした時代の發展の中に育つて來てゐる多くの人々、殊にその中に地位を得てゐる様な者には、それが困難である。彼等殊に後者は、さうした時代の發展乃至構成には己れも罪があり責任がある關係から、第一にその社會害惡の根源を確實に認識することが出来ない。従つてまた、それが爲政者階級たる場合に於いては、必らずしも惡意からでなくても、その對策は常に宜い加減なものとなり、中途半端なものとなり、的外れのものとな

認識することが出来ない。従つてまた、それが爲政者階級たる場合に於いては、必らずしも惡意からでなくても、その對策は常に宜い加減なものとなり、中途半端なものとなり、的外れのものとな

つて了ふ。これは民間團體乃至政黨の場合に於いても同じであつて、斯かる時代害惡の構成に腐れ縁を持つてゐる様なものは、如何に『革新』を云々しても、その認識は常に不確實であり、その對策は常に欺瞞的である。それ故に眞の社會革新なるものは、最早斯かる時代害惡に責任を有しない新しき世代（ゼネレーション）に依つてでなければ行はれ得ないことになるのである。

これは眞に社會改革を欲する者乃至志す者にとつては極めて重要な問題である。その階級的左翼的たると國民的右翼的たるとを問はず、眞の社會革新運動はいづれも、既成の有力者や名士の獲得ではなく、無名の若い者即ち新しき世代分子の獲得に力を注ぐ所以、また注がねばならぬ所以は茲に在る。が、これらの問題にまで更に立ち入つて説くことは、『マイン・カンプ』第一巻に示されてゐるヒトラーの基礎認識の範圍を超えて、その第二巻に説かれてゐる方法論の域にまで踏み込むことになる。既に私は所々に於いて第一巻の範圍を超えてゐる觀さへある。私は茲には順を追つての『マイン・カンプ』研究の出來るだけ忠實な案内人の筈であるのだから、この問題は原著の記述してゐる所に従つて一先づ茲で打切り、次に更にヒトラーがウインに於いて如何に社會主義運動に共感し、而も如何にマルクス主義者に成らなかつたかを紹介するであらう。これは社會問題の研究に直ちに關連する問題であり、また彼れの原著に續いて記述してゐる所であるのだ。

五 マルクス主義の勃興とその原因

ヒトラーが孤兒となりてウインに苦學力行し、窮乏のドン底に身を以つて社會問題を経験研究してゐた時（一九〇七、八年前後の頃）、ドイツ及びオーストリアに於いては、マルクス主義は『社會主義』の名に於いて燎原の火の如く發展し、將に各その第一黨たらんとしてゐた（戦前に各第一黨と成る）。

マルクス主義とは一體如何なるものか？ マルクス主義に就いては筆者は、曾つて十年も専心研究し——但しヒトラーと同じ様にこれに反對の立場から——我國のマルクス主義者諸君などよりは

ヨク知つてゐる積りであるが、一言にしてこれを言へば、非國民、非國家社會主義と言ふことが出来る。勿論マルクス主義も虐げられたる階級を解放せんとするものである。が、それは、根本に於いて何等の民族觀念・同胞觀念・從つてまた祖國觀念もなく、階級及び階級利害以外には殆んど何物も認めず、一の國家國民として自民族を強化することに依つてではなく、寧ろこれを弱化し破壊することに依つて、その目的を達成せんとするものであり、而もその爲には殆んど手段を選ばざるものである。マルクス主義は、虐げられたる階級を解放するといふその善き目的乃至標榜にも拘ら

物も認めず、一の國家國民として自民族を強化することに依つてではなく、寧ろこれを弱体化し破壊することに依つて、その目的を達成せんとするものであり、而もその爲には殆んど手段を選ばざるものである。マルクス主義は、虐げられたる階級を解放するといふその善き目的乃至標榜にも拘らず、その本質に於いて、如何に悖德・無道・陰險・兇惡なものであるかは、朝にあつて單にこれを彈壓の爲に研究して來た者や、大學の研究室などで謂はゆる『思想善導』や時勢に遅れまい爲に研究して來た者には、その全思想體系と共に、到底眞に理解され得ない。それは、同じく被壓迫國民大衆解放の信念の爲に野に在つて、而もこれと相容れる能はず、身を以つてこれを研究し、これと戦つて來た者のみが、眞に知り得る所である。

が、このマルクス主義も、その國民各員が眞にその國家の一員として、政治的・經濟的・文化的に、その國家の恩恵乃至名譽に參與してゐる國に於いては、何等恐るるに足らないものである。何故ならば、斯かる國に於いては、人々の國家的觀念は必然的に強固であり、マルクス主義もその發展の餘地が無いからである。然るに當時のオーストリアは、前に引用せるヒトラーの記述にも見るが如く、その點に於いて正に逆であつて、マルクス主義に好個の發展余地を與へてゐた。貧富の懸隔は甚しく、殆んど別世界を形成して居り、爲政者階級は無自覺にして、ハプスブルグ神權思想の下に人民を家畜扱いにし、たゞ權力を以て一切の解放運動を彈壓するのみで、社會的司法も立法も錄に知らず、國民大衆の疾苦を棄てて顧みなかつた。斯かる國家に於いては人々は、國家的國民的たらんとしても、その國家的國民的たり得よう筈は無いのである。彼等はその國家に就いて、感謝

五 マルクス主義の勃興とその原因

ヒトラーが孤兒となりてウインに苦學力行し、窮乏のドン底に身を以つて社會問題を經驗研究してゐた時（一九〇七、八年前後の頃）、ドイツ及びオーストリアに於いては、マルクス主義は『社會民主主義』の名に於いて燎原の火の如く發展し、將に各その第一黨たらんとしてゐた（戦前に各第一黨と成る）。

マルクス主義とは一體如何なるものか？ マルクス主義に就いては筆者は、曾つて十年も専心研究し——但しヒトラーと同じ様にこれに反對の立場から——我國のマルクス主義者諸君などよりはヨク知つてゐる積りであるが、一言にしてこれを言へば、非國民≡非國家社會主義と言ふことが出来る。勿論マルクス主義も虐げられたる階級を解放せんとするものである。が、それは、根本に於いて何等の民族觀念・同胞觀念・従つてまた祖國觀念もなく、階級及び階級利害以外には殆んど何物も認めず、一の國家國民として自民族を強化することに依つてではなく、寧ろこれを弱化し破棄することに依つて、その目的を達成せんとするものであり、而もその爲には殆んど手段を選ばざるものである。マルクス主義は、虐げられたる階級を解放するといふその善き目的乃至標榜にも拘ら

ず、その本質に於いて、如何に悖德・無道・陰險・兇惡なものであるかは、朝にあつて單にこれを

ものである。マルクス主義は、虐げられたる階級を解放するといふその善き目的乃至目標にも拘らず、その本質に於いて、如何に悖德・無道・陰險・兇惡なものであるかは、朝にあって單にこれを彈壓の爲に研究して來た者や、大學の研究室などで謂はゆる『思想善導』や時勢に遅れまい爲に研究して來た者には、その全思想體系と共に、到底眞に理解され得ない。それは、同じく被壓迫國民大衆解放の信念の爲に野に在つて、而もこれと相容れる能はず、身を以つてこれを研究し、これと戦つて來た者のみが、眞に知り得る所である。

が、このマルクス主義も、その國民各員が眞にその國家の一員として、政治的・經濟的・文化的に、その國家の恩恵乃至名譽に參與してゐる國に於いては、何等恐るるに足らないものである。何故ならば、斯かる國に於いては、人々の國家的觀念は必然的に強固であり、マルクス主義もその發展の餘地が無いからである。然るに當時のオーストリアは、前に引用せるヒトラーの記述にも見るが如く、その點に於いて正に逆であつて、マルクス主義に好個の發展素地を與へてゐた。貧富の懸隔は甚しく、殆んど別世界を形成して居り、爲政者階級は無自覺にして、ハプスブルグ神權思想の下に人民を家畜扱ひにし、たゞ權力を以て一切の解放運動を彈壓するのみで、社會的司法も立法も錄に知らず、國民大衆の疾苦を棄てて顧みなかつた。斯かる國家に於いては人々は、國家的國民的たらんとしても、その國家的國民的たり得よう筈は無いのである。彼等はその國家に就いて、感謝

すべき物を持たず、誇るべき物を持たず、従つてまた護るべき物を持たないのである。ヒトラーはこの問題乃至事實を當時のウインの労働大衆即ち彼れの仲間に見て見て次の如く言つてゐる。

『私は、當時の私の仲間達の經濟的窮乏、その素行上及び道徳上の粗暴乃至その精神的教養の低さには、いづれ劣らずどんなに驚かされたか知れない。

或る哀れな浮浪者などが、自分はドイツ人で有らうが無からうが同じことだ、必要な生活さへ出来れば何處にどうあらうと結構だ、などと放言して居るのを聞いたならば、我が一般市民階級の如きは、往々にして、憤慨の餘り飛び上らんものでもない。

斯かる場合その「國民的矜持」の缺如は極度に非難され、その精神に對しては痛烈に憎惡が浴せられる。が、一般市民階級の幾人の人が能くこれまでに、然らば彼等自身がこれに比較してヨリ善き精神を具有してゐる原因はそも／＼何處に在るかを、我れと自ら反省して見たことがあるか？

祖國及び祖國民の文化生活及び藝術生活の凡ゆる領域に於ける偉大さに對する無數の個々の思出こそは全體として、人々に斯かる惠まれたる國民の一員たるの誇りを與へるのであるが、果して幾人の人が能く斯うした思出を理解してゐるであらうか？

祖國への誇りが斯うした凡ゆる領域に於ける祖國の偉大さの認識に如何に深く依據してゐるものであるかを、果して幾人の人が能く負付いてゐるであらうか？

我等の一般市民階級は、謂はゆる「民衆」にはその祖國に對して誇りを持ち得る條件が如何に啖ふべき

祖國への誇りが斯うした凡ゆる領域に於ける祖國の偉大さの認識に如何に深く依據してゐるものであるかを、果して幾人の人が能く氣付いてゐるであらうか？

我等の一般市民階級は、謂はゆる「民衆」にはその祖國に對して誇りを持ち得る條件が如何に囁ふべき程度にしか與へられて居ないかを果して考へてゐるであらうか？

「それは他の諸國に於いても矢張り同じことである」、「それにも拘はらず」其處に於いては勞働者は自國民に味方してゐる、などと言つて胡亂化してはならない。假りにその通りであつたとしても、それは何等自分自身の怠慢の辯明になり得るものではない。のみならず事實はまた決してさうではないのだ。……」
(28—31)

『試みに次のことを一度想像して見よ！』

陰氣な二つの室しかない穴倉の様な家に、七人家族の勞働者が住んでゐる。五人の子供のうちには、假りに、三歳の小兒も有るとしよう。三歳と言へば、最初の印象が意識に上る年齢である。天才的な者ならば、この時代の記憶は後年にまで残る位である。ところで室は小さい上に人間が餘りに詰り過ぎて居る爲に萬事ウマク行かない。斯くして喧嘩や爭論の起ることが實に度々である。人々は互ひに扶け合つて暮すよりも、互ひに制壓して暮す。廣い住居ならば一寸離れてゐるだけで直ちに緩和され、自ら解消されて行く様な些細な争ひでも、此處では最早二度と再び消え難い不快な争ひとまでなる。それも子供達だけの場合ならまだ大したことはない。子供達も勿論、同じ様な事情でいつもヨク争ひを起すが、然しまた互ひに早速キレイに忘れて了ふ。ところが若しこの争ひが兩親の間に而も殆んど毎日の様に、その内部の無教養

さを遺憾なく發揮して行はれるならば、例ひ徐々であらうともその實物教育の結果といふものは子供の上に現はれずに已まない。この二人の間の争ひが、妻に對する夫の粗暴な暴行といふ形態を探り、泥醉狀態で妻を虐待するといふ様なことにまでなつたら、その結果は果して如何なるものでなければならぬか、これは斯かる環境を知らない者には想像するさへも困難である。小さな可哀想な子供は、既に六歲頃にして大人でさへもたゞ暗然とする様な事柄を知る様になる。精神的には蠱毒され、肉體的には榮養不良にされ、その貧弱な頭は萎なしにされて、この幼き「國家成員」は國民學校へと「トラ／＼」人つて行くのである。そして時迫つてから大騒ぎし、讀み書きをする様な有様で、殆んど萬事この調子である。家庭で學ぶといふ様なことは全く問題にならない。問題にならないのみか、事情は正に逆である。母も父も、自分達の間だけでは勿論のこと、子供に對してさへも、二度と繰り返すことの出来ない様な言ひ方で教師や學校の噂話をする。自分達の幼い子供を懇々と説諭して正しい考へに導くといふ様なことはなく、寧ろ例に依つて野卑なこと許り言つて聞かせるのが常である。其他のことでも凡て、この小さな子供達が家庭で聽くことは悉く、親しかるべき周囲の人々への敬愛の念を強めることには少しもならない。北處には人間味の有る何等の善き物も無く、社會の制度の如きでも一つとして惡口の對象でないものはない。學校の教師から始つて國家の元首に至るまで、凡てさうした對象である。宗教に關しても道德に關しても、國家のことでも社會のことでも、悉く然りであつて、それらは皆罵倒され、醜惡極まる言葉を以つて下賤な考への塵に汚されて了ふ。斯くしてこの子供が十四歲で小學校から送り出される時、果して彼れが以前よりどれほど立派

會のことも、悉く然りであつて、それらは皆罵倒され、醜惡極まる言葉を以つて下賤な考への塵に汚されて了ふ。斯くしてこの子供が十四歳で小学校から送り出される時、果して彼れが以前よりどれほど卑劣になつてゐるかは、判斷に寧ろ困難な位である。眞の知識や能力はと言へば、殆んど信ぜられないほど低劣であり、或ひはまたこの年齢で既に、人々が見たら髪の毛を逆立てるであらう程の不徳をさへも覺え込んで、その舉動たるや腦り果てた破廉恥なものである。

斯うした人間が、今やその世の中に出る準備を了へたことになり、世の中へと出て行くのであるが、彼れは其處で一體どういふ事になり得るであらうか？ 最早彼れにとつては世に何等の尊いものも無い。彼れは立派な何物も教へられなかつた。寧ろ反對に人生の凡ゆるドン底を経験し知つてゐるのみなのだ。

三歳の童子は今や十五歳にして、凡ゆる權威に對する輕蔑者となつてゐる。この若者は、服や汚れの外には彼れを高尚な感激に誘ひ得る様な何物もまだ覺えてゐないのだ。』(63—63)

これは一體誰の罪か？ さうした本人達、無産者の子供達及びその親達の罪か？ これに對してはヒトラーは既に答へてゐる。『それは惡しき境遇の不幸なる犠牲なのである』と。而してそれ故に先づ、さうした社會環境を斷乎として改革せねばならぬとなしてゐることは、既に我々の見たところである。然るに一般人士殊に支配階級者は、無産大衆が稍々もすれば非愛國的なるを見て驚き非難するが、彼等は無産者が愛國的たらんとしてもその愛國的たり得ない原因を少しでも考へて見たことがあるか、とヒトラーは言ふのである。彼は更に次の如くまで言つてゐる。

『私は當時、それまでは全く氣付いてゐなかつた所のものを、急に且つ根本的に理解するに至つた。』

「國民を眞に『國民化』(Nationalisierung) する問題は、同時に、何よりも先づ、各人の教育を可能とする基礎たる健全な社會關係を建設するの問題である。蓋し教育及び學校を通して祖國の文化的・經濟的・就中政治的な偉大を知る者のみが、斯かる國民の一員たるべき衷心からの誇りを持つことが出来、また持つからである。我々はたゞその愛するものの爲にのみ戦ふことが出来、その尊敬し得るもののみを愛することが出来、その少くとも知り得るもののみを尊敬し得るのだ。」(G. Sauer)

『然るに我々の場合に於いては、それが消極的に置き忘れられてゐる許りでなく、更にその上に各人が幸ひに學校で學び得た僅かのもので、積極的に破壊してゐるのだ。我が國民を政治的に毒害する諸方策は、大衆がその窮乏と苦難の爲に思ふ様にも獲られなかつた僅かのもので、大衆の心理と記憶とから食ひ取つてゐるのだ。』(ibid.)

國民を眞に『國民化』する爲に愛國のならしむる爲には、何よりも先づ、國民が眞に愛し得る様な社會關係を作り出さねばならない。一方には、王侯の如き廣大な邸宅を擁して、數多の召使ひを召使ひ、暖衣飽食をこれ事としてゐる階級が有るのに、他方には『陰氣な二つの空しか無い穴倉の様な家』に七人もの家族が食ふや食はずで住んでゐる様な状態では、到底一國大衆の『國民化』は

期待されない。然るにオーストリア（及びドイツ）はどうであつたか？ さういふ點に就いて何等

召使ひ、暖衣飽食をこれ事としてゐる階級が有るのに、他方には『陰気な二つの室しか無い穴倉の様な家』に七人もの家族が食ふや食はずで住んでゐる様な状態では、到底一國大衆の『國民化』は

期待されない。然るにオーストリア（及びドイツ）はどうであつたか？　さういふ點に就いて何等配慮されなかつたのだ。否それどころか、爲政者階級は無自覺にして、斯かる状態を改革せんとする一切の運動を彈壓し、逆の政策許り行つてゐたのだ、とヒトラーは言つてゐるのである。

斯かる状態の下に、マルクス主義が、知識階級及び勞働者階級の間に、その恐るべき勢力を延ばして行つたことは、まことに當然のことと言はねばならない。ヒトラーでさへもマルクス主義の如何なるものであるかを眞に知るに至るまで間は、寧ろこれに好意を寄せてゐたのであつた。彼れは自ら次の如く記してゐる。

『私の年少時代に社會民主主義（マルクス主義）に就いて知つてゐたことは、極めて偉かなものであつたと共に、まづ甚しく不正確なものであつた。

社會民主黨が無記名普通選挙權の爲に闘つて居たことは、私の心ひそかに喜べるところであつた。それは私の甚しく嫌ひなハプスブルグ支配を必ずや弱めるに至るに相違ないと、既に當時私の悟性は私に言ひ聞かせてゐたのであつた。この確信を以つて私は、一千萬のドイツ民族を死の宣告にまで至らしめるが如き世にも有り得べからざる國家をば、必ずやその崩壊に至らしむるものと信ぜられるところの凡ゆる發展を歡迎したのであつた。』（S. 39）

六 マルクス主義との衝突から對立へ

ヒトラーは最初、まだマルクス主義を眞に知るに至らなかつた時、マルクス主義に對して寧ろ好意を寄せてゐたことは、前に言及の如くである。このヒトラーが何故に、遂に終極的にマルクス主義と相容れる能はず、逆にこれに對して最も熾烈なる反對者となつたか？ この問題はヒトラー乃至ナチスを知る上に極めて重要と思はれるので、以下、前に引用せる所と多少重複する點もあるが少しく立ち入つてこれを紹介したいと思ふ。彼れは、問題の『マイン・カンフ』第一卷第二章『ウイン修業苦難時代』の中に、彼れの『讀書法』なるもの——これは要するに精讀要約主義を強調せるもので、前章に紹介せる彼れの歴史研究法と全く軌を一にせるものである——に就いて述べた後次の如く言つてゐる。

『私の年少時代にゾツイアルデモクラティ（*sozialdemokratie*）——社會民主主義又は社會民主黨——に就いて知つてゐたことは、極めて僅かなものであつたと共に、また甚しく不正確なものであつた。

社會民主黨が無記名普通選舉權の爲に戦つたことは、私の心ひそかに喜べるところであつた。このことは私の甚しく嫌ひなハブスブルグ支配を必ずや弱めるに至るに相違ないと、既に當時私の悟性は私に言ひ

聞かせてゐたのであつた。ドナウ國家（舊オーストリア）はドイツ民族を犠牲にして以外には斷じて維持

知つてゐたことは、極めて僅かなものであつたと共に、また甚しく不正確なものであつた。
社會民主黨が無記名普通選舉權の爲に戦つたことは、私の心ひそかに喜ぶるところであつた。

私の甚しく嫌ひなハブスブルグ支配を必ずや弱めるに至るに相違ないと、既に當時私の悟性は私に言ひ聞かせてゐたのであつた。ドナウ國家「舊オーストリア」はドイツ民族を犠牲にして以外には斷じて維持されないといふこと、而もドイツ分子を漸次スラヴ化するの犠牲も、何等その後に一の眞に生存能力ある帝國の存續を保證するものではないといふこと、何故ならばスラヴ民族の國家維持力なるものは、甚しく疑はしきものと考へられねばならないからといふこと——この確信の下に私は、一千萬のドイツ民族を死の宣告にまで至らしむるが如き世にも有り得べからざる國家をば、必らずやその崩壊に至らしむるものと信ぜられる所の凡ゆる發展を歓迎したのであつた。言語の混亂が議會を侵蝕し分解して行けば行くほど、私に據れば、このバビロンの紊亂帝國の瓦解の時は益々近づいて來、それと共に我がオーストリア・ドイツ民族の自由の時もまた來たるに相違なかつた。而して斯くして始めて、それから更に、將來何時か、その元の母國「ドイツ」への合體も可能たり得るものと思はれたのだ。

それ故に私にとつては、右の社會民主黨の活動も共感なきものではなかつた。殊に同黨が——これは私の無邪氣な氣持から愚かにも尙ほ信じてゐたところであつたが——勞働者の生活條件の向上の爲に戦つてゐたことは、前記の普通選舉實現の爲のその努力と共に、私には、この黨は非難するよりも寧ろ稱讃すべきものに思はれたのであつた。が、私をして最も失望せしめたことは、ドイツツウム「ドイツ民族乃至ドイツ主義」確保の爲の鬭争に對する彼等の敵對的態度であり、スラヴの「同志達」の好意を得んが爲のその憐れむべき媚び諂ひであつた。而もそのスラヴの「同志達」は、右の社會民主黨の求愛をば、それが何か實際の利益の許與を伴ふ限りに於いては成るほどこれを受け容れてゐたが、然らざる場合に於いては高

く尊大に構へて動かず、彼等ウルリキを食共に對して、傲然として、その當然の悔慙を與へてゐたのである。(8. 39—40)

ヒトラーが何故にマルクス主義に賛成し得なかつたかは既に右の引用文の中にも凡そ窺はれる所であるが、茲で私は『社會民主主義』乃至『社會民主黨』なる語に就いて少しく説明し、人々の注意を求めて置く必要がある様に思ふ。然らざれば、前掲のヒトラーの言及び殊にこれから引用するそれは、充分理解され得ないと思はれるものがあるからである。

ヒトラーが茲に乃至『マイン・カンフ』の中に言つてゐる『社會民主主義』乃至『社會民主黨』とは、要するに、當時のマルクス主義乃至マルクス主義黨の謂ひに外ならないものである。曾つてヒトラーが茲に問題としてゐる當時に於いては、ドイツに於いてもオーストリアに於いても、否世界各國に於いて、マルクス主義は『社會民主主義』乃至『社會民主黨』の名の下に活動して居り、而もそれが唯一のマルクス主義乃至マルクス主義黨であつたのである。尤もそのそもくの歴史を尋ねれば、『社會主義』なる語が曾つてもまた現在も決してマルクス主義と同義語でないと同様に、『社會民主主義』なる語もその最初には必ずしもマルクス主義と同じものではなかつた。この語が何人の創造に始まるかは信ずるに足る説もなく明らかでないが、少くともその一般に通用するに至つた

のは、ドイツ社會民主黨が成立し、これを標榜して以來のことに屬する。而してドイツ社會民主黨

『社會民主主義』なる語もその最初は必ずしもマルクス主義と同じものではなかつた。この語が何人の創造に始まるかは信するに足る説もなく明らかでないが、少くともその一般に通用するに至つた

のは、ドイツ社會民主黨が成立し、これを標榜して以來のことに屬する。而してドイツ社會民主黨はその最初如何なるものであつたかといふに、ドイツに於いてビスマルクの社會政策その他と共に屢々『國家社會主義 (Staatssozialismus)』の名を以つて呼ばれる——但し本人達自らは『國家社會主義』を標榜したことなし——國家主義的社會主義のラッサール派と、明らかに國際社會主義派たるマルクス派との妥協に依つて組織されたものであつた。従つてその標榜する所の『社會民主主義』なるものも當初は、ラッサールのともマルクスのとも付かず、その間の關係は甚だ曖昧なものであつた。或ひは最初は寧ろラッサールの傾向が強かつたことと云ひ得る。然るにその後、前世紀の末葉に至つてマルクス主義派が大勢を占め、ラッサール派を同黨から驅逐して、公然マルクス主義を以つて同黨の信條と定め、これを黨綱領に採用した。爾來、『社會民主主義』乃至『社會民主黨』と謂へば、マルクス主義乃至マルクス主義黨に外ならぬものとなつたのである。而してヒトラーのウイン時代は正にその時代、即ちマルクス主義がその競敵たるラッサール主義乃至ビスマルク主義を見事に屠つて、『社會民主主義』及び『社會民主黨』の名の下に破竹の勢ひを以つてその勢力を伸ばしてゐた時代であつたのだ。

このマルクス主義としての『社會民主主義』の關係は、其後、前世界大戰の終りに至つて、今日

の謂はゆる『共產主義』が『眞正マルクス主義』を標榜し社會民主黨に對抗して現れるに及んで、一の變化乃至制限を受けるに至り、『社會民主主義』は『正統マルクス主義』を主張し乍らマルクス主義の一種、合法的手段に依るマルクス主義を意味するものとなつた。マルクス主義が二つ現れるに至つたのである。然しそれまでは、ドイツに於いてもオーストリアに於いても、『社會民主主義』が唯一のマルクス主義であり、『社會民主黨』が唯一のマルクス主義黨であつたのだ。ヒトラーが、『共產主義』をば恰かも知らざるが如くこれに言及せずして、専ら『社會民主主義』のみを問題としてゐるのは、右の事情に基づくものである。今日では『社會民主主義』よりも寧ろ『共產主義』がマルクス主義を代表するものとなつてゐるが、ヒトラーが、『マイン・カンフ』を綴つた當時に於いては、『共產主義』乃至『共產黨』は社會民主主義陣營から分裂出現して尙ほ間もなく、未だ海のものとも山のものとも付かず、殊に彼れのウイン時代に於いては社會民主黨の外にマルクス主義黨は無かつたのである。『マイン・カンフ』を讀むに當つては、何人もこの點をハツキリと認識して置く必要がある。

然らばこの社會民主主義即ちマルクス主義と、彼れは何故に如何に衝突したか？ 彼れは前に引用せる叙述に直ぐ續けて次の如く語つてゐる。

用せる叙述に直ぐ續けて次の如く語つてゐる。

「斯かる次第で十七歳の頃の私には、『マルクス主義』なる語は尙耳知らず聞いたこともないものであつたと共に、『社會民主主義』と社會主義とは同じ概念のものゝ様に思はれてゐた。されば、私をしてこの前代未聞の國民欺瞞に對して眼を開かしむるには、此處でもまた、先づ運命の拳が必要であつた。

私はそれまでといふものは、社會民主黨に就いては、唯だその若干の大家示威運動を傍觀して知つてゐただけであつて、その黨員達の心性やその教義の本質に對しては、何等の洞察をも全く有してゐなかつたが、今や一舉にして私はこの黨の教育及び『世界觀』の所産に接觸するに至つたのであつた。そして、普通ならば恐らく何十年も掛つて漸やく會得したであらう所のものを、私は今や僅か數ヶ月にして把握したのであつた。即ち、それは社會道徳と隣人愛の假面の下に續行する一のベストに外ならないといふこと、而して人類はこのベストをば出來るだけ急速にこの地上から驅逐せねばならぬといふこと、蓄し、然らざる場合には逆に人類はこの地上から容易に驅逐されて了ふであらうといふこと、この悟識である。

私は或る建築工事で始めて社會民主主義者達と遭遇したのであつた。

それは既に最初から餘り愉快なものではなかつた。私の身なりは尙ほ多少は整つて居り、私の言葉は殷勤であり、私の態度は謙虛勝ちであつた。私は未だ私自身の運命に煩はされること多くして、その周圍に係はつてゐる餘裕などは殆んど無かつた。私は餓死せざらんが爲に、そして例ひ尙ほ遅々としてあらうとも修養を續け得んが爲に、専ら仕事を求めるに迫はれて居た。若し私が、新たなる仕事場へ入つて、早くも

三日日か四日目に或る一の事件に遭遇しなかつたならば、私は恐らくこの私の新たな環境にも結局何等の係り合ひもなしに過ぎたであらう。然るに其處に起きた事件は、私に直ちに態度の決定を迫つたのであった。私は労働組合に加盟を要求されたのであった。

労働組合に就いての私の知識は、當時尙ほゼロに等しいものであつた。私は、労働組合といふものゝ存在が妥當なものか妥當でないものかも、當時尙ほ明らかにし得なかつた。それ故に、私も組合に入らねばならぬと言はれた時に、私はこれを拒否した。私のその理由とするところは、事柄の是非は私には分らないが、然し何事にも限らず私は強ひられて爲すことを好まない、といふのであつた。彼等が直ちに私を追ひ出してはなかつた理由は、恐らくこの事柄の是非は云々にあつたであらう。彼等は恐らく、二・三日の中に私を改宗させるか或ひは追従させることが出来るものと考へたのであつた。いづれにしても彼等は、その點で全く期待が外れてゐた。その後二週間経つて私は、假りにそれまでは加入する氣があつたものとしても、今は最早斷じてその氣になれなくなつた。その十四日の間に私は、私の周圍を仔細に研究したものであつた。而してその結果、彼等労働組合員なるものは私には甚だ面白からざるものに思はれて來、この世の如何なる力も最早私をして組合に加入させることの出来ないものとなつたのであつた。初め幾日かは私は不快であつた。

晝飯時になると、一部の連中は最寄りの飯食店へと出掛けだが、他の連中は工場に居残つて、其處で大抵は極めて貧弱な晝食を攝つた。彼等は大概妻孥者であつて、彼等の妻孥は見すばらしい食器に晝の

スーブを入れて持つて來たりした。週末近くなると——私は後に至つて漸やくその理由が分つたのであつ

大抵は極めて貧弱な食糧を齎つた。彼等は、大抵妻孥者であつて、彼等の妻孥は、見すばらしい食器に盡

ス・スープを入れて持つて來たりした。週末近くなると——私は後に至つて漸やくその理由が分つたのであつたが——斯うした人々の數が常に増加した。そして今や政治が談じられた。

私は何處か隅の方で獨り巖の牛乳を呑みパンを噛りつゝ、この私の新たる周圍をそれとなく觀察したり、或ひは私自身の不幸な運命をつくづく考へたりしてゐた。然しその場合私には、堪らないほど色々のことが耳に入つて來た。往々にして彼等は、私にその態度の決定を促す爲に、殊更に私に向けて話してゐるのではないが、と思はれるものであつた。兎に角、其處で私の聞いたところのものはいづれも、私を極度に刺戟する性質のものであつた。彼等は其處で凡ゆるものを否認した。即ち、國民をば「資本家」階級——私はこの言葉だけでも如何に厭々聞かなければならなかつたことか——の一の作りごとと過ぎないものとし、祖國をばブルジョア階級が勞働者階級を搾取せんが爲の機關なりとし、法の權威をばプロレタリア階級を抑壓せんが爲の手段なりとし、學校をば奴隸と共に奴隸所有者をも養成する制度なりとし、宗教をば搾取に供せられる民衆を去勢する爲の手段なりとし、道徳をば愚昧なる羊の忍従の象徵なりとし、其他同じ様にして、一切これを否認した。其處には實に、斯くの如くして怖るべき汚穢の深淵の中に引き入れられなかつた所のものは、全く何一つとして無かつたと言つて宜い。

私は初めは努めて黙つて居た。然し終ひには最早我慢が出来なくなつた。私は遂に腹を定めて彼等に反對することにした。然しその場合私は、現に愈々問題として争はれる諸點に就いて、私自身が少くとも一定の知識を有しない限り、その反對も全く見込みないことを認めなければならなかつた。そこで私は、彼

等がその思ひ誤れる知識を引出して來た所の源泉を探求し始めた。今や私は、書物に書物、ペンフレットにペンフレットを、次から次へと引きも切らずに讀み重ねて行つた。

斯くて工事場では實に歴々大論争が行はれた。私は彼等「社會民主主義者」自身の知識に就いて、日に負かす所の手段、即ちテロ、暴力に訴へるに至つた。敵の代表者の數人が、私に對して、即刻工事場を打ち去るか、それとも建築の足場から突き落されるか、いづれかを選べと迫つた。私は獨りではあるし、抵抗しても仕様がなと思つたので、これも一つの経験と思ひ、前者の途を選んだ。

その余事件をばそのまゝ打棄て置くことは到底出来ないものを感じた。否、最初の憤激が落付くや、この強情が勝ちを制して來た。私は、何がどうあらうとも、もう一度改めて工事場へ行つて見ようと固く決意した。それから二・三週間して、節約して來た僅か許りの賃銀も使ひ果し、窮乏の無情な胸の中に陥るに行かねばならなかつた。斯くて勸と同じ演劇が再びまた初めから行はれることになり、そして結局また前回と同様の結果に終つたのであつた。

當時私は獨りで思ひ悩んだ。一體、斯かる人間共でも尙ほ偉大なる國民に屬する價值を有するであらうか、と?』(5. 40—42)

か、と!?」(の40—42) 一體、斯かる人間共でも尙ほ偉大なる國民に屬する價值を有するであらう

『國民』とか『民族』とかいふものは、一般の人々が考へる様な深き根據ある存在たるものではなくして、一部人士殊に支配階級が自らの爲に殊更に維持強調する所の一の虚構的存在たるものであり、國家乃至國家權力なるものは畢竟するに一階級が他階級を支配し搾取せんが爲の機關に外ならぬものであり、教育・道德・宗教また多かれ少かれ同じ性質のものであるとは、マルクス主義の民族觀であり、國家觀であり、社會觀であり、一言にして言へば世界觀である。ヒトラーは要するにこのマルクス主義の世界觀に賛成出来なかつたのであり、さうした世界觀の信奉者共の思ひ上つた反國民的Ⅱ反同胞的態度にどうしても承服出来なかつたのである。而してその結果が彼れをして深くマルクス主義に思ひを致さしめ、これが研究に没頭せしめると共に、益々その強固な反對者たらしめたのである。彼れ自身既に、一の斷乎たる社會改革の思想Ⅱ社會主義の思想に到達して居たにも拘はらずである。

私はこのヒトラーの自叙個所を読む度に、私自身の過去、私自身の國家社會主義への道を思出すものである。私がマルクス主義に遂に賛成し得なかつた所以もまた茲にあつた。私もまた、長き壓制と苦難の中に鎖されて來た東北の百姓の子として、ヒトラーと同じ様な若さ(二十歳以前)に於

いて、マルクス主義を知る以前に既に、一の強固なる社會改革の思想に到達して居た。私は日清戦争に於ける村でも唯一の名譽ある犠牲者の家庭に生れ、日露戦争時代に意識づけられた者として、子供時代から人々に笑はれたほど熱心なナショナリストであつた。然るにこのナショナリスト、この愛國主義者は、中學時代に於いて既に一の『危険思想家』であつた。然し私に於いてはこれは何等矛盾しないものであつた。私は國家を愛するが故にその不公正なる狀態の改革を必要と考へ、これを改革し多くの同胞を救ふ爲にヨリ一層國家の強化を必要と考へたのである。

その私が、一の文筆家として世に貢獻する『一かどの者』たるべく、謂はゆる笈を負ふてこの東京に出て來た時は、たゞ／＼前世界大戰の直後にして、社會改革の思想及び運動としては、デモクラシーに次いで無政府主義並びにマルクス主義が、正に勃興しつつあつた時であつた。當時の思想青年の多くは滔々としてこれらの思想に走つた。殊に後には、マルクス主義が支配的なものとなつた。私もまた虐げられたる人々を解放するといふ點に於いては、これらの思想及び運動にも充分共鳴することが出來た。今でも私は多分にこれらの思想と共鳴するものを有してゐることを公言して憚らないものである。が、國家及び國體の問題になると、私はどうしてもこれと相容れることが出來なかつた。當時私はその爲にどれほど自ら煩悶したか知れない。苟くも正義を求め眞理を求むる

若者として、その爲の時代革新の戦ひの外に立たねばならないといふことほど、苦しいことはない

來なかつた。當時私はその爲にどれほど自ら煩悶したか知れない。苟くも正義を求め眞理を求むる

若者として、その爲の時代革新の戦ひの外に立たねばならないといふことほど、苦しいことはないのだ。が、私は、學校に於いて、その他の集會に於いて、マルクス主義者や無政府主義者の言動に接すれば接するほど、彼等と相容れないものとなつて行つた。殊に或る二・三の集會に於いて多數を占むる彼等と公然衝突するに至つてからは、私は、『こんな奴等に日本を革新されて堪るか』との念を益々強うし、愈々彼等と戦ふの決意を固めさせられたのであつた。が、その場合私は、勿論マルクス主義も尙ほヨク知らず、彼等の誤謬を充分指摘することが出来なかつた。彼等を打破せんが爲には、私は彼等の思想の本源に就いて先づ彼等以上に知らねばならなかつた。私が、當時マルクスを率先研究しつづ率、先これに反對し『國家社會主義』を創唱してゐた『反動』高島素之氏の下に走り、その指導の下にマルクス主義を研究した所以のもの、殊にその國家論の批判研究に専心した所以のものは——今日私は、マルクス國家論の批判に於いては、故高島氏と共に、世界にも比類なき貢獻をなしたものと固く信じてゐるものであるが——全く斯かる事情に存したのであつた。それ故に私は今日右のヒトラーの手記を讀む毎に、これに他人事ならざるものを感じ、これに限りなき共感、寄せるのである。

眞の愛國者、眞の革新的愛國者の思想的道程は正に斯かるものであり、斯かるものでなければな

らぬのだ。

七 ブルジョア政治にマルクス主義排撃の資格なし

圖らずもマルクス主義者と工事で衝突して以來、ヒトラーのマルクス主義と國民の問題に對する憂慮及びそれからするマルクス主義の研究は、恰かも何か生靈にでも憑かれたが如き狂氣的なものとなつて行つた。前掲の『當時私は獨りで思ひ悩んだ。斯かる人間共でも尙ほ偉大な國民に屬する價值を有するであらうか?』と。これは苦しい問題であつた。何故ならば……』云々と述べた後彼は次の如く語つてゐる。

『斯様に色々と思ひ悩み考へ込んでみた間にも、私は、この最早自分達の民族の中に數へらるべくもない集團が一の脅威的勢力にまで増大して行くのを見て、不安に驅られた。

或る日、ウイン労働者の大示威行進の行はれた時、私は、その蜿蜒として果てしなき四列縱隊の行進をば如何に驚異の念を以つてこれを凝視したことであつたか! 私け殆んど二時間も其處に立ちつくした。

そして、餘ろにうねりをなして過ぎ行く人間の長蛇の列をば息を殺して見守つた。遂に私は、壓へ付けら

ば如何に驚異の念を以つてこれを監視したことであつたか！ 私に殆んど二時間も其處に立ちつくした。

そして、餘ろにうねりをなして過ぎ行く人間の長蛇の列をば息を殺して見守つた。遂に私は、壓へ付けられた様な不安な氣持ちになつて、其處を立ち去り、自分の住居の方へとフラ／＼歩いて行つた。途中私は取る煙草屋の店頭に、舊オーストリア社會民主黨の中央機關紙「アルバイターツアイツング（勞働者新聞）」の出でゐるのを見出した。同新聞は、私が新聞を讀む爲に屢々行く所の或る安い大衆食堂にもヨク置かれてゐたものであつたが、私はそれまでは、その全體の論調が私には精神的硫酸の如く感ぜられるこの淺ましき新聞をば二分と續けて眼を通すことが出来なかつた。が今や、この示威運動の壓へ付けられる様な印象を受けるに及んで、私は心に深く期せしめられるものがあり、該新聞をば進んで購めた。そしてこれをば精細に讀んだ。私は夜これを讀みつゝ、その嘘の塊りに對して幾度となく燃え上る憤激を抑へるに苦しんだ。

私はマルクス主義の如何なる理論的文獻よりも、この社會民主黨の新聞を毎日讀むことに依つて、最もヨクこの思想陣營の内部的本質を研究することが出来た。（一九三三）

然らばマルクス主義者は其處に一體如何なることをして居り、ヒトラーは先づ何を知らしめられたか？ 彼れが其處に見出したものは何よりも先づ、マルクス主義者の恐るべく巧智にして而も残忍・狡猾・陋劣なる戰術であつた。大衆を獲得する爲、敵を倒す爲、而して自家勢力を擴大する爲には、如何なる虚言・破廉恥・暴戾・殘虐も辭せざるその假借なき態度であつた。而してこの戰法

の前に、『殆んど數學的に正確な成功』を以つて攻略されて行く同胞大衆の姿であつた。

『その理論的文獻に於ける自由や美や尊嚴を説ける光りキラめく辭句、その如何にも苦心して最深の知識を表明せるかの如き眩ゆき誇言、その如何にも尤もらしい人道的な言ひ振りを——そのいづれも鐵面皮にも聖教なるものゝ、如何なる下劣をも辭せざる・凡ゆる誹謗の手段と全くウソの様なウソ上手とを以つて臨む・野獸的殘虐な態度とは、蓋し何んたる相違であらうか！ 前者は、中流及び上層までの謂はゆる「知識階級」なるものを目指したものであり、後者は一般大衆を目指したものであるのだ。』(五七)

『……………私は今や、この他を容れるなき峻厳なる教説の意義及びその必然的結果をば、まさ／＼とこの兩眼に認めたのであつた。

大衆の心理は生半可なものや弱いものには決して感應するものではない。
恰かも女性の精神的感覺が、抽象的理性の衝動に依つてよりも、寧ろ何かしら充たして呉れる力への名

狀すべからざる感情的憧憬の衝動に依つて動かされる如く、従つてまた女性性は自ら弱者を支配するよりも寧ろ好んで自ら強者に従ふものである如く、大衆もまた弱き嘆願者よりも寧ろ強き支配者を好み、自由寛大なる許容の態度に依つてよりも、寧ろ他を容れざる峻厳なる教説に依つて、心の満足を感じる。大衆は

自由の寛大を與へられても、その大抵はこれをどうして宜いかを殆んど知らず、却つてやゝもすれば見捨

大なる許容の態度に依つてよりも、寧ろ他を容れざる峻厳なる教説に依つて、心の満足を感じる。大衆は

自由の寛大を與へられても、その大抵はこれをどうして宜いかを殆んど知らず、却つてやゝもすれば見捨てられた様な氣持ちにさへなる。大衆は、それが彼等の精神を兇惡化し甚しく恥ぢ知らずたらしむるものであることも、また彼等の人間としての自由を歪曲誤用せしむるものであることも意識しない。彼等はその全教説の内部的虚妄も元より氣が付かない。斯くして彼等はたゞ、その教説の計畫的にする表現の假借なき力と酷烈さとのみを知り、結局これに常に屈伏して了ふのである」(64)

『やがて二年も経たぬ間に私は、社會民主主義の理論及び技術的手段をハッキリと知るに至つた。

私は、この運動が何よりも先づ、道徳的にも精神的にも斯かる攻撃に堪へない市民階級に對して行ふ所の卑しむべき精神的テロ行爲を知つた。即ち彼等は、或る一定の合圖と共に常に、彼等にとつて最も危険と思はれる敵へ向つて、嘘言と誹謗との十字砲火を一齊に浴せかける。而してその攻撃される相手がその爲に神經を惱まされ氣力を失つて、たゞ再び平穩を得ない許りに、その厭はしき彼等の前に降るまで、その攻撃を續けるのである。

ところが生來鈍重な人間は、一回位の攻撃では仲々その平穩を得ようとしなない。その場合には、この攻撃は新たにまた開始され、遂にその野犬への恐怖が麻痺状態に至るまで、幾度となく繰返される。社會民主主義者は、自己の經驗よりして、力の價値を最もよく知つてゐるので、斯かる一般にも稀れなる素質をその本性の中に有すると感じられる人間に對しては、最も激しくその攻撃を浴せて行く。そして反對に

他の側の弱い者をば、その認められる乃至想像される精神的性質に従つて、或ひは用心深く或ひは赤裸に凡てこれを裏めそやして行く。彼等は、無氣力にして決斷なき天才よりも、遠慮深くてもその本性に於いて強固な人間を恐れる。彼等の最も歡迎するものは、精神的にも能力的にも弱き者である。

社會民主主義者は、如何にもたゞ平穩を求めるかの如く見せかけることを心得てゐる。が、さうして、彼等は、一般の注意が諸他の事柄に向けられて居て別に障害の起りさうもない時、又は人目を聳動させて悪い反對者を新たに起させる恐れのない時に、或ひは無言の強奪をなし、或ひは素早く實際上の竊盜をなして、用心深く然し斷乎として、次から次へと地歩を獲得して行くのである。

それは、人間の凡ゆる弱點を精密に考慮して立てられたタクティク（戰術）である。従つて、これが反對者側も毒ガスには毒ガスを以つて戰ふことを知らざる限り、この戰術の結果なるものは殆んど數學的に正確な成功を齎らすことは必然である。』(S. 41—42)

ヒトラーは斯様にマルクス主義の恐るべき戰術を早くも看取し、既にこれに對して同じく斷乎たる戰ひ方の必要までも考へたのであつたが、然しその場合に於いても彼れは、このマルクス主義そのものの乃至その本來の擔當者（彼れに據れば結局ユダヤ人）と、その犠牲者とを區別することを忘れなかつた。彼れはその犠牲者たる大衆殊に勞働者大衆に深甚な同情を表して、次の如く言つてゐる。彼れに據れば、それは全く境遇の然らしむるものであつて、罪は寧ろ他に存するのである。

れた。彼れに據れば、それは全く境遇の然らしむるものであつて、罪は寧ろ他に存するのである。

『この教説及び組織の文獻及び新聞の深き攷究は、私にとつては、我が國民（Volk）との再會を意味するものであつた。

始めは渡るべからざる罅隙と思はれたものも、今は従前の如何なる時よりも大なる愛への動機となるべきものであつた。この怖しき毒害事件を認識する時、その犠牲者までも非難するといふことは、馬鹿者だけの能く爲し得るところである。……』（S. 44）

『私は、私の當時の苦難時代に對して、自分の國民を自分に再び引戻して呉れたこと、その犠牲者をその誘惑者から區別することを教へて呉れたこと、痛切に感謝するものである。

これらの人々の誤れる結果といふものは、全く犠牲といふより外に言ひ様のないものである。何故ならば、……其處には、そのドン底生活の中にも尙ほ、稀なる犠牲心や誠に忠實なる友情や非常な節制や深き謙讓等の美德を有した至極健全なる血液を有した多くの人々が居たのである。斯うした幾多の善良にして清廉なる人々までが、その政治的活動に於いては、我々の民族の不倶敵天の敵の仲間に加はり、その陣營を鞏固ならしめてゐたのであるが、その所以といふものは全く次の點にあつた。即ち、彼等は新たな教説（マルクス主義）の卑劣さを正に理解しなかつたし、また理解することも出来なかつたといふこと、何人も敢てそこまで立ち入つてこれに注意しようとする者も從來無かつたといふこと、而して結局その社

會的境遇が恐らく他の如何なる意志の存在よりも強力であつたといふこと、これである。曾て何時の日か、あれこれと彼等の陥つて來た窮乏が、彼等を騙つて社會民主主義の神薈に走らしめたのだ。そこへ持つて來て、一般市民階級外に支配階級が、幾度となく、拙劣極まると共にまた實に非道徳極まる態度で以つて、一般に人間として正當なる彼等の要求に對してさへも反對し、さうした態度から何一つ利益を得ることもなくまた結局何等得る見込みも無かつた時に於いてさへも、屢々これを妨害して來たのだ。彼等労働者の中の最も善良なる者までが遂に、労働組合から驅り出されて政治運動にまで走つたのだ。(マラー)

その性格に於いて精神に於いて最良の労働者までもマルクス主義に走らしめた罪は何處に在るか。は、その根本原因の所在と共に、ヒトラーに據れば斯様に極めて明瞭である。それはその虐げられたる境遇の爲であり、無自覺なる支配階級の罪であるのである。この根本認識が有つたればこそ、『國民社會主義革命』も有り、今日のドイツの勃興も有り得たのだが、然らば從來のさうした支配階級の覺醒に依る社會の改革、マルクス主義の打破はどうか？ ヒトラーに據れば、それは斷じて不可なるものである。その覺醒といふことが既に根本に於いて殆んど不可能なものであるが、假りにその覺醒が有り得たとしても、從來さうした不當な社會關係の維持に努力したり賛成したりして

來た様なものは、その爲政者階級たると民間團體たるを問はず、既に社會改革の資格無きものである。政黨の責任は、其の責任を負ふべきものである。

にその覺醒が有り得たとしても、從來さうした不當な社會關係の維持に努力したり賛成したりして

來た様なものは、その爲政者階級たると民間團體たるとを問はず、既に社會改革の資格無きものである。彼等のこれまで重ねて來た罪業は、斯かることを爲すには餘りにも深いものであるのだ。

『何百萬もの勞働者達、彼等は確かに初めはその内心に於いて社會民主黨の敵であつた。が、彼等はこれへ反對しつゝもその場合、ブルジョア諸黨側が凡ゆる種類の社會的要求に對して採れる所の幾度となき金く氣遣ひ沙汰の反對の爲に、遂に社會民主黨の手に陥つたのである。勞働條件の改善や、機械の危険防止設備や、兒童勞働の制限や、少くとも未來の國民を懷妊してゐる期間だけでも婦人を保護すること等、さうした一切の改革企圖に對するブルジョア諸黨の頑迷にも素氣なき拒否は、社會民主黨をしてさうしたブルジョア諸黨のあさましき考への一切の機會を喜んで捉へしめ、その網の中に大衆を捉へしめたのだ。我が政治的「ブルジョア階級」は、彼等が斯くして犯して來た所の罪を今日再び償はうとしても、それは斷じて不可能である。何故ならば、彼等は社會の弊害を除去せんとする一切の企圖に反對せることに依つて、廣く怨恨の種を蒔いた許りでなく、社會民主黨のみが勤勞國民の利益を代表するものであるといふ、全國民の仇敵マルクス主義の主張を明白に是認したものであるからだ。

マルクス主義政黨に對して夙に最大の支持貢獻をなして來てゐる所の組織的勞働組合といふものの存在をして、實際上正に道德的に正當なものたらしめたのも、實に、何よりも先づ、このブルジョア政治であつたのだ』(S. 47—48)

ハ マルクス主義背後の存在としてのユダヤ人

ヒトラーは、そのウイン苦難時代に、他の問題例へば議會や政黨や國家權力等の一般政治問題に就いても、幾多の貴き経験乃至認識を獲たのであつたが（これに就ては次章に紹介す）、就中、その社會問題の體得及びマルクス主義並びにその背後の存在としてのユダヤ人の認識を以つて、その三つの最大の経験としてゐる。『この時代に私はまた「社會問題の外に更に」二つの危険に對して眼を開かねばならなかつた。——マルクス主義とユダヤ人、これである。』(p. 33)と言ひ、また、『斯くてこの時代に私には、社會問題以外の更に二つの極めて重要な問題「マルクス主義とユダヤ人の問題」に於いて、日常生活の経験が徹底的な理論的研究を規定し刺戟するものとなつた。』(p. 33)と言つてゐるのは、取りも直さずその意味のものである。

その社會問題及びマルクス主義の認識に就いては既に我々の見たところである。次に我々は、本章（『ウイン苦難時代』）の最後に、ユダヤ人問題に就いての彼れの認識を見るであらう。彼れは如何にして且つ如何様にこの問題の認識に到達したか？ ナチズムがユダヤ人を不倶戴天の敵として排撃してゐることは周知の如くであるが、その根本原因は何處に在るか？

一言にして結論から言へば、彼れはマルクス主義に就き殊にその反祖國的・反國家的・反民族的

排撃してゐることは周知の如くであるが、その根本原因は何處に在るか？

一言にして結論から言へば、彼れはマルクス主義に就き殊にその反祖國的・反國家的・反民族的なる點に就き深刻なる疑問を懷き、種々とこれを研究してゐる間に、マルクス主義の背後にはユダヤ人の存在してゐること、ユダヤ人はその祖國無く而も後には世界を統一するといふ『選ばれた民族』たる本來的性質よりして、自分達以外の如何なる民族の繁榮をも望まず、寧ろその崩壞を望んでゐるといふこと、マルクス主義もその世界崩壞手段の一つであり、その反國家性・反民族性・反祖國性は茲に由來してゐるものであること、を知つたのである。マルクス主義の背後にはユダヤ人乃至ユダヤ性ありとは、ドイツ、オーストリアに於いては可なり古くから存在する見解らしく、有名な反マルクス主義マルクス學者ヴェルナー・ゾンバルトの如きもその著『プロレタリア社會主義論』其他に於いてこれを極力主張してゐるところであるが、ヒトラーはヒトラー獨自の考察乃至體驗から同じ見解に到達したのであつた。『ロシア人を赤裸にして見よ！ 然らば其處に鞭撻人を見出さん』とは、確かなボレオンの言つた有名な言葉であつたと思ふが、ヒトラーは今や『マルクス主義を赤裸にして見よ！ 然らば其處にユダヤ人を見出さん。』ことを見出したのである。彼れはユダヤ人問題の冒頭に先づ次の如く激言してゐる。

『社會民主主義の外部的正體を洞察すればするほど、私は、この教説の内部的核心を把握せんとする熱望を増して行つた。その場合、公式の黨の文書の様子は勿論殆んど役に立たなかつた。……

私は、然し、この教説の理論的虚偽及び虚妄をばその實際に現はれた事實に就いて考察することに依つて、漸次、この教説の内部的意圖を明瞭に看取することが出来た。私は斯く研究してゐる間に、不氣味な豫感と不吉な恐怖とに襲はれた。私は其處に、エゴイズムと怨恨とから成る一の教説——數學的法則からすれば勝利を得るかも知れぬが、然しその時にまた人類の終焉をも必至とされる所の——を見出したのであつた。

この時に當つて私は實に、この破壊の教説と、それまで私の餘りヨク知らなかつたところの或る一の民族との間の連關を、知るに至つたのであつた。

ユダヤ人を知ることによつてのみ、社會民主主義の内部の意圖、その眞の意圖を知る鍵が與へられる。

ユダヤ民族を知る者の眼には、社會民主黨の目的及び意義に對する誤れる觀念のヴェールが取り去られ、その社會的言辭の煙霧の中から、齒を露き出してあざ嗤ふマルキシズムの顔が浮んで来る。(F. H.)

『マイン・カンフ』は元來ドイツ人に讀ませる爲に書かれたものであり、右の引用句も我が讀者諸君には餘りピンと來ないかも知れないが、それは要するに前に私が説明したが如き意味のものである。然らばヒトラーは如何にして斯かる認識にまで到達したか？ 彼れはそのウイン以前の時代は

元より、ウインに來てからもその是初は、ユダヤ人に就いて殆んど知るところなく、従つてまた何

妻には餘りピンと來ないかも知れないが、それは要するに前に私が説明したが如き意味のものである。然らばヒトラーは如何にして斯かる認識にまで到達したか？ 彼れはそのウイン以前の時代は

元より、ウインに來てからもその最初は、ユダヤ人に就いて殆んど知るところなく、從つてまた何等の敵意をも有してゐなかつた。寧ろユダヤ人排斥を苦々しくさへ思つてゐた。父の在世中の小学校時代に於いては『この言葉聞いた記憶さへもない』と言ひ、またその後の實業學校時代に於いては『一人のユダヤ少年を友人に持つて居り』、皆用心して交際してゐたが、然しそれは彼れの『無口』の爲であつて、それ以上に別にどうといふことは無かつたと言つてゐる。ウイン——『人口二百萬のうち二十萬近くもユダヤ人の居た』ところの——に來ても、最初は、反ユダヤ新聞のユダヤ人排斥を見て、却つて『大國民の文化的傳統に相應しからぬもの』として、反感さへ感じたと言つてゐる。『中世紀に於ける幾つかの宗教闘争事件を思出させられて不快であつた。私は斯かる事件が再び繰り返されることを見たくなかつた。』と言つてゐる。一言にして言へば彼れは、初めは、ユダヤ人に對して別に好意も有してゐなかつたが、別に反感も有してゐなかつたのである。この彼れが僅か一・二年の間に強烈な反ユダヤ主義者になつたに就いては、勿論、既に述べ又後にも述べる所のマルクス主義の背後にユダヤ人を見出したといふことが、その最大の決定的原因であつた。が、彼れをして其處にまで眼を開かしめたに就いては、更に一聯の事情が有り、次の如き興味ある経緯があつた。

それは、當時『世界的新聞』とまで言はれてゐたウインの自由主義大新聞なるものの不可解なる態度であつた。眞に愛國的なるものは必らず民族的でなければならず、自民族に對して深き愛と誇りを持つたものでなければならぬ。然るにこれらの自由主義大新聞は、事・皇室の問題となると『その最後の驕馬にまで最敬禮を捧げ』ながら、事・民族乃至國民の問題になると稍々もすれば平然としてその反對の態度に出てゐた。平然としてドイツ民族に不利なことを書き、平然として對立國の禮讃をやつてゐた。ヒトラーは最初、反ユダヤ新聞に感心し得なかつた關係から、これらの大新聞を愛讀し、そのユダヤ人に對する寛容な態度に賛成してゐたのであつたが、事・茲に至つて深大な疑ひ及び嫌惡を起させられた。そして皇室・民族・國民の問題になると、却つて反ユダヤ新聞（民族主義新聞）の方が一貫した立派な態度を持つてゐるのを見出した。それから彼等は、當時反ユダヤ運動を展開してゐたカール・リューゲル等のキリスト教社會黨一派の主張にも耳を傾けると共に、ユダヤ人なるものに新たな注意を向けるに至つたのであつた。彼等は這般の事情に就いて次の如く記してゐる。

『私の斯うした意見（反ユダヤ主義は宗教的關係に基づく忌むべき嫉妬の産物であるといふ意見）は、當

時の大新聞の採つてゐた態度に依つて一層強められた。即ち、眞の大新聞は斯くの如き攻撃に對して、私

「私の斯うした意見〔反ユダヤ主義は宗教的關係に基づく忌むべき嫉妬の産物であるといふ意見〕は、當

時の大新聞の探つてゐた態度に依つて一層強められた。即ち、眞の大新聞は斯くの如き攻撃に對して、私の見る所では、限りなく立派な態度を以つて答へるか、或ひはまた——私にはこれが一層尊敬すべきものに思はれたのであつたが——斯かる攻撃をば問題にもせず、寧ろ簡單に黙殺してゐたのであつた。

私はこれらの謂はゆる世界的新聞（「ノイエ・フライエ・ブレッツェ」、「ウインナー・ターゲブラット」、その他等々）をば熱心に讀み、其處に讀者に提供されてゐる知識の廣汎なること、並びにその個々の記述の客觀的なことに感嘆した。……

然るに、私をして屢々不快ならしめたものは、實に、これらの新聞が宮廷に媚び諂ふ下劣な態度であつた。宮廷に見られた出來事にして、歡喜熱狂の極みとか悲痛驚愕の至りとか言つた誇張した調子で、讀者に報じられなかつたものは殆んど無かつたと言つて宜い。殊にそれが歴代中の謂はゆる「最も聰明な君主」〔當時のオーストリア皇帝〕に關する時に於いて甚しく、その騒ぎ振りたるや殆んど山鳥の交尾にも似たものであつた。

私にはさうした事は如何にもわざとらしいものに思はれた。

斯かる事は、私の眼には、自由民主主義の汚辱と思はれた。

宮廷の好意を、而も斯かる低劣な方法で媚び求むるといふ事は、正に國民の品位を賣るものであるのだ。

これこそは私が、ウインの「大新聞」なるものに對して私の心證を悪くせねばならなかつた最初の陰影であつた。』（S. 50—51）

「然し、私がモット憤慨したのは、この同じウィンの大新聞共が、日以宮廷の最後の驕馬にまで最敬禮を捧げ、兎もすれば腰も抜けん許りに尾を振り乍ら、一度ドイツに内紛が起るや、如何にも憂へ顔して、然し實際は私の見た限りその裏に秘められたる甚しき惡意を以つて、ドイツ皇帝に對して彼等の疑心を表明したことであつた。その場合彼等には、ドイツ帝國の事情に干渉しようなど、いふほどの意圖は無かつたかも知れない。否。無かつたであらう。が、その場合この問題に觸れるならば、須らく充分親切なる態度を以つてその傷に觸れ、以つて相互の同盟の精神に課せられたる義務を果すと共に、さうすることに依つて逆にまたジャーナリズムの眞實性をも満足さすべきであつた。然るにその場合、大新聞共はその指をば問題の傷に思ふ存分に觸れ、心行くまでこれを掻き廻したのであつた。

斯かる場合、私は全身の血の逆流するを感えた。

私をして次第に大新聞を用心深く觀察せしめるに至つたのは、斯かる事情であつた。

私は、反ユダヤ新聞の一つたりし「ドイチエ・フォルクスブラット」が、斯かる機會に際しては、却つて立派な態度を採つてゐたことを、確かに認めなければならなかつた。

更に私の欄に障つたことは、當時既にこれらの大新聞の事としてゐた所のフランスに對する嘔吐を催ふすが如き崇拝振りであつた。謂はゆる「偉大な文化國民」に對する斯かる追従の讃歌を聞かされた者は、ドイツ人たるを慥ぢざるを得ない態のものであつた。このフランス心酔を見て、私はその手にせる「世界

的新聞」を投げ出したことは一再に止まらなかつた。そして結局前記の「フォルクスブラット」を採り上

ドイツ人たるを愧ぢざるを得ない態のものであつた。このフランス心酔を見て、私はその手にせる「世界

的新聞」を投げ出したことは一再に止まらなかつた。そして結局前記の「フオルクスブラット」を探り上げたことが度々であつた。この新聞は勿論遙かに貧弱なものであつたが、然し斯かる問題に於いては遙かに純粋なものが有つた。私はその激烈な反ユダヤ論調には賛成し得ないものがあつたが、然しそのあちこちに私の反省を促す論據の有るのを見たのであつた。

兎に角斯様な動機よりして私は、當時ウインの運命を支配してゐた所の人物と運動とを次第に知るに至つた。カール・リューゲル博士とキリスト教社會黨 (die christliche Partei) とがそれであつた。

ウインに來た始めの頃は、私はこの人にも又この運動にも反對であつた。

この人とこの運動とは、私には「反動的」なものに見えたのであつた。

然るに、この人とその活動とを知るの機会を得るにつれて、私の平生の正義感私の右の判斷を變更せずには已まなかつた。そしてその正しき評價は次第に公然の敬服にまで發展して行つた。今日でも私は、以前にも増して、この人の中に凡ゆる時代中の最も勝れたドイツ人の市長を見出すものである。

ところで、斯様にキリスト教社會黨に對する私の態度が變つた爲に、私の抱いて居た諸々の見解もまた如何に變改されたことであつたらうか！

斯くして反ユダヤ主義に對する私の考へもまた變更されたのであつたが、これこそは結局私の最も重大な變化であつたのである。(p. 57-58)

右に出て来る『キリスト教社會黨』といふのは、オーストリアに於いて多年『社會民主黨』と並ぶ最大の黨としてこれと政權を争つて來た黨であつて、『社會黨』と稱するも社會主義黨ではなく、曾つてのドイツに於ける『中央黨』と同じくカソリック教徒から成る資本主義黨であり、後にナチスがドイツに於いて政權に就いた當時は、ドルフス（次いではシュスニツク）を首相として政權に在り、共產黨・社民黨からナチスに至るまでを禁止解散し、結局ナチスに依つて血を以つて倒された黨であるが——リューゲルは夙に死んで亡し——この黨の運動に就いてはヒトラーは尙ほ次章に批判してゐる。茲では、問題はヒトラーは斯くしてユダヤ人といふものに新たなる注意を向けるに至つたこと、ユダヤ人との關係に於いて諸般の問題を再考察するに至つたことである。

ユダヤ人との關係に於いて諸般の問題をば、彼れ一流の根氣と克明さとを以つて、種々の方面から仔細に調査研究を進めるに及んで、彼れは次から次へと驚くべきことを發見して行つた。茲には最早彼れの記述の諄々しい引用は避けるが、文學でも、美術でも、演劇でも、その、淫猥なもの、『際物』的なもの、『愚劣』なものの中八九までは、その作者はユダヤ人であつた。ウインには、賣淫業や、婦女賣買業や、高利貸等の『惡徳業』が多々存在したが、その經營者は殆んど悉くユダヤ人であつた。種々の犯罪の背後には、殆んど必らずと言つても宜い程に、常にユダヤ人が居

た。人口二百萬のうち、ユダヤ人が僅かその十分の一、二十萬を占めるに過ぎない都會に於いて、

ユダヤ人であつた。種々の犯罪の背後には、殆んど必らずと言つても宜い程に、常にユダヤ人が居

た。人口二百萬のうち、ユダヤ人が僅かその十分の一——二十萬を占めるに過ぎない都會に於いて、そんな馬鹿なことがあるかと言ふかも知れぬが、『事實は正にその通り』であつた。『そこで今度は、日頃讀んでゐた前記の「世界的新聞」をも、同様の見地から吟味して見た』。ところが、驚く勿れ、『その編輯者達も實に——ユダヤ人であつた』。而も彼等は、學術物でも藝術物でも、ユダヤ人の手に成れる物をば互ひに『讚美』し、ドイツ人の手に成れる物をば『忌避』してゐた。彼れはこれを知つて『惡寒』を感じたと言つてゐる。

斯くして、マルクス主義の背後にもユダヤ人が見落されよう筈はない。マルクス主義はユダヤ人マルクスの創始せるものであり、ドイツ、オーストリアの同運動幹部の過半は歴代ユダヤ人の占むる所であり、マルクス主義こそは或る意味に於いて最も代表的なユダヤ人の作品であるのだ。ヒトラーは次の如く記してゐる。

『ユダヤ人が社會民主黨の指導者たることを知つた時、私は始めて眼が開いた様な氣がして來た。長い間の胸奥の精神的葛藤は、これに依つて終りを告げたのであつた。』(S. 99)

『私は、私の手の届く限りの有りと凡ゆる社會民主主義のパンフレットを集め、その著者達——ユダヤ人の

名前を調べて見た。私はまたその殆んど凡ゆる指導者の名前を書き取つた。そのいづれの場合も、その壓倒的大多数は「選ばれたる民(ユダヤ民族)」に属する者であつた。議會の代表者であらうと、労働組合の書記であらうと、團體の幹部であらうと、街頭の煽動者であらうと、その場合みな同様であつた。常に同じ不気味な影が浮んで來た。アウステルリッツ、ダヴィッド、アドラー、エレ・ボーゲン、其他等々の名前は、永久に私の記憶に残るであらう。

今や私は或る一つのことから明らかとなつて來た。私が去る數ヶ月來その小さな代表者達と激しく戦はねばならなかつたところの黨は、殆んど獨占的に一の他民族の手に指導されてゐたといふことである。斯くて私は、ユダヤ人は成るほどドイツ人ではなかつたことを茲に決定的に知り、私の衷心からの大なる満足としたのであつた。(S. 65—66)

それから彼れは、大なる決意と確信を以つて、益々マルクス主義をその創始者にまで遡つて研究すると共に、マルクス主義に囚はれてゐた彼れの周圍の同僚労働者達の説得に努めたのであつた。『殆んど何時も勝利は私の側に在つた。たゞ時間と忍耐との大なる犠牲の後でなければならなかつたが、大衆は救ひ得るものであつた。が、ユダヤ人のみは一人としてどうしてもその見解から解放することが出来なかつた。』(S. 66)。

如何に論破し、如何にその時は承服させても、次の日に

はケロリとして持説を主張して已まなかつた。これにはヒトラーも驚いたらしく、『私は呆然として

解放することが出来なかつた。』(p. 66)。如何に論破し、如何にその時は承服させても、次の日に

はケロリとして持説を主張して已まなかつた。これにはヒトラーも驚いたらしく、『私は呆然として立ちつくしたことが幾度であつたか知れない』と言つてゐる。

が、さうした一切は、たゞ彼れをして益々反ユダヤ主義の信念及びこれとの斷乎たる闘争の決意を固めしめただけであつた。マルクス主義及びユダヤ人に對しては、凡ゆる手段を盡して戦ふより外に途なし、それが『最後の救済方法』であるといふ結論に到達したのである。マルクス主義及びユダヤ人問題に對する彼れの認識は、必らずしも博奥なものとは言へないかも知れない。が、少くともそれは深刻なもの、而も同じ惱みを惱んだ者のみがヨク理解し得る稀に見る深刻なものである。彼れは次の如き言を以つてこの問題と共に、彼れのウイン苦難時代叙述を終へてゐる。

『たゞそれから一度——そしてそれが最後であつたが——私はこの上ない苦悶と共に壓し潰される様な憂慮に襲はれた。』

永い人類の歴史の數時代に亘つてユダヤ民族の活動を攻究し考察してゐた時、私には、不意に一つの心配な問題が起き上つて來た。測り知るべからざる運命は、我等憐れなべき人類には知るべからざる理由よりして、既に永劫不變の決定として、この小民族の最後の勝利を望んでゐるのではあるまいか、といふ疑問であつた。

永久にこの地上に寄生するこの民族に、この地上は報酬として約束されて宜いものであらうか？

我等には、我等自身の自己保存の爲の戦ひの客観的權利があるのではなからうか？ それとも、これまた我々だけに正常される主観的な理由に過ぎないのであらうか？

私はマルクス主義の教説に深く思ひを潜め、ユダヤ人の活動を靜かにハツカリと考へて見るに及んで、運命自體が私にその解答を與へて呉れたのであつた。

マルクス主義のユダヤ的教説は、自然の貴族主義的原理 (das aristokratische Prinzip der Natur) (註) を拒否する。そして、力と強さといふ永久的特權に代ふるに、數量及び死せ重量といふものを以て支配せんとする。従つてこの教説は、人間に於いては人格の價値を否定し、民族及び種族の意義を認めず、斯くすることに依つてまたその生存とその文化との前提を奪つて了ふ。この教説は更に宇宙の原則としては、思想的に人間の考へ得る凡ゆる秩序といふものを終局に導くことになる。それ故に、この我々の認識し得る最大の有機體「宇宙」に於いては、斯かる法則の適用の結果はたゞ混沌あり得るのみであると同様に、この地球上に於いてはこの遊星(地球)の住民達に残されるものは、たゞそれ自身の没落あるのみである。

若しユダヤ人が、マルクス主義の信條の助けを借りて、この世界の諸民族を征服するに至つたならば、その時には、彼れの戴く帝冠は人類の死の花環となるであらう。そして地球は再び何百萬年もの昔と同じ状態に還つて、人影もなきたゞエーテルの中を運行するであらう。

永劫の自然はその命令の違犯者に對しては、常に假借なき報復を加へる。それ故に今日私は、全能の創造者の前に立つて、その行動の正しさを問ふ。即ち、私は、ユダヤ人を殺害することゝして、同時に主の

状態に違つて、人影もなきたゞエーテルの中を運行するであらう。

永劫の自然はその命令の違犯者に對しては、常に假借なき報復を加へる。それ故に今日私は、全能の創造者の意に従つて行動するものと信じてゐる。即ち私は、ユダヤ人を防ぎ戦ふことに依つて、同時に主の御業の爲に戦つてゐるのだ。』(59, 70)

（註）『貴族主義』なる語は誤解を生じ易いが、ヒトラーの言ふそれは生物學の見解から來てゐるもので、謂はゞ『優種主義』乃至『優良者主義』とでも言つた意味のものである。この語及び思想に就いては後に漸次殊に種族論の紹介の時に充分明らかになるが、今日の貴族諸君の貴族とは關係のないことを豫め一言注意を願つて置く。

第三章 ウィン時代諸考察

一 政治指導者たる者の心得及び資格

ウィン時代に於けるヒトラーの思想的及び人間的發展に就いては前章に紹介せるが如くである。それは原著第一卷第二章『ウィン苦難修業時代』に記してゐるところであるが、要するに、單なる Nationalist より Nationalsozialist にまで成つたといふこと、社會問題、マルクス主義、ユダヤ人といふものに對して、身を以つて搖ぎなき認識を達成したといふことが、この時代のヒトラーに就いて最も重要な事柄であり、最も注目を要する所である。彼れの後年に於ける活動の内部的基礎は、何よりも先づ、これに依つて作られてゐるのである。

然し、彼れのウィン時代に於ける收穫はこれのみには止まらなかつた。彼れはその他にも幾多の尊い認識乃至經驗を獲たのであつた。勿論それは前記の基本的な發展と密接に關連してゐるものであるが、彼れはこれをば一の補論の形態で章を改めて論じてゐる。原著第一卷第三章『私のウィン

時代よりする一般政治的諸考察 (Allgemeine politische Betrachtungen aus meiner Wiener Zeit) が即

あるが、彼れはこれをば一の補論の形態で章を改めて論じてゐる。原著第一卷第三章『私のウイン

時代よりする一般政治的諸考察(Allgemeine politische Betrachtungen aus meiner Wiener Zeit)が即ちそれであつて、その頁數からすれば、『マインカンフ』前後二卷全二十七章の中でも、前卷第十章『崩壞の原因』、後卷第二章『國家』と共に、最大の章を成すものである。私もまたこれを代數に章を改めて紹介するものであるが、同じくウイン時代に關するものであつても、前章(ウイン修行苦難時代)は彼れのウイン時代自體の直接的な論述を主としたものであるのに對して、本章はウイン時代の經驗を基として諸他の重要と思はれる問題の解明を主としたものであることは注目を要する。我々は、『マインカンフ』は元來一の革命の爲に書かれたものであること、而もどつちも付かずの漠然とした第三者などを對象としてではなく、同じ志向者即ち既知及び未知の同志を對象として書かれたものであることを、記憶に新たにする必要があるのであらう。彼れヒトラーはその著に依つて、單に彼れの國民社會主義の基本思想を明らかにするに止まらず、更に他にも彼れの運動の促進に必要と思はれる事柄をば出來るだけこれを究明し、以つて相携へてその運動を建設するようにしなければならぬのである。このウイン時代補論は即ち多分にさうした意味から成れるものであり、さうした性質を有するものである。

この補論でも彼れは幾多の重要な問題に就いて——例へば議會主義、多數決原理、國家なるもの

等に就いて——語つてゐるが、開章一番先づ『政治家 (der Politiker)』なるもの乃至政治指導者なるものに就いて語つてゐる。而もそれは正に、今日の我國の多くの政治家諸君乃至政治運動者諸君に就いても妥當する所の示唆深きものである。彼れに據れば、特別の天才の場合は別として、普通の人間は生づ三十歳になるまでは表面に出て政治に關與すべきではない。換言すれば、謂はゆる政治家たるべきではなく、政治指導者たるべきではない。何故ならば、人間は多くの場合先づ三十になるまでは思慮も思想も未熟であり、その正しいと思つても誤つてゐる場合が少く無いからである。若しこの誤つて態度せんか、常人自身及びその仲間の打撃も甚ること乍ら、國家社會の迷惑はこれより甚しきはない。而もさういふ人間ほど稍々もすれば何んだかんだと言つて、その誤ちを胡魔化しその地位を保たうとする。その結果は益々人を欺き世を偽り、愈々國家社會を毒することになる。ヒトノ一は次の如く言つてゐる

『私は今日、人間は全く特殊の天才の場合は別として然らざる限りは一般に、三十歳になるまでは正式に政治に關係すべきでないと信じてゐる。それといふのは、大概の人間はこの年頃になつて始めて一般の素養も出来上り、それに依つて種々の政治上の問題も検討し、これに對する彼れ自身の立場も終局的に決定することが出来るやうになるからである。斯かる基礎的な世界觀及び該世界觀に依つて得られる各日常間

題に對する自己の見方の確立を得て始めて、人間は、今や少くとも内部的に成熟したものとなり、國家社

實も出来上り、それに依つて種々の政治上の問題も検討し、これに對する彼れ自身の立場も終局的に決定することが出来るやうになるからである。斯かる基礎的な世界觀及び該世界觀に依つて得られる今日の常識

題に對する自己の見方の確立を得て始めて、人間は、今や少くとも内部的に成熟したものとなり、國家社會の政治的運營に關與すべきであり、また關與し得るのだ。」(S・T)

『三十歳になつた人間と雖も、その一生の間には尙ほ多くを學ばねばならぬ。然しそれは、前に既に原則として會得した世界觀が豫め與へて與れる要領の補足及び充實に過ぎないであらう。彼れの學びは最早何等の原理的な學び變へでもなくして一の學び加へたるであらう。……………』(S・T)

『私は自分でも、これまでには他の多くの人々よりも比較的多く政治に關係して來たと信ずるけれども、然し曾つては如何なる形ちに於いても公然さうした場所に顔を出すことをば警戒したのであつた。たゞ極めて小さな集りに於いて、私は、私の心を動かす或ひは關心を惹いた事情に就いて、語つて居るに過ぎなかつた。……………』(S・T)

『若し人あつて然らざる場合に於いては、彼れは他日重大な問題に於いてその從來の立場を變へねばならないか、或ひはそのヨリ善き知識乃至認識に反して、悟性及び確信が以て拒否してゐる所の見解に無理に留まらねばならぬ危險に逢着するであらう。その第一の場合に於いては、先づ彼れ自身にとつて人間的に甚しい痛手である。何故ならば、彼れ自身が既に動搖してゐるのであるから、當然最早彼れの支持者達が

元と同じ様に搖ぎなく固く彼れを信じ、呉れることを期待し得ない。而も從來彼れに依つて指導されて來た者にとつては、指導者たる彼れの斯かる轉落はまことに途方¹ 暮れた困つた事であると共に、これにて彼等が戰つて來た相手に對して一種の屈辱の感さへも起させられるものであるのだ。その第二の場合に於いてはまた、我々が特に今日厭々見受ける所の次の様な事が生じて來る。指導者が彼れ自らの言ふことを最早信じなければ信じないほど、彼れの主張は空虚なものとなり、淺薄なものとなり、而もそれに代つてその手段の選擇は卑劣なものとなつて來る。彼れ自身最早自らの政治的表明に對して眞面目に責任を負はうと考へてゐないのに——因に人間は自ら信じ得ないものの爲には死に得ないものである——彼れの支持者に對する要求は、その癖、益々大きく且つ厚かましきものとなり、遂には指導者たる最後のものまでも犠牲にしてひたすら「政治家」たるの地位にシガミ付かうとする様になる。即ち、主義も節操も無いことがその唯一の眞の主義であり節操であく種煩の人間になり、厚かましい押し付けと、往々にして恥も外聞も無い嘘八百の手練手管を事とする様になる。

眞面目な人間にとつては災難な話だが、斯ういふ徒眾が更に議會にでも入つて來る時には、人々は最初から次のことを覺悟しなければならぬ。さういふ徒眾にとつては、政治といふものは單に、彼れ自身及び彼れの家族のミルグ瓶をいつまでも離さない爲の・華々しい鬭争に外ならないといふことである。彼れは妻子を養ふ必要が大となればなるほど、議員たることの爲に熱心に戰ふやうになる。と共に他の政治的本能を持つた人間は凡て、單に彼れの個人的な仇敵に過ぎないものとなる。彼れは、新しい運動を見ては

常に、自分の没落が始つたのではないかと疑ひ、墮れた人間を見ては凡て、他日その人間に依つて自分が危うされはしないかといふ危險を感ずる。

本能を持つた人間は凡て、單に彼れの個人的な仇敵に過ぎないものとなる。彼れは、新しい運動を見ては

常に、自分の没落が始つたのではないかと疑ひ、優れた人間を見ては凡て、他日その人間に依つて自分が危うされはしないかといふ危殆を感じずる。

斯かる種類の議會の毒虫共（Parliament-swarzen）に就いては、私は後に尙ほ根本的に語るの機会を有するであらう。（S. 71—72）

斯様にヒトラーは、確乎たる認識及び定見無くして政治指導者たりとの爲にまた主義も節操も持ち合せないが如き徒輩をば、『毒蟲共』とまで呼んでこれを擯斥してゐる。然るに實際にこの世には、斯かる『毒蟲』的指導者が如何に多いことであらうか！我々はその例をば、敢へてヒトラーに従つて舊ドイツや舊オーストリアに見る必要はないであらう。今日、『國內新體制』だの『東亞新秩序』だのと稱して、我國の謂はゆる政治界に踊つてゐる人々の大多數なるものは、曾つて果して如何なる政治理念、如何なる時代思想の奉持者であり、何を爲して來た人々であらうか？彼等は曾つて單なる反動的封建制國家主義の主張者でなければ、滔々たる俗流自由主義の追従者か、然らずんば精々反國家的俗惡マルクス主義の信奉者ではなかつたか？果して彼等は今日、國指導者として良心と信念とを以つて、『國內新體制』・『東亞新秩序』を説き、『臣道實踐』・『職域奉公』を云々し得る人々であらうか？

人々はその從來奉持して來た思想なり認識なりの誤りであることを知つた時乃至知らしめられた時には、一體如何にすべきであらうか？ 單に『時局益々重大に付き』だの『發展の解消』だの名の下に、その從來の過誤及び責任を糊塗し、依然その政治指導者たるの地位乃至役割を續けて宜いものであらうか？ 政治指導者たる者は斯かる場合如何にあるべきであらうか？ これはいづれの國家國民にとつても一の重大問題たるものであるが、ヒトラーはこれに就いてハツキリと次の如く説いてゐる。

『その一般世界觀そのものゝ基礎が誤つてゐたことが分り、その爲にこれを放棄せねばならなくなつた指導者は、その從來の誤れる見解の認識の中に最後の結論を引出し得るに至つた時にのみ、始めて正常の間として態度し得る。而して斯かる場合には該指導者は、少くとも引續いて尙ほも政治的活動に従事することをば禁ぶべきである。何故ならば、彼れは既に一度その根本認識に於いて誤謬を犯してゐるのであるから、再びまたその恐れが有るからである。兎に角、如何なる場合に於いても彼れは、尙ほ廣く同胞の信任を求めたり、その他さうした種類のことを要求したりする權利は斷じて有しない。』

然るに今日、斯かる正しき態度の採られることの如何に少きかは、政治を「やる」ことを以つて自ら使命としてゐる徒輩の一般性徳振りを見たただけでも明らからである。

彼等のうち殆んど一人として眞に政治を任とするに適した者はない。』(p. 11)

命としてゐる徒輩の一般徳振りを見ただけでも明らかである。

彼等のうち殆んど一人として眞に政治を任とするに適した者はない。(ア)

政治指導者たる者はその宰相たると一行政官たると一村會議員たるとを問はず、その從來の認識乃至所爲の誤りなることが明らかになつた時には、須らくその地位乃至關係世界から半永久的に引退すべきである。例へば、今日我國に於いては自由主義は誤れるものなりとして各方面に『清算』が叫ばれてゐるが、若し從來自由主義的政治を追求して來た者にして眞にその誤りなるを認識したならば、彼等は凡てその一切の政治的公職及び活動から退き、再びその表面に現れることを考ふべきではない。何故ならば、彼等はこれまで國家社會を誤つて來た罪は甚大である許りでなく、今後もまた同じ様な誤りを犯す危険があるからである、といふのである。

この議論よりすれば、恐らく今日の我國の爲政者階級の如きも——謂はゆる轉向者は尤より——『殆んど一人として眞にその任に適した者は無い』ことになり、一人としてその任に留まり得ないことになるであらう。多くの人々には斯かる要求は或ひは過酷なものに思はれるかも知れないが、それは、一國政治の健全化の爲には常に缺くべからざるものであり、殊に謂はゆる『世界史的變革期』に於いて絶對に必要なものである。少くとも政治指導者たる者は斯かる自覺・斯かる責任感を

有するものでなければならぬ。蓋し、若しこの反對にして許されんか、該國民の政治の健全化は殆んど永久に望まれないであらう。その根本認識及び方針を誤り途中でその破綻を見ねばならない様な指導者、而も何等責任を解せず、絶えずアツチダコツチだと言つて國民に犠牲のみを強ひる様な指導者は、元來指導者たるの資格なき者であり、斯かる指導者を戴いた國民こそ、禍ひでなければならぬ。その前途には、歴史の立證してゐる所のお定りの『衰亡』が待つてゐるのみなのだ。

二 多民族國家の必然的運命

ヒトラーがオーストリアに於いて痛感せるものとして、そのウイン時代補論の中に、前記の政治指導者問題に次いで論じてゐるものに、次に、多民族國家の問題がある。これは、殆んど單民族國家たる我國自體にとつては直接的には大して重要なものではない。が、滿洲國の問題乃至滿洲國との關係を考へる時、それは測り知られぬ重要性を持つものである。蓋しこの問題は、滿洲國に於いては、晚かれ早かれ何時かは起つて来る乃至表面化して来る問題であるのだ。而も我々は、我が民族生存の確保の爲には、この北西邊境（滿蒙）をば如何なる犠牲を拂つても斷じて而も益々ヨリ大なる規模に於いて守らねばならないのである。今日滿洲國に戰つてゐる我が同胞移住民の姿は、差

し當り、曾つてのオーストリア（東部邊境）のドイツ移住民の姿にも似たものである。

なる規模に於いて守らねばならないのである。今日滿洲國に戦つてゐる我が同胞移住民の姿は、羞

し當り、曾つてのオストマルク（東部邊境）のドイツ移住民の姿にも似たものである。

【註】オストマルク（Ostmark）といふのは元來東方邊境乃至東部邊境の意味で——オストは東、マルクは邊境——舊オーストリアの舊ドイツ寄りの地方一帯、即ち戰後の縮小されたオーストリア及び元チエコ・ズデーテン地方を指す。この地方は、ドイツ民族の専ら居住してゐたドイツ本土地方から見れば、謂はゆる東方邊境たるわけであつて、この地方に向けてドイツ民族は數世紀の昔しから『劍と鐵』とを持つて移住してゐたのである。因に、ナチス政權になつてから周知の如くこの地方はドイツに併合されたのであるが、古稱に則つてオストマルク州と名付けられるに至つたらしい。これは恐らくヒトラーの命名に基くものであらう。

ヒトラーのこの問題に就いての論述は、彼れもまたその一人であつたオストマルク・ドイツ人の遺る瀨なき悲哀と憤懣と而も誇負とに充ちたものである。オストマルク（東部邊境）といふのは要するに、曾つてのドイツ本土地方から見ての東部邊境地方、即ち舊オーストリアの舊ドイツ寄りの地方一帯を意味するのであるが、ドイツ民族はこの地方に向けて數世紀の昔しから、謂はゆる『劍と鐵』とを持つて移住して居たのであり、彼等はドイツ本土にとつては正に『東方の守り』たるものであつた。ドイツが未だ統一に至らず、數多の國家に分裂して居た時に於いて、彼等は曲り乍ら

『舊ドナウ王國（舊オーストリア）に於ける一般政治考察は、その大きさの點に於いて先づ、同時代の歐

ドイツランド——但しプロシアの一部とハンブルグ及び北海岸地方を除いて——に於けるよりも、大きく且つ抱擁的であつた。私が今茲に「オーストリア」といふのは、言ふまでもなく、かの大ハプスブルグ帝國の版圖を意味するものであるが、この大ハプスブルグ帝國の地たるや、單に如何なる點よりするもドイツ人の移民に依つてその國家形成の歴史的動機を與へられたものである許りでなく、またそのドイツ人住民のみが能く幾世紀の久しきに亘つて、この政治的に甚しく無理な形成物にその内部的文化的生命を與へ得るの力を示して來たのであつた。時日が経つば經つほど、この國家の存立及び將來は、益々この國家形成の原子細胞の保持に依存して來てゐた。（マース）

『「オーストリア」と稱されし諸民族合成體が、これにも拘はらず遂に亡びるに至つたとしても、それは毫も舊オーストリア・ドイツ人の政治的能力を否定するものではない。それは、元來一千萬の人間を以つて、種々の民族から成る五千萬の人口の國家を永く維持することが不可能なることの——適當な時に一定の完備した前提にし——與へられない限り——已むを得ざる結果であつたのだ。

オーストリア・ドイツ人はその大きさ以上のことを考へてゐた

彼等は、常に一大ドイツ帝國の中に生存すべく習性付けられて居り、それに伴ふ使命の感（ゲフール）を如何なる場合でも決して失はなかつた。彼等はこの國に於いて、その狭い王上の範圍を超えて更にその彼方に自らの國境を見てゐた所の、唯一の者であつた。然り、運命が結局彼等を其同の祖國から引離さればならな

た時に於いても、彼等は依然として尚ほその大使命の持主たるべく努め、その祖國が付て果てしなき戦ひの中にこの東方に克ち獲、所の物をば、ドイツ民族に失はせまいと努めたのである。而もその場合考慮さるべきことは、その分たれたる力を以て尚ほ能くこれを爲し得たといふことだ。實際、その精良分子の心情と考想とは、一変として其國の母國を考へることを停止したことはなく、それ故にこゝまた祖國ドイツから引離された時に於いても、一部の者しか故國に歸らなかつたのだ。

オーストリア・ドイツ人はその一般視界が既に他に比較して廣大なものであつた。彼等の經濟的關係は往々にして、その複雑多様な全國を殆んど蔽ふてゐた。眞に大きな企業の殆んど凡ては彼等の手に在つた。技術家や官吏の主たる者も、その大部分は彼等の間から出てゐた。更に彼等は外國貿易の領域に於いても、ユナナ人が先に手を付けてゐた特殊のものを除く外は、その擔當者であつた。政治的にも彼等は専ら國家を握り締めてゐた。……將校も常にドイツ人であり、殊に高級官吏に於いてそれが著しかつた。藝術も科學も結局ドイツ人のものであつた。……（Z. 101）

『それにも拘はらず、この帝國を維持せんとせる一切の企圖は無駄であつたのだ。それといふのは、最も重要な前提を缺いてゐたからである。

多民族國家（*Volkerstaat*）又は *Nationalitätenstaat* たるオーストリアに於いては、その中の各民族の連心力を克服するには、次の軌れかの一つの途が有るのみであつた。即ち國家をば中央集權制となし、同

時に内部もその様に組織するか或ひは國家などといふものは一層のこと考へないかである。（Z. 10）

選心力を克服するには、次の孰れかの一つの途が有るのみであつた。即ち國家をば中央集權制となし、同

時に内部もその様に組織するか或ひは國家などといふものは一層のこと考へないかである。』(716)

『オーストリアに於いては、ハンカリーを除く他の各地方には、自己の尊貴に就いての政治的記憶といふものは全然無くなるか、或ひは時の海綿に依つて拭ひ去られて少くとも分らなくなり、ハッキリしなかつて來てゐた。そしてこれに代つて、民族獨立主義の時代に、種々の地方に民族的勢力が擡頭して來たのであつたが、この民族的勢力の克服は、オーストリアの各小民族と人種的に同系或は同一の諸國民族がそれぞれ君主制の凋落の上に民族國家(Nationalstaat)を形成し始めるや、それにつれて益々困難なものとならざるを得なかつた。蓋し、これらの諸國民族は今や、その同系或は同一のオーストリア國內の諸小民族に對して、オーストリア・ドイツ人が尙ほ及ぼし得るよりも、より以上の吸引力を遂に及ぼし得るに至つたからである。

ウインでさへも、これが闘争をば永く續け得なかつた。

ブタペストが大都市に發展するや、ウインに對して先づ第一に露敵となり、今王國を結束せしめるよりも、寧ろその一部を強化することを以つてその任務とするに至つた。間もなく續いてブラーグが必然的にその例に倣ひ、更にレンベルグ、ライバツハ、その他等々も同じ様になつた。これらの付つての州舍町がそれぞれの地方の民族的首都にまで發展すると共に、今や、その態々益々獨立的な文化生活の中心點もまた形成されるに至つた。而してこれに依つて始めてまた、その民族的政治的本能もその精神的基礎とそ

の深化を獲たのであつた。斯くて遂に、何時かは、この各民族の本能力がその共通の利害の力よりも有力となつて、オーストリアの破滅する日が來ねばならなかつたのだ。

「ヤツ」は世が死んでから、この發展は極めて明瞭に現はれて來たのであつた。……………(二六)

『ヨーロッパ一帯に新時代最初の革命の氣運が燃え上るや、ヨーロッパに於いても徐々に漸次その火花が發し始められた。然し、遂にその火が付くや、その火焰は最早社會的團體的或ひは一般政治的原因に依つて煽られるよりも、寧ろ民族本來の衝動に依つてヨリ多く煽られた。

一八四八年の革命は、到る處で階級闘争であつたかも知れぬが、オーストリアに於いては既に一新なる民族闘争の始まりであつた。當時ドイツ人は、この起源を閉却して、或ひは認識しないで、革命の高揚に自らを努めることに依つて、自らの運命を征服したのであつた。彼等は西方的デモクラシーに味方してその精神の喚起に助力したのであつたが、その西方的デモクラシーは彼等から彼等自身の存在の基礎を奪つたのである。

豫め一、共通の國語を設定し確立することなくして議會代表制體が形成されるや、オーストリア王國に於けるドイツ民族優越支配の終焉の基礎が定められたのであつた。而してそれと共に實に、その瞬間よりして、國家そのものが失はれるに至つたのである。それから後に起つて來た所ものは、單に一帝國の歴史的清算に外ならなかつた。(二六)

これを要するにヒトラーに據ればオーストリアは、その世界大戰に乗り上げて公然崩壊する以前

史的清算に外ならなかつた。(『F.T.』20)

それから後に起つて來た所のものは、單に一帝國の歴

これを要するにヒトラーに據ればオーストリアは、その世界大戰に乗り上げて公然崩壊する以前に既に、内部的實質的に崩壊してゐたのである。それといふのは全く同國は元來、ドイツ民族、ハンガリー（マジール）民族、チェコ民族、スラブ民族、其他から成る謂はゆる多民族國家であつたが爲であつた。然らば、多民族國家といふものは常に何處でも崩壊の已むなきものであらうか？ 多民族國家と言つても種々あり、その中心民族が例へばアメリカ合衆國に於けるアングロサクソン民族の如く全人口の過半數即ち四分の三を占めてゐる場合もあり、舊オーストリアに於けるドイツ民族の如く五分の一しか占めてゐない場合もある。前者の如き場合は殆んど問題ではない。後者の如き場合、その中心民族の立場より見て、その崩壊を阻止すべき何等かの政策は有り得ないであらうか？ 若し有つたとしたら、それは如何なるものか？ これは、我々が『北西邊境國』考へる時に切實な問題たるものであるが、これに就いてヒトラーは次の如く言つてゐる。

「若し人々にして眞に、この國家を維持する爲の戦ひを考へ、これを最後まで戦ひ抜かんと欲したならば、一の假借なくして且つ頑強なる中央集權に依つてのみ、その目的を達することが出來た。但しその場合には何よりも先づ第一に、國語の統一を根本的に確立することに依つて、その正真正銘の一體制を強化すべきであり、これが技術的助成方法は行政の手に委ねらるべきであつた。斯くすること無しには、統一國家

なるものは最早實際に存在し得なかつたのだ。同様にまたその場合には、學校及び教育に依つてのみ、一の統一的國家意識が永く養成されることが出来た。これは十年や二十年では出来ることではなく、幾世紀も掛つて始めて期待出来ることであつた。一體、植民土の問題にあつては凡て、一時の熱心よりも、根氣よくやるといふことが重要であるのだ。

その場合にはまた、嚴に統一ある行政並びに政治的指導が行はねばならぬことも、自づから明らかな所である。

何故にこれが行はれなかつたか、或ひはヒット適切に言へば、何故に人々は敢へてこれを爲さなかつたかは、私にとつては無限の教訓に充ちたものであつた。この怠慢の責任者こそは實に、オーストリアを崩壞に導いた責任者であるのだ。

舊オーストリアは他の國家以上にその巨大な指導を必要としてゐた。此處では全く民族國家 (Nationalstaat) の基礎を缺いてゐた。民族國家であれば、指導そのものは餘り行はれなくても、その民族の奥底に尙ほ常に一の保持力を有してゐる。單一民族國家 (Einheitlicher Volksstaat) は、その成員の自然の情性及びそれに伴ふ抵抗力の爲に、屢々驚くべき長期に亘つて最惡極まる統治又は指導にも堪へることが出来、而もその場合内部的に滅亡する様なことがない。最早その體內には何等の生命も無いかの如く見え、死んで了つたかの如く見えて、その死んだと思はれたものが突然また立ち上り、その不滅の生命力を示して、世を驚かせることが屢々有る。

然るに、同一の民族に依つて構成されず、共同の血に依つてよりも、寧ろ共同の榮に依つて保たれる國家である、こゝでは、この關係は異なる。此處に於いては一切の指導の妨礙は、國家を「の冬眠に陥らしめずして、

て、世を驚かせることが屢々有る。

然るに、同一の民族に依つて構成されず、共同の血に依つてよりも、寧ろ共同の拳に依つて保たれる國家に於いては、この關係は異なる。其處に於いては一切の指導の劣弱は、國家を一の冬眠に至らしめずして、勝れた意志の支配時代には發現し得ず、本來血液的に存在する所の各自のそれぞれの本能に對して、一舉にその覺醒の機會を與へることになる。而してこの危險は、たゞ幾百年もの長きに亙る共同の教育・共同の傳統・共同の利害等々に依つてのみ、緩和され得る。それ故に斯かる國家構成は、それが若ければ若いほど、指導の如何に依つて支配されることが大であつて、例へば勝れたる權力者薩及び精神的勇士達の事業でさへも、稍々もすれば、その一人の偉大なる建設者の死後、やがてまた崩壊するが如くである。而もこの危險は、數百年を経た後でも尙ほ克服されたものとは言へず、往々にして單に假睡してゐるに過ぎない。共同の指導が劣弱にして、教育の力、全傳統の卓越も、最早種々の種族固有の生活衝動の飛躍を克服することが出来なくなるや否や、屢々、全く突如として、この危險は目覺めて來るのである。

このことを理解しなかつたことは、ハプスブルグ家の罪であり、悲劇であつたと言ふべきであらう。

彼等のうち唯一人「ヨゼフ二世」だけが、運命の助けに依つて今一度自國の將來に光明あらしむべし、高く炬火を差上げたのであつたが、それもまた永久に消え去つたのであつた。(Z. H. 111-112)

即ち其處には、必らずしもその施すべき方策が無かつたのではない。先づ國語を漸次聲に統一す

ると共に、共同意識を高める様な國家教育を振興すべきであつた。然るに舊オーストリアの爲政者達は、前章に見た如く一般國民生活に全く無理解であつたと同様に、この直長國家の運命に關する問題に於いても殆ど何等爲す所が無かつたのであつた。そしてたゞ日らの盛衰を維持することのみを考へてゐたのであつた。斯くてハプスブルグ國家が前大戰と共に亡びたのは、ヒトラーに據れば、正に自業自得たるものであり、『神の意志』に基づくものであつた。曰く、

『このオーストリアの屋敷を致究することは、恐ろしいことでもあり面白いことでもある。この一の歴史の審判の執行は實に、幾百千とも知れざる無数の形態に於いてそれぞれ行はれたのであつた。大部分の人は、何が何か分らずして、その崩壊諸現象の間に右往左往し廻つたことは、神がオーストリアを否定する意志があつたことを證明するものに外ならなかつた。』(五五)

ハプスブルグ國家は『神聖ローマ帝國』の繼承者として、歐洲中世を風靡せる『セオクラシー』(神の政治)國家の近世にまで残れる典型的なものであつた。其處では皇帝は神命・神權に據つて統治するものであつた。が、その神權を以つてしても遂に、その統治する諸民族の現實の『遠心力』——求心力の作用を克服することが出来なかつたのである。

求心力の作用を克服することが出来なかつたのである。

三 議會主義・民主主義に對する考察

ハプスブルグ國家は上述の如くその當然亡ぶべくして亡びたのであつたが、ヒトラーはこれが考察よりして更に進んで議會乃至議會制度なるものの考察に入つてゐる。蓋しヒトラーに據れば、オーストリア崩壞の最大の責任者はハプスブルグ皇室自體であつて、議會でも議會制度でもなかつた、然し議會乃至議會制度は、其處に於いては、さうでずにバラ／＼の同國家をして益々バラ／＼なものたらしめ、その崩壞に拍車をかけたものであつて、謂はゞ同國家バラ／＼事件の少くとも助手乃至首頭取りの役割而もその筆頭をなしたものであつたのだ。それ故に彼れはこのオーストリア崩壞事件を追究することは『恐ろしいことでもあり面白いことでもある』が、然しその過程自體を詳細に論ずることは彼れの目的に非ずとして、次に議會主義(Parlamentarismus)の問題を採り上げてゐるのである。彼れに據れば、オーストリアの崩壞などよりも、その方が今や重大な問題であるのだ。彼れは前項に引用せる所に續いて先づ次の如く言つてゐる。

「私は、オーストリアの崩壊過程を詳細に論述することは本書の目的ではないので、これ以上茲に立ち入つてこれに就いて論究することをしてない。たゞ、民族乃至國家崩壊の常い變らざる原因として我々の今日の時代でも尚ほ意義を有する所の、而してその考察は結局私の政治の考へ方の基礎の確立に與かつて力あつた所の、若干の事柄に就いて、根本的に考察せんと欲するものである。

オーストリア王國の腐敗を、日頃鋭い眼識などをば更に持ち合せない平凡人にも、極めて明瞭に示すに及んだ諸々の制度の中でも特に、本來ならば大抵先づその堅固を誇つて在るべき筈のものが、その先頭をなしてゐた。それは謂はゆる議會であり、オーストリアの場合で言へば、取りも直さず、ライヒスラート (Reichsrat) であつた (五、六)。

このオーストリアの議會も勿論『西方デモクラシーの國』にイギリスのそれを眞似たものであつたが、ヒトラーに據れば皮肉にもオーストリアの議會はその建物そのものからして同國の分散性・崩壊性を象徴してゐた。

『この制度は明らかに、謂はゆる典型的デモクラシーの國にイギリスを眞似たものであつた。イギリスから、この人々を幸福にするてゐる制度をばそのまゝ受け入れて、これをば出来るだけ變更を加へることなしにウィーンへと据ゑたものであつたのだ。

イギリスの二院制度は、此處では Abgeordneterhaus (衆議院) 及び Herrenhaus (貴族院) としてその再生を祝はれた。たゞ「議堂」そのものが少し違つて居た。曾てイギリスに於いてパトリックが彼れの

にウインハと稱したものであつたのだ。

イギリスの二院制度は、此處では Abgeordneterhaus (衆議院) 及び Herrenhaus (貴族院) としてその再生を祝はれた。たゞ「議堂」そのものが少し違つて居た。曾てイギリスに於いてバリーが彼れの手になる大議事堂をテムス河の満水の中から成現せしめた時には、彼れはイギリス世界帝國の歴史の中に手を延ばし、その中から彼れの輪奐の美を極めた大建築の千二百の壁龕・樑柱・圓柱の裝飾を取つたのであつた。斯くてイギリスの貴族及び人民の兩院なるものは、彫刻及び畫術に於いても、同國民の榮譽の殿堂となつたのであつた。

然るにウインの場合に於いては、先づ第一にこの建築の點に於いて困難に達した。といふのは、デンマルク人ハンゼンが、その新たる國民代表の大理事堂の最後の破風を完成した時、彼れはその裝飾をば古代に借り求めるより外に如何とも致し方がなかつた。斯くてこの「西方デモクラシー」の演舞場は、ローマ及びギリシアの政治家達及び哲學者達を以つて飾られることに言ひ、象徵的に皮肉にも、兩院の屋上には古代ギリシャ・ローマの四頭引馬車が、各々天の四つの方向に向つて別々に進んでゐる姿が飾られるに至つたのであつた。恰かも、當時のオーストリア内部の動向を外に對して最も巧く表現するかの如くにである。

オーストリアの「多民族性」は當時、その議會建築の中にオーストリアの歴史が頌揚されることをば、僥倖乃至挑戰として許さなかつたのである。……………(未完)

ヒトラーはこの議會をばまだ二十歳にならぬ頃始めて見學し、其後また屢々參觀してこれを仔細に觀察したのであつたが、見れば見るほどそれは呆れ果てた馬鹿げたものであつた。それは『選良』の集りどころか、正に『選愚』の集まりたるものであつた。それまでは彼れは議會乃至議會制度に敢へて反對ではなかつた。戒程これに對して一の嫌惡はその前から有して居たが、然しそれは、ドイツ人が其處に多數を占めて居らず従つてまたその結局反ドイツ民族的なるが爲であつて、制度としての議會に反對なわけではなかつた。が、これを仔細に觀察し考察するに及んで、彼れは遂にこれを根本的に否定するの思想に到達したのであつた。これはマルクス主義及びユダヤ人問題に於いても見られた彼れの態度であるが、這般の経緯に就いて彼れは次の如く記してゐる。

『私は未だ二十歳にならぬ頃始めて、フランクフェンリング街の豪華な議會の建物の中へ入り、衆議院の一會議を傍聴したのであつたが、其時私は甚しく反抗的感情に握られた。

私はその前から議會を嫌惡してゐた。然しそれは決して議會制度そのものを嫌つたものではなかつた。それどころか反對に私には、自由に感覺する人間として、他の政治の可能性はどうしても考へられなかつた。といふのは、何等かの一の獨裁の思想は、ハブスブルグ家に對する私の態度に鑑みても、自由に反し且つ一切の理性に反する犯罪の様に思はれたのであつた。

この私の考へには、私が若い人間として日頃新聞を大いに讀んで居た爲に、自分自身では全くそれと氣が付かずに、イギリス議會に對する一種の驚嘆の觀念を植付けられてゐたことが、少くから影響してゐる。

し且つ一切の理性に反する犯罪の様に思はれたのであつた。自由を反

この私の考へには、私が若い人間として日頃新聞を大いに讀んで居た爲に、自分自身では全くそれが氣が付かずに、イギリス議會に對する一種の驚嘆の觀念を植付けられてゐたことが、少なからず影響してゐた。それは私から容易に掛け切れないものであつた。イギリスでは下院でも品位を以つて自己の任務を専心遂行して行くその氣高さは——これをば我がドイツの諸新聞は如何に美しく解釋し讃揚したことであつたか！——私には強く畏敬の念を起さしめた。蓋し、これ以上に立派な一國民自治の形式は、果して他に有り得たであらうか？

然し、正にそれ故にまた私は、オーストリア議會の敵であつた。その全登場の姿が私には、その偉大なる御手本の面汚しに思はれた。それ更に今や、實に次の様なことがあつた。

オーストリア國家に於けるドイツ人の運命は、議會に於けるその地位に依つて決定された。普通無記名選舉法が施行されるまでは、ドイツ人が尙ほ議會に一の多數——大したものではなかつたが——を制してゐた。尤もこの狀態も既に疑はしいものであつた。何故ならば、社會民主黨の國民的に信用するからざる態度の爲に、ドイツ人に關する種々の重要な問題に於いて、前記の多數も往々にして——各異民族内の彼等の支持者を離反せしめまいとして——ドイツ人の必要に反して態度してゐたからである。社會民主黨は當時既にドイツ人の黨として考へることが出来なかつた。然るにそこへ持つて來て普通選舉法が施かれるや、ドイツ人の優越は純數學的にも暴露したのであつた。今や、國家が益々非ドイツ化して行くことに何等の妨げも無かつた。

この理由の爲に私は、民族的自己保存の本能よりして、當時既に國民代表制なるものを大體好まかつた。其處ではドイツ民族は常に代表されずして、裏切られたのであつた。然しこの缺陷は、他の多くのそれと同様に、その罪をば國民代表制といふ事柄そのものにはなく、オーストリアといふ國家自體に歸せらるべき所の缺陷であつた。私は早くから更に尙ほ次の如く信じてゐた。苟くも舊國家の存続する限り、ドイツ人が再び代表體〔議會〕に多數を制して、この缺陷に對して根本的な態度を採るの機會は最早存在しないであらう、と。

斯様に内部的に既に考へが定まりつつ、私は始めて、かの神聖であると共に汚辱せられたる問題の場所に入つて見たのであつた。それは私にとつては全く、たゞ單にその壯大なる建物の豪華なる美しさに依つて神聖なものであるに過ぎなかつた。それは正に、ドイツの土地に於ける一のギリントの驚くべき作品であつた。

然し私は、私の眼下に今や展開されたる問題の悲しむべき光景を眞實に見た時には、暫らくは如何に昂奮せしめられたことであつたらうか！

其處には丁度、二・三百人の代議士達が出席して、或る經濟的に重要な意義を持つた問題に就いて、特にその態度を決定せんとしてゐた。

私は、この最初の日で以つて既に、それから數週間すつかり考へ込ませられるに充分であつた。其處に行はれた提言の思想的內容たるものは、そのオシナベリから人々の知り得た限り、全くウンザリ

させられる「程度」のものであつた。二・三の代議士諸公の如きは實に、ドイツ語ではなく、彼等自身のスラヴ語で、或ひはモット正確に言へば方言で話してゐた。私はそれまで單に新聞で讀んで知つてゐたに

其處に行はれた提言の思想的內容たるものは、そのオシャベリから人々の知り得た限り、全くウンザリ

させられる「程度」のものであつた。二・三の代議士諸公の如きは實に、ドイツ語ではなく、彼等自身のスラヴ語で、或ひはモット正確に言へば方言で話してゐた。私はそれまで單に新聞で讀んで知つてゐたに過ぎなかつた所のものを、今や私自身の耳で聴くの機會を得たのであつた。身振り手振りし、凡ゆる亂調子で互ひに喚めき立て、荒々しく立ち廻る一つの人間の塊り——その間にあつて一人の無邪氣な年とつたオヂさんが、全身に汗し乍ら、性急に鐘を振り廻し、大眞面目で或ひは宥め或ひは戒めて、議會の餘餘を取戻すべく躍起となつてゐた。

私は喉はざるを得なかつた。

それから二・三週間の後、私は再び議會に行つて見た。様子は見違へるほど前とは變つてゐた。議場はガラ明きであつた。數人の代議士は自分の坐席に居て、互ひに欠伸を交はしてゐた。一人の議員は「演説」してゐた。議長席には副議長一人だけ出席してゐたが、他所目にも分るほど明らかに退屈してボンヤリと議場に眺め入つてゐた。

私の頭には疑念が起り始めた。そこで私は其後も時間の許す限り幾度となく議會に駆け付けて、その時々々の光景を靜かに凝つと觀察し、理解し得る限りの演説に耳を傾け、この悲しき國家の諸民族の間から選ばれたる人々の多かれ少かれ知的なる相貌を研究した。斯くして次第に私自身の考へを纏めて行つた。

斯うして約一年間、靜かに觀察しただけで既に私は、この制度の本質に關する私の以前の理解を幾りなく變更し、又はこれを除去することが出來た。私の内心は最早、オーストリアに於いて見られた議會思想

の出来損ひなどに對して、今更反對の態度を取る氣にはなれなかつた。古、今は最早私は、議會そのものを承認することが出来なかつた。それまでは私は、オーストリア議會の不幸をば、ドイツ人が其處に多數を占めてゐないことに認めてゐたのであつたが、今やその災殃をば斯くの如き制度一般の全方法及び組織の中に認めたのであつた。

當時私の頭の中には次ぎ／＼に多數の疑問が持ち上つて來た。

私は先づこの全制度の基礎たる民主主義の多數決原理なるものを検討し始めた。と共にまた、諸民族の選良としてその目的に役立つべき所の代議士諸公なる者の精神的及び道德的價値にも、同様の少くからざる注意を注いだ。

斯くて私は、この制度とその経営者とを共に知るに至つた。

それから二・三年經過する間に、私の認識と洞察との中には、この新時代に於ける最も權威ある存在形態なるもの、議會人なるものの性質が、まぎ／＼と明らかになつて來た。而してそれは、最早何等の根本的變更をも蒙ることなきまでに明確なる形ちに於いて、私の腦裡に刻み込まれたのであつた。

この度もまた私は、現實の實際に依る實地教育のお蔭で、一見極めて多くの人々に魅惑的に思はれてゐる所の・然しそれにも拘はらず實際は正に人類の墮落現象に數へらるべき所の・一の理論の中に墜死することから免れたのであつた』(p. 81-82)

四 神權國家主義は民主主義より惡し

四 神權國家主義は民主主義より惡し

斯様にヒトラーに據れば、謂はゆる議會及び議會人なるものは嗤ふべきものであり、新時代の最も尊敬すべき存在どころか、その最も輕蔑すべき存在たるものであり、これに依つて國政を處理決定して行くといふ謂はゆる議會主義 (Parliamentarismus) なるものは、低きより高きに向つて進む人類の何等の進歩現象でもなくして、正にその反對現象——墮落現象たるものである。而も、ドイツ、オーストリアに於いて然るのみではなく、人類一般に於いて然るものとあつて、従つて人類が眞にその進歩發展を望むならば、その何處に於いても否定されねばならぬものである。

これは、謂はゆる議會主義の國にとつては、正に穩やかならぬ思想でなければならぬ。何故に如何なる理由に據つて、ヒトラーは斯く言ふのであらうか？ 今日、凡そ『議員』とか『選良』とか稱される連中の下らなき加減、低劣さの程は、敢へてヒトラーの力説に聞くまでもない所である。我々はヒトラーから、彼等議會人なる者の議會に於いて手振り身振して互ひに喚めき立てたり居眠りしたりする馬鹿々々しさ加減は聞いたが、未だ議會主義の否定さるべき根本的な何物も聞いてゐない。次に我々はこれを彼れに聞かねばならない。

が、ヒトラーはその理由の陳述に入るに先つて、その場合當然問題となつて来る所の或る重要な事に就いて特に言及して居り、我々もまた茲にこれを逸することは出来ない。それは議會主義・民主主義は排さるべきであるが、然し——彼れに據れば——徒らに王朝神權を振り廻して專制を事とするが如き貴族・官僚・軍閥の國家專制主義、換言すれば議會主義・民主主義以前の非國民的俗流反動國家主義は、ヨリ以上に排さるべきであるといふことである。これは、彼れに一貫せる重要な思想たるものであり、既に彼れの思想的生ひ立ちを根本的に見て來た我々には何等異とするに足らぬものであるが、不思議に從來我國に於いてはこの點は餘りハツキリゝれて居ない様であり、その爲に飛んでもないナチス模倣の悲喜劇を見てゐるかの如くである。ヒトラーのこれに就いての考へ方は、更に後の論述に於いて明らかとなつて来るが、彼れは議會主義の問題に關連して次の如く言つてゐる。

『今日の西歐の民主主義は、マルクス主義の前輩者である。民主主義無しには、マルクス主義の今日の存在は全く考へられなかつたであらう。實に民主主義こそはこの世界的ベストに對して先づ第一にその培養基を與へたものであり、その温床に育てられてこの傳染病は蔓延することが出來たのである。この民主主義はその外部的表現形態たる議會制度に於いて、更に一の「廠と火から成る出來損ひ」を産み出した。然

るにこの出來損ひに於いては、惜しむらくは、「火」だけが一瞬にして既に燃え盡して了つた様に私には思はれる。

義はその外部的表現形態たる議會制度に於いて、更に一の「塵と火から成る出来損ひ」を産み出した。然

るにこの出来損ひに於いては、惜しむらくは「火」だけが一瞬にして既に燃え盡して了つた様に私には思はれる。

私は、運命がこの問題をも矢張りウインに於いて試験として私に課して呉れたことに對して、運命に感謝以上のものを感じて已まないものである。何故ならば私は、若しそれがドイツに於いてであつたら、餘りにも輕卒にこれに回答を與へてゐたであらうことを恐れるからである。若し假りに「議會」と名付けられるこの制度の馬鹿々々しさをベルリンに於いて始めて知つてゐたならば、私は或ひは餘に考へもせず、その反對へと走り、一旦如何にも尤もらしき理由を以つて、國民及び國家の幸福は専らカイザー思想の高揚に在りとなし、徒らに時代と民衆とに背反して、盲目的にこれに對立する側へと立つてゐたかも知れないからである。

然るにオーストリアに於いては斯かることは不可能であつた。

其處では、左様に簡單に一つの過誤から更に他の過誤へと陥ることは出来なかつた。其處に於いては議會も無益であつたが、ハプスブルグ人士はヨリ一層遙かに無益であつた。如何なる點からしても議會よりも有益ではなかつた。其處では「議會主義」を拒否しても、それだけで済むのではなかつた。といふのは、然らば次に來たる者は何かといふ問題が、其處には尙ほ絶えず残つて居たからである。議會を否認し排除する時、其處には唯一の統治權力として唯だハプスブルグ家だけが残されるであらうといふことは、私にとつては特に考へるだに我慢ならぬところであつた。

斯うして特殊なる事情の困難が、私をして、さもなければあの若い年をして恐らく、たであらうと思はれるよりも、より根本的にこの問題自身を考察せしめたのであつた。(五五)

五 議會主義は何故に排さるべきか (一)

然らば、ヒールラーに據れば、パーシメンタリスムス(議會主義乃至議會制度)は何故に排さるべきであるか?

これに對してはヒールラーは、半ば主張的説明的に、半ば自問自答的に、可なり立ち入つて論じてゐる。これは彼れが深く思ひ詰めた時にする一のクセであるが、問題は民主主義及び多數決の問題にまで不可分に關連してゐる爲に、その論述は必然的に可なり複雑したものとなつて居り、端的にその要旨を把握し難きものとなつてゐる。因つて茲には、理解の便宜上、その要點と思はれる所のものを個條書的に摘記紹介する。

第一に、議會主義の政治なるものは、甚しく無責任なものである。

議會主義とは要するに議會に依つて、或ひは少くともその意志に依つて、政治せんとする政治原理乃至政治組織の謂ひに外ならないものであるが、其處に於いては如何なる誤まりを犯しても、何

人もこれに對して眞に責任を負ふといふことがない。政府でも議員でも、その誤れる時は、精々辭

理乃至政治組織の調ひに外ならないものであるが、其處に於いては如何なる誤まりを犯しても、何

人もこれに對して眞に責任を負ふといふことがない。政府でも議員でも、その誤れる時は、精々辭職すればそれで済む。が、左様なことで眞に責任を負へるものと言へるものではない。

『私をして何よりも先づ第一に且つ最も多く考へさせたものは、其處に於いては、如何なる個人にも何等の責任も明らかに存在しないといふことであつた。』

議會は或る何かを議決する。その結果は或ひは甚しく世を害するものであるかも知れない。而も何人もこれに對して責任を負はない。また何人もその責任を問はれない。蓋し、無類の破綻を生じてから、その罪ある政府が辭職したからといつて、それで果して責任を負ふたものと言へるであらうか？ 或ひは内閣の聯立構成が變つたからといつて、或ひは議會までも解散されたからといつて、それで果して責任を負へるものと言へるであらうか？ (p. 81-82)

眞の責任なるものは、何事にもあれ、その生命を以つて負はるべきものであり、殊に一國民の運命を直接又配する政治に於いて然りでなければならぬ。その時に於いて始めて正しき政治、善き政治も期待され得る。然るに議會主義政治の下に於いては、そも／＼その責任の所在からして不明である。蓋し議會主義なるものは、人民の多數の爲に人民の多數に依つて政治するといふ民主主義の

具體的表はれたるものであり、決て以つてその構成原理とするものであるが、その多數なるものは、元來その意識もハッキリせず、誤られ易いものである許りでなく、變換常なくしてその本體もハッキリせず、掴みどころの無いものである。斯かる存在に現實の政治の責任を求むるといふことは、事實不可能であると共に、また最初から無理なことではなければならぬ。然るに議會主義はこの多數に最後の責任を置くことに依つて、その指導者自らの責任をば曖昧にしてゐる許りでなく、巧みにこれを悪用してゐるのである。ヒトラーは前記の無責任の指摘から出發して、これらの問題をば先づ自問の形で次の如く進めてゐる。

「一體、變換常無き多數者なるものに、果して責任を負はせることが出来るものであらうか？
そもく一切の責任の觀念なるものは常に、個人といふものに結び付いてゐるものではないのか？

然るに、全く或る一の多數者の意志及び性向に基づいて發生し遂行された所の行爲に對して、或る政府

の代表的個人をして責任を負はせるといふことは、實際に出来るものであらうか？
それとも、指導的政治家の任務するものは、創造的な思想乃至計畫そのものを自ら作り出すことに在ら

ずして、單にその考へられたる計畫の優秀性を頭の空つぽな愚案に得心せしめ、以つてその好意ある賛同を獲得する手腕に在るのであらうか？

政治家たるの標準は單に、機敏に優れたる方針及び決定を握む手腕と共に、同様に優れたる勸説の手腕を有することにあるのであらうか？

を獲得する手腕に在るのであらうか？

政治家たるの標準は單に、機敏に優れたる方針及び決定を握む手腕と共に、同様に優れたる勸説の手腕を有することに在るのであらうか？

若し指導者たる者が、多かれ少かれ單なる偶然に依つて寄せ集められたる群衆の多數を、一定の理念の下に獲得することが出来なかつた場合には、彼れはそれに依つてその指導者たるの資格無きことを立證されるであらうか？

體この多數なるものは、實際に結果に依つてその偉大さを示される以前に、そのイデーを理解するといふことが、曾つて果して一度でも有り得たであらうか？

この世に於ける天才的行動と言はるべきものは凡て、大衆の愚昧に對する天才の明瞭なる抗議ではないのか？

政治家が己れの計畫に對して大衆の愛顧を買ふことが出来なかつた場合には、彼れはそも／＼如何にすべきであらうか？

彼れはこれをば金鎧を以つて買収すべきであらうか？

それとも、同胞の愚昧に當面して、その生死の重要事と認めた任務の遂行を斷念し、それから身を引くべきであらうか？ 或いは飽くまで頭張るべきであらうか？

斯かる場合には眞の人格者は、認識と立場或ひはハリ正確に言へばその誠直なる志操との解くべからざる矛盾に陥りはしないか？

この場合、一般に對する義務と個人的名譽の義務とを區別する所の限界は、何處に存するであらうか？
眞の指導者は、斯くの如くして單なる政治屋に墮することをば、これを拒否せざるを得ないのであ
らうか？

反對に一切の政治屋達は、最後の責任は彼等が負はずして或る一の個へ難き多衆が負ふものであるが爲に、政治の中に「商賣」することによつて、必然的にその天職を失はるに至るのではなからうかと

今日の護国主義は多數決原理（Majority Principle）なるものは、一般に指導者思想を破壊するの結果に到らざるを得ない。よからうかと

實際、この世界の進歩といふものは多数者の脳髓から生ずるもので、個人（頭腦から生ずるもの）とはいふと、人々は時に信じてゐるのぢやあらうか？

ふれとも人々よ、この人類文化の前提を、將來は無くとも、恐く濟まり得るものとでも、おいてみるのでよいかな？

勢力反對にこの問題のものは、今日こそ、從來の如何なる時よりも必要である。と云へられないのであらうか？』(二六五頁)

右の一連の設問の中に既にヒトラーの議會主義に對する根本思想は示されてゐるものであるが、彼れは斯く設問した後、これに答ふるかの形式で、更に議會主義の排さるべき所以を説き續けてゐる。

る。即ち彼れに據れば次に先づ、

彼れは斯く設問した後、これに答ふるかの形式で、更に議會主義の排ふるべき所以を説き續けてゐる。

る。即ち彼れに據れば次に先づ、

第二に、議會主義は人類進歩の前提たる指導者思想 (Führerethanken) に反するものであり、これを破壊するものである。

第三に、議會主義は眞に指導者たるべき人材を排除し、必然的に愚劣且つ下劣の徒の政治を招來するものである。

この二つのものは不可分に關連してゐるものであり、一つのものの裏と表とも言ひ得るものであるが、次に紹介する論述は前の設問と相俟つて要するに右の二つのことを強調せるものである。

『多數決といふ議會主義の原理は、個人 (Person) の權威を否定し、これに代ふるに其時々の多數の數といふものを以つてすることに依つて、自然の貴族主義的根本思想 (der aristokratische Grundeanken der Nation) に背くものである。但しこの場合にいふ自然の貴族主義的見解なるものは、今日の我國の腐敗墮落せる無數の上層者流の如きとは勿論何等の關係も無きものであり、斷じて斯かるものに體現されるを必要としないものである。』

この近世民主主義議會政治の制度か如何に世を毒してゐるかは、ユダヤ的諸新聞の讀者の如きには、彼等がその自主的に思想し檢討することを知つてゐない限り、勿論容易に理解され得ない。それは、先づ第

一に、今日見るが如き諸々の低劣極まる現象を全政治生活に殆んど信ずべからざる程にまで氾濫せしめてゐる所の主原因を成してゐるものである。これが爲に眞の指導者は政治活動から益々身を引く様になり、政治活動の大部分といふものは多々益々眞に世の爲になる創造的の行爲や仕事を目的とせずして、寧ろ單に多數の人々の歡心を買ひ求めるを以てその主要事とするに至る。而して、その様になればなるほどまたその活動は下等な人間共に相應しいものとなり、従つてまた下等な人間共を吸引して行く様になるのである。

斯かる革商人共「下等な奴等」は、現在その精神に於いて能力に於いて貧弱なればなるほど、また自分で考へて見て自分の實際の存在の貧弱さを明らかに意識するに至れば至るほど、巨人の力や天才を必要とすることの無い様な、寧ろ村長の小ざかしさを適當とする様な、換言すれば實にベリクレスの智慧よりもある種類の小智を具しとする様な制度を、多々益々讚美する様になる。……………議會の多數に支配されることの多くなればなるほど、彼等政治家は必然的に益々小さなものとなつて行く。蓋し、眞に優れた人間は斯かる愚劣な無能者共や饒舌家共の仲間入りすることを拒否するであらうと共に、逆に多數者即ち家

愚の代表者共も、傑出する頭腦者をば何よりも痛切に忌み嫌ふからである。

斯かるシルダー昔の小説に出て来る愚人共の都の市會議員共の會議にとつては、その出席者達と同じ水準の指導者を頭に戴くといふことが、常に一つの慰さめである。それに依つて彼等は皆、その間に時々自分の精神を悶めさせることが出来るといふ喜びを持つのだ。蓋し——何よりも先づ——ヒンツエー猫。

が市長たり得るならば、ベーター「杓子」も市長たり得ない理由は何處に有らうか？

民主主義のこの趣向こそは實に、最近迄、全く一つの現象に過ぎなかつて來てゐる所の一つの事

自分の精神を悶めさせることが出来るといふ喜びを持つのだ。蓋し——何よりも先づ——ヒンツェ（猫）

が市長たり得るならば、ベーター（杓子）も市長たり得ない理由は何處に有らうか？

民主主義のこの趣向こそは實に、最近に於いて全く一の恥辱にまで甚しくなつて來てゐる所の一の特質、即ち我國「指導者階級」なるものの大部分の卑怯性とビツタリ合致してゐるものである。多少でも意義ある凡ゆる實際の決定に於いて、謂はゆる多數なるものの上衣の裾に身を匿すことが出来るとは、何んたに幸ひであらうか！

人々は一度でも次の如き一の政治的追剥ぎを考へて見れば宜い。常にその成功を氣遣ひ乍ら、多數の賛成を乞ひ求め、以つて必要なる仲間を確保すると共に、同時に何時でもその責任を回避し得るやうにする所の、左様な追剥ぎをだ。然るにこれこそは實に、心正しき従つてまた氣骨ある人間をして斯かる種類の政治活動から離反せしめ、これを嫌惡せしめてゐる所の主原因であると共に、反對に凡ゆる人間共をして——因に、自らの行爲に對して個人的に責任を負はうとせず、却つてその掩護を求めるが如き者は、卑怯な無賴漢に外ならぬものである——これに惹き付けてゐる所の主原因なのである。一國民の指導者が一度が斯かるあさましき徒輩から成らんか、然る時には忽ちにして惡しき報ひが來たるであらう。人々はその時には最早、奮然勇を鼓して斷乎たる行動に出づる様なことは無くなるであらう。彼等は、或る一の決心に潛ひ立つよりも、寧ろ極惡の屈辱をも敢て辭しない様になるであらう。其處には最早何人も、何物をも顧みずに斷乎たる決斷の遂行の爲に、自ら進んで身も心も捧ぐべき用意ある者は無くなるであらう。

蓋し人々は次のことを決して忘れてはならない。多數といふものは、この場合にも決して人間を新に

し得るものではないといふことである。多數なるものは常に、愚昧といふものの代表者たるに過ぎないのみならず、また卑怯といふものの代表者たるものである。百の愚人を集めても一人の賢者を造ることが出来ないと同様に、百人の卑怯者が集つても、其處からは一つの英雄的決斷も生れて来るものではないのだ。』

『斯うした結果は凡て、斯かる國家體制の極めて重要な地位及び職務の上に、起すべき急速な變動を招来するの結果を來たす。而して斯様な結果は、その如何なる場合に於いても好ましからざるものであるが、往々にしてそれは直ちに破局的な影響を及ぼす場合さへある。蓋し、その場合よりした習風の犠牲となるものは、常に愚者や無能者のみではない。若し眞の指導者たるべき者が、なま／＼運命の幸ひに依つて將にその指導者たるの地位に就かんとしてゐた場合には、ヨリ以上に彼れが犠牲に供せられることになる。一度び人々が彼れの指導者たらんとしてゐることを知らんか、直ちに其處に一の團結せる防備戰線を形成するに至る。殊にその指導者たるべき人物が、自分達の系統に出づるものではなくして、而も敢て斯かる指導者たるの高位地位に押し登らんとする時に於いて、然りである。彼等は原則として凡て彼等自身を標準の下に在らんことを欲する。そして、ゼロの間から何か一つの纏つたものを生ぜしめ得る様な人物をば、共同の敵としてこれを嫌惡する。彼等は斯かる方面に掛けてはその本能が頗る鋭敏であつて、他の凡ゆる點に於いて何等その探る所が無ければ無いほど、その甚しいものがある。』

斯くてその結果は、指導者階級の自ら益々増大する精神的貧困化を見るに至る。而してその場合、國民及び國家に對して如何なる影響を及ぼすかは、彼れ自身斯かる「指導者」に屬して告げざる限り、何人

ゆる點に於いて何等その採る所が無ければ無いほど、その甚しいものがある。

斯くてその結果は、指導者階級の自ら益々増大する精神的貧困化を見るに至る。而してその場合、國民及び國家に對して如何なる影響を及ぼすかは、彼れ自身斯かる「指導者」に屬して居らざる限り、何人でも自ら推察し得るであらう。」(Z. 301-311)

然らば、ヒトラーが右に於いて一の不可侵の大前提としてゐる所の『指導者思想』、『自然の貴族主義的根本思想』とは、一體如何なるものか？ 我が讀者諸氏は直ちにこれを問題とされるであらう。然り、此處にこそ問題が存するのである。が、私は今や此處にこれを立ち入つて紹介して居るべき餘裕も自由も有しない。それは後にヒトラー自身の親しく語る所のものであるが、理解の便宜上敢へて豫めこれを簡単に紹介するならば、大體次の如きものである。

『指導者思想』とは、これを一の規範として見る時には『指導者原理(Führerprinzip)』と稱されるものであつて、要するに、この世は何事にも限らず優れたる者が上に立ち、全權能と全責任とを以つて、それぞれ指導遂行して行くべきものとする思想の謂ひである。即ち一々多數決などに依つてではなく、指導者の權能と責任に於いて遂行して行くのである。但し茲に注意されねばならぬことは、下位の各分野の指導者は上位の最高指導者に依つて任命されるが、その上位の最高指導者(ドイツの場合で言へばヒトラー)は國民全體に依つて選舉されるといふことである。これ即ち彼等が、こ

の思想乃至原理を以つて、後に同じく本章の中に見るであらう如く、一名『ゲルマン・デセクラシ』と稱してゐる所以であつて、今日我國の官僚界その他の『ドイツ歸り』乃至『ドイツ通』の諸君に依つて移入され強調されてゐる『指導者原理』とは似て而して甚しく——實に根本に於いて——異なるものである。次に、『自然の貴族主義的根本思想』乃至『自然の貴族主義的見解』とは、前章に於ける『マルクス主義背後の存在としてのユダヤ人』の項にも見たる如く、『自然の貴族主義的原理』(das aristokratische Prinzip der Natur)とも稱され、要するに、この世の窮極の支配者たる自然は、謂はゆる自然界に於いても人間界に於いても、優強なる者乃至優良なる者の生存を望んで居り、結局斯かる者をして最後の生存勝利者たらしむる意志のものとするものである。このヒトラーの言ふ『自然』なるものは、これまで我々の見て來た所にも窺はれるが如く、結局『神』乃至『天』と同じものであるが、『天』乃至『神』には謂はゆる『口無し』で、これを如何に解するかは結局人々の謂はゆる『ヴェルトアンシヤウング』(人世觀又は世界觀)の相違と言はざるを得ない。が、いづれにしてもそれは、今日の謂はゆる『貴族』なるものと關係なきことは、ヒトラー自身の言つてゐるが如くであつて、この『自然の貴族主義思想』『貴族主義原理』よりすれば、今日の『貴族』の如きは寧ろ當然否定されることになるものである。事實ヒトラー一黨は甚しく反ユンケル的であ

つて、ユンケル(ドイツ貴族)最後の據城たりし軍部からまでその勢力を一掃したのは、自然の貴族主義と人爲の貴族主義、國民的貴族主義(ナチス)と階級的貴族主義(ユンケル)とが、遂に相容れな

の如きは寧ろ當然否定されることになるものである。事實ヒトラー一黨は甚しく反ユンケル的であ

つて、ユンケル(ドイツ貴族)最後の據城たりし軍部からまでその勢力を一掃したのは、自然の貴族主義と人爲の貴族主義、國民的貴族主義(ナチス)と階級的貴族主義(ユンケル)とが、遂に相容れなかつた證左たるであらう。

ヒトラーの言ふ『指導者思想』『自然の貴族主義思想』とは以上の如きものである。ヒトラーに據ればこれは、人類進歩の大前提たるものであり、自然の意志Ⅱ天の意志Ⅱ神の意志であるのである。然るに議會主義はこれに反し、謂はゆる『味噌も糞も一緒』にせる多數決主義を以つて萬事を決し、眞に傑出せる人物の擡頭を不可能ならしめ、人類の進歩を阻害するが故に、議會主義は排されなければならないといふのである。

愚劣なる支配の下には愚劣なる徒輩が蟄集する。眞に優れたる者、眞に正しき者は、斯かる時代には容れられない。これは議會主義の下に限つたことではなく、ヒトラーに據れば、神權國家主義政治に於いて殊に然りであるが、議會主義に於いてまた然りといふのである。

六 議會主義は何故に排さるべきか (2)

ヒトラーに據れば、議會政治なるものはその根本に於いて甚しく無責任なものであり、反進歩的

なものであり、愚劣なものであることは、以上の如くである。が、議會主義の缺陷はこれに止まるものではなく、更に次の如き致命的な缺陷を有するものである。即ち、

第四に、議會主義の下に於いては、肝腎の『輿論』なるものは殆んど常に偽造されるものである。議會主義政治は『輿論』の政治とされてゐることは周知の如くであるが、然らば、『輿論』なるものは如何にして作られるか？

『輿論』とは一般國民の意見といふ意味に外ならぬものであるが、ヒトラーに據れば、一般國民なるものはその與へられたる時局乃至問題に對して、それ自身深い考察や一定の識見などを有するものではない。彼等は假りにさうした能力ありとしても、さうした餘裕ある境遇には置かれてゐない。その結果は、殆んど常に、『輿論』の大部分なるものは新聞を初めとする輿論製造機關によつて製造される。大衆は『輿論』を作らずして、これらの機關に依つて『輿論』を注入される。然るに、これらの輿論製造機關なるものは如何なる者に依つて構成されてゐるかといふに、大抵、議會の『オヂさん達』に勝るとも劣らぬ愚劣の徒に依つて構成されて居り、而も多くの場合金融資本の手に在る。斯くて議會主義の下に於いては、『輿論』の大部分なるものは結局常にこれらの機關の背後者に依つて偽造されることになるのである。それは丁度活動俳優の『スター』などといふ者が、會社の重役や監督の意向に依つて一夜にして作り出されるのと同じものである。代議士と稱される者そのものが既に、多くの場合、斯くして製造されるものである。ヒトラーはこの問題に就いて次の如く言つてゐる。

の「スター」などいふ者が、會社の重役や監督の意向に依つて一夜にして作り出されるのと同じ

ものである。代議士と稱される者そのものが既に、多くの場合、斯くして製造されるものであるのだ。ヒトラーはこの問題に就いて次の如く言つてゐる。

『以上にも劣らず私の關心を惹いたものは、彼等國民代表なる諸君の現に有する能力及び知識と、彼等の體格といふ使命との對照であつた。……………」

この場合我々は、彼等國民代表諸君の選舉たるものが如何に行はれ、彼等がそも／＼如何にしてその地位やその新たな權威に就くかといふことをば、尙ほ中間に附して置いて宜い。また、彼等が果して一般の希望を實現するか、それとも一部の必要を實現するかといふことも、この場合大して問題とするに當らない。このことは、大衆の政治的理解なるものが尙ほ甚しく未熟であつて、到底それ自身で一般政治上の見解に到達したり、その見解の爲に問題とされる人物を選用したりするに至つてゐないことを知る者には、何人にも直ちに諒解されるであらう。

そも／＼我々が平素「輿論」といふ語を以つて言ひ表はしてゐる所のものは、各人の自ら獲た経験や認識に依つて構成される部分は極めて僅かに過ぎないものであつて、その大部分といふものは反對に外部の往々にして甚しく強烈にして且つ執拗なる謂はゆる「啓蒙」に依つて招來されるものである。……………」

然るに斯かる「政治教育」の壓倒的大部分なるものは——この場合にはプロパガンダなる語が極めて適切に當てはするものであるが——新聞に依つて占められてゐる。新聞はこの「啓蒙の仕事」の第一線に立

つて居り、それに依つて一種の成人教育の學校を成してゐるものである」ところからその教育は、國家の手
に在らずして、往々にして甚しく下等な連中の手に握られてゐるのである。私は年若くしてウインに於い
て既に、この大家教育機關の所有者達及びその智的製造者達を正確に知るの絶好の機會を有したのであつ
た。最初私は、この點棘極まる大なる力が如何に短かい間に國家の中に一定の意見を造り出すことが出来
るかを見て、驚かざるを得なかつた。實にそれは、一般公衆に確かに存在せる内部的希望及び見解を完全
全に歪曲偽造せるものであつた。而も斯かる嘘ぶべき偽造よりして、間もなく重大な國家行動が起された
のであつた。と共に、斯かる一方、實際に重要な問題は反對に一般の忘却に附された。否、ヨリ正確に言
へばそれは、大家の思想及び追憶から簡単に盗み去られたのであつた。

斯くて僅か數週間の間に、何も無かつた所から突如として魔法の如くに種々の名前が造り出され、これ
に對して一般大衆の信ずべからざるほどの期待が結び付けられ、實に、眞に重要な人物でも往々にして
その一生盡掛つても獲ることの出来ぬ程な人氣が寄せられた。……………人々はこの新聞ゴロ其の危險を
眞に正當に評價し得んが爲には、彼等の破廉恥極まるユダヤ人的手段をヨリ研究して見なければならな
い。……………

斯かる精神的強盜騎士共にとつては、その場合その結構な目的を達する爲に都合の悪い様な事は、何一
つとして存在しない。

彼等は、斯かる場合には、極秘の家庭的事件までも探し廻り、その不幸なる犠牲者を決定的に倒すまで

は、その秘露探しの本能は何等かのこれが爲に役立つ。さまじき事件を探し出すことを止めない。……………

實に斯かる野郎共が謂はゆる「輿論」の三分の二以上までも製造してゐるのである。而して議會の女神

彼等は、斯かる場合には、極秘の家庭的事件までも探し廻り、その不幸なる犠牲者を決定的に倒すまで

は、その松露探しの本能は何等かのこれが爲に役立つ、あさましき事件を探し出すことを止めない。……

實に斯かる野郎共が謂はゆる「輿論」の三分の二以上までも製造してゐるのである。而して議會の女神はこの「輿論」の泡の中から出て來てゐるのだ。』(p. 181-182)

第五に、議會主義の下に選出される議會人の多數は、近代國家の方策決定に必要な専門的知識を有せず、これに不當なものである。

近代國家は、昔しの自由主義初期の『夜警國家』時代とは異り、多々益々多方面に亘つてその任務を帯びて來てゐる。従つてこれが方策の決定には多々益々専門的知識を必要とする。然るに、議會主義の下に於いてはこれが方策は議會が多數決に依つて決定し、政府は單にこれを執行するのであるが、その議會人の多數なるものは何等斯かる専門的知識を有しない。而も彼等は寄つて群つてこれを『決定』するのである。その結果は、その決定なるものは常に宜い加減なものとなり、屢々また全く誤れるものとなる。往々にして、全く背後の何等かの隠れたる勢力に操つられ、その爲のものとなつて了ふ。これは、この制度本來の目的からしても不合理なものでなければならぬと共に、國家國民によつて危險も甚しいものでなければならぬ。ヒトラーは次の如く言つてゐる。

「民主主義の議會主義の下に於いて注目されるべきことは、多數の例へば五百名の人々——最近では婦人もその中に加へられるが——が選出されて、彼等に見ゆる問題の最後の決定の義務が負はされるといふことである。……」

これが如何なる結果を來たすかは、極めて簡單に考察しただけでも明らかである。

その職能や能力をそれぞれ異にせる五百人もの選ばれたる國民代表者諸君が雜然と寄り集つてゐる内部的異見といふものは、全く支離滅裂にして日つ凡そ慘憺たるものである。蓋し人々は、この國民の選ばれたる人々が同時に精神及び知力に於いて選ばれたる者であるなどとは、よもや信じてゐないであらう。如何にとつても賢明とは言へない選挙者階級の投票用紙から、直ちに幾百人もの政治家が生れ出るものとは、何人も敢て考へないであらう。普通選挙から諸々の天才が生れて來るといふ妄想に對しては、一般に如何に峻厳な態度を以つて臨んでも尙ほ足らぬものである。第一、一つの國民にはその凡ゆる神聖な時代を通じてたゞ一度一人の眞の政治家が存する位のものであつて、同時に何百人もの眞の政治家が而も幾度も生れて來るものではないのだ。第二に、擧出せる天才に對する大案の忌避は常に一の偽はらざる本能であるのだ。選挙に依つて偉大なる人物が「發見」されるならば、それより前に駭脱も針の目を通り抜けるであらう。

一般凡俗の標準を眞に凌駕する程の者は、常に直接自ら世界歴史の中に名乗りをあげて來るものである。

然るに茲に、以上の如くして、寧ろ餘でもない五百人もの人間が、最も重要な國民の要求を票決し、政

一般凡俗の標準を眞に凌駕する程の者は、常に直接自ら世界歴史の中に名乗りをあげて來るものである。

然るに茲に、以上の如くして、寧ろ餘でもない五百人もの人間が、最も重要な國民の要求を票決し、政府を決定するのである。……………

ところで、これらの國民代表者諸君なる者の天賦の才能の如きは今全然これを問題にしないとしても、然し考へても見よ、その解決を要する所の問題なるものが如何に種々様々なものであるか、如何にその解決乃至決定が相異なる種々の方面に互つて行はなければならないかを！然る時は當然次のことが理解されるであらう。問題とされる事情に對して知識や經驗を有する者としては常にホンの僅かしか存在しない様な人々の大衆會議に、最後の決定權を委ねてゐるが如き統治組織なるものは、問題の解決に對して如何に無能でなければならぬかといふこと、これである。其處では、例へば極めて重要な諸々の經濟方策が經濟的豫備知識としてはその成員の十分の一も持ち合せてゐない様な集會に持ち出されるのである。これは取りも直さず、或る事柄の最後の決定をば、その決定に必要な如何なる前提をも完全に缺いてゐる所の人々の手に委ねるといふことに外ならぬものである。

ところが、これは他の如何なる問題の場合に於いても同じである。常に無知識及び無能力の多數に依つて決定が與へられることになる。何故ならば、取扱はるべき問題は公共生活の殆んど凡ゆる領域に互つて居り、従つてこれを判斷し決定する代議士連の絶えざる交替を必要とするほどであるに拘はらず、その制度の構成は變ることなくそのまゝであるからである。が、同一の人間例へば高等外交政策の或る問題を處理する所の人々をして、同時にまた交通問題をも處理せしむるといふことは、實に不可能なことでなければ

ばならぬ。尤もそれは、何世紀かの間に一度實際の存在にまで現れるか現れないかの如き全くの萬能の天才達の場合には、異なるものでなければならぬ。然るにこの場合に於いては、遺憾乍ら、先づ大抵、何等のさうした「天才」の集りでもなくして、寧ろ低能な人と共に自惚れで且つ高慢な素人共、換言すれば最も愚鈍しき種類の生半可通共の集りであるのだ。さればこそ、最も偉大なる人物達でさへも慎重なる熟慮を以つて掛らねばならぬ様な事柄に就いても、これらの紳士諸君は稍々もすれば、殆んど理解し得ない様な輕薄淺さを以つて論じたり決定したりすることにもなるのである。全國家・全民族の將來に對して最も重大な意義を有する諸方策も、一民族の運命問題としてではなく、恰かも、彼等紳士諸君の正に得意とするところの・シヤフロップだのタロツタだのといふ車上のカルタ遊びと同じ様に、簡單に取り扱はれるのである。(p. 95-96)

「勿論茲に異議を唱へる者があるであらう。成るほど個々の代議士は甲とか乙とかの側々の事柄に就いては何等の特別な理解をも有しないであらうが、然しこれに對する彼等の態度の決定といふものは、彼等の内部的政策指導者たる所屬團體に依つて熟慮されるものであり、この所屬團體にはその特別委員會なるものがあつて、其處では専門家達に依つて何時でも十二分に究明されるのである」と。

これは一應尤もの様に思はれる。然しその場合には尙ほ次のことが問題でなければならぬ。左様にホンの少數の者しか極めて重大な問題の決定に對して必要な知識を持つてゐないといふのに、何故に五百人

もの人々がその爲に選ばれるのであるか？

然り、茲にこそ問題の箇所があるのだ。

の少數の者しか極めて重大な問題の決定に對して必要なる知識を持つてゐないといふのに、何故に五百人

もの人々がその爲に選ばれるのであるか？

然り、茲にこそ問題の急所があるのだ。

今日の民主主義議會政治の目的は、凡そ賢人の會合などを形成するに在るのではなくして、寧ろ精神的に獨立なき本個の坊共の集りを形成するに在る。その場合、その各人の馬鹿の程が大であればあるほど、これを一定の方向へ引つ張つて行くことが益々容易である。今日一般に言はれてゐる意味に於ける政黨政治なるものは實に、専ら斯くの如くして始めて行はれ得るものである。それのみではなく、更にまた、その熱意の眞の操縦者が自ら何等の責任をも問はれることなく、常に用心深く背後に隠れてゐることが出来るといふのも、斯くして始めて可能なのである。蓋しこの場合には、國民にとつて如何なる有害な決定が行はれても、その責任はその極めて明瞭なる一個の惡黨に歸せられずして、全國體の肩に嫁せられるからである。』(p. 92, 93)

以上の如くして議會主義政治なるものは、大小議會人をして益々無責任な恥知らずなものたらしめ、これを益々墮落せしめると共に、場合に依つては國際金融資本などの傀儡ともなり、國賊的な存在ともなる。

『今、斯くの如き議會の代表と違はれて、常人自身の生れ付きからして既に、極めて僅少の責任感しか持たないものと考へるのには、確かに當を失ひた目方であるであらう。』

然ら、確かにさういふであらまい。

然し議會制度なるものが彼等をして日頃彼等の何んの心得も無い様な問題に對して態度を定めるを餘儀なくせしむることに依つて、彼等は漸次その性格を腐敗せられるのである。「諸君、私は思ふに、この事柄に關しては我々は何も分つてゐない。少くとも各個人としては全く分らないものであります。」と、斯く毀して言明することが出来る様な人間は一人も居ないであらう。この場合、人間といふものを知つて居れば誰でも理解するであらうが、斯様なレキ／＼の集る社會に於いては、誰も好んで一番の馬鹿にならうとする者は無く、或る社會の如きに於いては、正直といふことは馬鹿といふことと同義でさへあるのだ。それにまた假りにその様な者があつたとしても、事態には殆んど變りないであらう。この種の正直は結局誰にも理解されない許りでなく、誰も斯様な馬鹿正直な男の爲に全體の遊戲を打ち毀される様なことをしないであらう。

斯様にして、初めは尙ほ正直であつた代議士も、漸次必然的に、この一般の虚偽と欺瞞の道へと交ぜられることになる。一人許り單獨の行動を採つたところで、全體の事態そのものには何等の變化も及ぼすものではないといふ多きは、更に何人かのうちに起るかも知れない正直の衝動を悉く殺して丁度。斯ういふ人間は最後には尙ほ自分自身に次の様に言ひ分けするであらう。自分自身としては他の者に比べればまだ

まだ極悪なものではない、彼等と協働することに依つて自分は、たゞひとへに彼等の益々惡化して行くのを力／＼であるといふ。(C. 191-192)

人間は最後には尙ほ自分自身に次の様に言ひ分けするであらう。自分自身としては他の者に比べればまだ極悪なものではない、彼等と協働することに依つて自分は、たゞひとへに、彼等の益々悪化して行くのを防ぐのである、と。(第 9 頁)

『この議會といふ制度は、極めて不實にして特に日の光りを恐れることと主権の如き輩にとつてのみ、専ら喜ばしく且つ價値あるものであり得る。が、一切の誠實にして剛直、常に個人的に責任をとるの用意ある者にとつては、當然嫌惡を免れないものである。』

さればこそ、この種の民主主義はまた、その自らの秘密の目的の爲に、現在もまた將來の凡ゆる時も、陽九を恐れねばならぬ人種の道具ともなつてゐるのだ。即ち、獨りユダヤ人のみが、彼等自身と同様に嫌惡はしく且つ不正なるこの制度を賞讃し得るのだ。(第 39 頁)

七 眞のゲルマン民主主義

ヒトラーに據れば、大體以上の如き理由よりして、近世民主主義即ち議會主義なるものは嚴に排されなければならぬものである。

然らば彼れに據れば、代つて如何なる政治原理及び組織が採用さるべきか？ 善かれ悪しかれ近世議會主義即ち民主主義は、人類が久しきに亘る中世の專制主義に苦しみ抜いた經驗の結果、近世に

於いて漸やく到達した所の思想及び方法たるものである。その近世議會主義「民主主義」にして排さるべきであり、而もハプスブルグ流中世的出來損ひ神權君主主義も同じく、否ヨリ以上に排さるべしとすれば、他の如何なる政治主義が存在するか？ これはヒトラーとして當然——否、ヒトラーでなくとも、苟くも『革新』を云々して議會主義に反對する者は凡て——明らかにしなければならぬ問題である。

これに對する回答としては、ヒトラー乃至ナチズムには、謂はゆる『フューノーブリンチツプ（指導者原理）』なるものがあり、その大體如何なるものであるかは私の既に前に取り敢へず紹介した所である。ヒトラーはこれをば尙ほ後に、問題の書『マイン・カンフ』の第二卷に至つて、彼れの運動の組織を論ぜる個所に最もヨク論じてゐるが、彼れは右の議會主義の問題に關連して茲に一言無かるべからず、これに就いて豫め次の如く揚言してゐる。茲に謂ふ『ゲルマン民主主義』とは『指導者原理』の意味に外ならぬこと、彼等はこれをば一の『民主主義』『ゲルマン民主主義』となしてゐることは、この場合注意さるべきである。

『このユダヤ的民主主義に對して、一人の指導者を自由に選出する眞のゲルマン民主主義 (Cite Vernunft-)

rule Demokratie) が存在する。このゲルマン民主主義に於いては、該指導者は自らの一切の行爲に對して全責任を完全を負ふの責務を有する。其處に於いては、個々の問題に就いて多數の者が一々票決すると

『このユダヤ的民主主義に對して、一人の指導者を自由に選出する眞のゲルマン民主主義 (die germanische Demokratie) が存在する。』このゲルマン民主主義に於いては、該指導者は自らの一切の行爲に對して全責任を完全に負ふの責務を有する。其處に於いては、個々の問題に就いて多數の者が一々票決するといふが如きことは全く存在せず、唯一人の者「指導者」の決定が有るのみである。而してこの唯一者は、その全能力及び全生命を以つて、その自らの決定の責任を負はねばならぬのである。

若し人あつて、斯かる前提の下に於いては、左様な危險な任務に一身を捧ぐるだけの用意ある様な者は、容易に見出されないであらうと抗議するならば、それに對しては唯だ次の如く答へなければならぬ。有難いことには、何處にも彼處にも見出される種類の取るに足らぬ野心家や道德的卑怯者などが、何んだかんだと言つて上手に立ち廻つて、その國民同胞の統治に參與するやうなことの無いこと、その引受くべき責任の大なることに依つて既に、斯かる無能者や柔弱漢をば嚇し退けて了ふことこそは、ゲルマン民主主義の意とする所であるのだ、と。

若しそれにも拘らず斯かる徒輩が何處からか忍び込まうとしたならば、我々は容易にこれを見付けて、容赦なく怒鳴りつけてやることが出来る。去れ、卑怯なる惡黨奴！ 戻れ、汝の如きを上せるは階段の汚れである、歴史のパンテオン「萬神殿」に入るの玄關は、汝等の如き卑怯なる潜行者の爲に存在するのではなく、眞の勇士達の爲に存在するのだ、と。(p. 99—100)

指導者原理といふのは、前にも言へるが如く、一人の指導者を皆で選び——全員一致擁護の形式

で——あとは凡て該指導者の命令に依つて決定し行爲するものであるが、ヒトラー等ナチスに據れば、昔しゲルマン民族は斯くして彼等の共同生活を營み、斯くして外敵とも戦つて來たものであつて、取りも直さずゲルマン民族本來のデモクラシーだといふのである。これを一のデモクラシーなりとする所以は、該指導者をば全體で選出するからに在る。ヒトラーも斯かる方法で黨大會に於いて選出されたものであるのだ。確かなチス黨第何回かの黨大會に於いて終身指導者と決定されてゐる筈であるが、その限りに於いてヒトラー乃至ナチスの『獨裁』なるものは、成るほど一の『獨裁』ではあつても、過去に於ける數多の世襲專制君主の獨裁などとは根本的に區別され得るものであり、確かに一のデモクラシーと言ひ得るものである。たゞ、このデモクラシーは、謂はゞ上半身だけがデモクラシーであつて、下半身は明らかに謂はゆる獨裁であり、嚴密には、『デモクラシーか、ツェクツールか』といふが如き單純な分類範疇には、その孰れにも到底入らない兎も存在するだけである。

この統治方式は、私に據れば、必らずしも古代ゲルマン民族に特有なものでなく、古代乃至歴史以前に於いては殆んど凡ゆる民族乃至種族に多かれ少かれ存在せしものであり、現在また謂はゆる未開民族の間に多かれ少かれ悉く見られるものと思惟されるものである、従つて、これを若しゲ

ルマン特有の如く言ふならば、それは間違ひたるであらう。が、ナチスがこれを以つて一の民主主義となし、ゲルマン的民主主義となしてゐることは、皮相が自らの社會主義を以つて『其のドイツ』

本國民族の間に多かれ少かれ恐らく見られるものと思惟されるものである、従つて、これを若しガ

ルマン特有の如く言ふならば、それは間違ひたるであらう。が、ナチスがこれを以つて一の民主主義となし、ゲルマン的民主主義となしてゐることは、彼等が自らの社會主義を以つて『眞のドイツ社會主義』となしてゐること共に、充分諒承され得る所であり、また我々の注意を要する所である。ナチスのナチスたる所以は斯かる點に最もヨク示されてゐるのである。從來我國に於いては、『ドイツ歸り』の有名な『學者』・センセイ諸君に依つて、ナチスは全く反社會主義・反民主主義的なものに説かれた。が、ナチスを以て斯かる單純な國家主義團體の如く考へるならば、これより大なる誤りは無いであらう。

八 近世ドイツ史に於ける俗流愛國主義

純正愛國主義の分裂

近世議會主義乃至議會制度なるものに就いてのヒトラーの根本的見解は以上の如くである。要するに彼れは、結局、西歐的イギリス的民主主義に代ふるにゲルマン民主主義を以つてし、多數決主義に代ふるに指導者主義を以つてするのである。本來のナチス運動は元より、今日のドイツ國家は

全くこの思想及び方法を以つて貫かれたものであるが、ヒトラーはウイン時代に既に大體この見解に達してゐたらしい。彼れはこの問題に就いて以上の如く論述した後に、『私は、一年間ウインの議會に通ひ、考へに考へた結果、斯かる見解に到達したのであつた。それから後は私は最早其處に足を入れなかつた。』と言つてゐる。つまりこれが彼れの最終的見解であつたのである。

この議會主義の考察の後に彼れは、一の議會主義の影響を受けて當時益々非ドイツ化し非國民化しつつあつたハプスブルグ國家に於ける革新運動に考察を向けてゐる。蓋し、既に社會改革の点を有し、その倒さねばならぬものも凡そハッキリし、その如何に改革すべきかも大體決定せる者にとつては、その如何にして目的を達すべきか、その方法如何が、次に當然問題となつて來るのである。ヒトラーはハプスブルグ國家に對してはその幼年時代から毫末も尊愛を感じず、寧ろその滅亡を望んでゐたことは、夙に我々の見た如くである。が、問題は、さうしたハプスブルグ國家自體よりも、その下に於ける一定民族・一定國民の採るべき態度方法にあるのである。而して我々はこの議論の中に、ヒトラーが徒らに『國家權威』を頭から振り廻す謂はゆる『俗流國家主義者』とは根本的に異なる最も深刻なものを見るであらう。

ヒトラーに據れば、前記の如き議會政治の下にハプスブルグ國家は益々非ドイツ的なものとなつ

て行つた。徒らにドイツ民族を抑壓することを以つてその能となし、さては専ら宗教（羅馬カソリック教）を利用して以つて國家を維持せんとする策にまでなつた。これは第三者から見れば、ハプス

ヒトラーに據れば、前記の如き議會政治の下にハプスブルグ國家は益々非ドイツ的なものとなつ

て行つた。徒らにドイツ民族を抑壓することを以つてその能となし、さては専ら宗教（羅馬カソリック教）を利用して以つて國家を維持せんとする様にまでなつた。これは第三者から見れば、ハプスブルグ國家としては已むを得ざる仕儀でもあつた。蓋し、ハプスブルグ國家は多民族國家であり、その人口約五千萬のうちドイツ人は約一千萬を占むるに過ぎず、如何なる民族主義にも立脚する能はず、議會政治の多數決で行けば勢ひドイツ民族は虐待されるものとならざるを得ないのである。と共に、斯かる國家に於いては、結局超民族的な『神祿』でも持つて來て統一を維持するより外に致し方がないのである。が、ヒトラーに據れば、ハプスブルグ國家の非ドイツ化は、さうした自然的・消極的・善意的なものではなくして、全く計画的・積極的・惡意的なものであつた。殊にチエロ系貴族婦人を妃とするフェルゼナンド大公が皇太子と決定されてから、この傾向は益々顯著なものとなり決定的なものとなつた。ヒトラーはこれに就いて次の如く記してゐる。

『議會政治は、ハプスブルグ國家を最近に於いて衰頹せしめた所の主要な原因の一つであつた。この議會政治の作用に依つてドイツ民族の優勢が益々毀損されて行くと共に、それにつれて益々この諸民族相互の賭け勝負を事とする制度が支配して行つた。議會そのものに於いてはこの過程は常にドイツ人の犠牲に於いて行はれ、さうすることに依つて結局實にオーストリア帝國そのものが犠牲とされて行つたのであつ

た。…………

國家がその自己維持の爲に用ひねばならなかつた所の手段が憐れなものであればあるほど、國家に對する一般の輿視の念が益々高まつて行つた。ハンガリーに於いて許りではなくスラヴの各地方に於いても、人々は共同の君主制の存在などは最早殆んど感じない様になり、この君主制の無力は最早少しも彼等自身の恥辱とは思はれない様になつた。人々は寧ろ來たりつゝある時代の斯かる微候を喜んだ。人々はこの君主制の強健化よりも、寧ろその死を望んだのであつた。

議會に於いては、醜惡な道り取りや各種の強請沙汰まで行はれ、以つて尙ほ完全なる崩壞を免れてゐたが、その犠牲は結局ドイツ人が支拂はねばならなかつた。地方に於いても、各民族が互ひに出来るだけ巧妙に争ふことに依つて、これまた同じ状態を見てゐた。たゞ然しその發展の一般的方向は益々ドイツ人に非であつた。殊に王位繼承がフランス・フェルディナンド大公に一定の勢力を與へるに至つてからは、上からするチエコ化の企圖には一定の計畫と秩序とが加へられて來た。二重君主國のこの未來の支配者は、凡そ可能な有りといふ手段を以つて、反ドイツ運動を援助し、或ひは自らもこれを促進せんとし、少くともこれを擁護すべく努めた。斯くて純ドイツ的の地方までが國家の官僚階級を通じて徐々に、然し漸々と、國語混合の危險地帯へと押し込まれて行つた。本來のオーストリア自體に於いてさへもこの過程は次から次へと益々急速に推し進められ、さてはウインまでが多くのチエコ人に依つて既に彼等の首都と考へられるまでに至つた。

このハプスブルグ家の新人の家族は専らチエコ語で話してゐたが（因に、大公の妃は前チエコ伯爵の令

るまでに至つた。

このハプスブルグ家の新人の家族は専らチエコ語で話してゐたが（因に、大公の妃は前チエコ伯爵の令嬢で、大公とは身分違ひの結婚をせしものであつて、反ドイツ的立場を傳統とせる社會の出身であつた）、彼れの指導思想は中央ヨーロッパに一のスラヴ國家を樹立するにあつた。而してこの國家は、正教を奉ずるロシア本國に對する防衛上、嚴にカソリツク教の基礎の上に建てられねばならなかつた。斯くして、ハプスブルグ家には夙に幾度となく見られたことであつたが、又もや宗教が純政治的意圖の爲に、而も我々ドイツ人の立場からすれば少くとも邪惡なる意圖の爲に、利用されたのであつた。

その結果は幾多の點から見て洵に悲慘以上のものであつた。

當のハプスブルグ家も、またカソリツク教會も、その期待した報酬は獲られなかつた。

ハプスブルグ家は王位を、ローマ教會はその一大教區國家を失つたのであつた。

といふのは、帝冠がその政治的打算の爲に宗教的要素までも利用したことに依つて、自らは元より思ひも及ばなかつた所の或る一の精神を呼び起したのであつた。

この凡ゆる手段を以つて舊君主國に於けるドイツ民族を掃倒せんとした企圖から、その返報としてオーストリアに於ける汎ドイツ運動（Alldeutsche Bewegung）が生じたのである（J. G. 100 102）

このハプスブルグ國家の非ドイツ化は、その下に於けるドイツ民族にとつては、正に同國家の非國民化たるものであつたが、これはフェルザナンド大公の皇太子決定に始つたものではなく、それ

以前からのことであつた。既に一八六六年のプロシアとの戦争以來、ハプスブルグ國家はこれに對して——従つてまた後のドイツに對して——復讐せんものと考へてゐた。一八七〇年、プロシアを中心とする新ドイツ聯邦とフランスとの間に戦争の始つた時、ハプスブルグ國家はこれに對する報復の好機と考へたのであつたが、ドイツ側が餘りに迅速に且つ素晴しく勝利した爲にその目的を達しなかつた。而してこの戦争の結果は、オーストリアを除く全ドイツ國家二十有餘ヶ國がプロシア皇室ホーヘンツォルレン家を盟主に正式に結合して、謂はゆる『ドイツ帝國』を結成したのであつた。オーストリア國內のドイツ民族は、自分達もやがてこれに参加出来るものと信じ、狂喜してこれを迎へた。が、ハプスブルグ國家はこれを見て反對に、益々ドイツ及びドイツ民族を仇敵視し、國內ドイツ民族の彈壓を決意し強化したのであつた。フェルザナンド大公は斯かる時に皇太子となり、國內スラヴ系との聯携の下に、その國內ドイツ民族彈壓の急先鋒であつたのだ。が、それと共に、國內ドイツ民族のこれに對する反撃ハ汎ドイツ運動も『近世ドイツ史』に未だ會つて見ざる勢ひを以つて燃え上つたのであつた。

『既に一八六六年の戦争（普墺戦争）の敗北の結果以來、ハプスブルグ家は再び戦場に於いて復讐せんものとの舌を抱いてゐた。……だが然し、ハプスブルグ家は當時は尙ほ黙つて機會を窺つてゐたので

あつた。一八七〇（一七）年の戦争（獨佛戦争）があればどまでも無類の戦勝に終らなかつたならば、恐ら

のとの考へを抱いてゐた。……………だが然し、ハプスブルグ家は當時は尙ほ欺つて機會を窺つてゐたので

あつた。一八七〇—七一年の戦争「獨逸戦争」があれば、どこまでも無類の戦勝に終らなかつたならば、恐らくウィーン皇室はサドワに於ける敗戦の復讐の血酬き遊戯を更に敢行したことであつたらう。ところが、戰場から最初の華々しい戦報が到達した時、それは奇蹟の様な殆んど信ずることの出来ない様なものであつたが、然しそれは確かに眞實の報道であつた。そこで、凡ゆる君主中の「最も總明なる御方」は未だその機に非すと認め、この誤謬に對して出来るだけ立派な態度を見せたのであつた。

この二年に存る類ける戦争は、然し、尙ほその外に一つの大きな驚異を残したのであつた。といふのはハプスブルグ人土にあつては右の態度の變化は、斷じて内心の衝動に基づくものではなくして、四圍の事情の強制に基づくものであつた。が、舊オーストマルクのドイツ民族にあつては、ドイツの戦勝に心から有頂天となり、そして心底から感動に打たれ乍ら、到處に華々しき現實となつた父祖の夢の再現を見たのである。……………

ところで、この大戦争の後、ハプスブルグ家が愈々最後の決意を固めて、その二重君主國に於ける危険なる民族（その抱懷せる考へは最早疑ふべくもなかつた所の）をば徐々に然し假借なく掃倒せんと着手した時——暫しそれはラッヴ化政策の終局目的でなければならなかつたのだが——その時、その最後の運命に立たせられた民族の反抗の火の手は、近世ドイツ史に未だ曾つて見ざりしほどの勢ひを以つて燃え上つたのであつた。（『大 102—103』）

國家は右せんとし國民は左せんとして相戦ふ。これは正に國家の國民への叛逆であり、國民の國家への叛逆である。ヒトラーはこれを『Rebellion der Deutschvölkischen (オーストリア・ドイツ人の叛逆)』と呼んでゐるが、斯かる運命に立たせられた國家及び國民ほど悲しきはあるまい。僞オーストリア帝國(ハプスブルグ國家)と僞オーストリア・ドイツ民族とは正にそれであつたのだ。ヒトラーは續いて次の如く言つてゐる。

『國民的・愛國的な考への人々が茲に始めて反逆者となつた。

それは國民に對する叛逆ではない、國家^{シュタット}其者に對する叛逆でもない。それは、自國民をして衰亡に導かずんば^{シム}と信ぜられる所の統治の一種に對する叛逆であつた。

近世ドイツ史に於いて茲に始めて、俗流^{ボルジョア}、愛國主義と民族的祖國愛乃至國民愛とが分裂したのであつた。』(『103—104』)

九 國家はそれ自身目的に非ず

斯かる場合、即ち國家(嚴密には統治者乃至政府)が國民の必要及び意志に反して正に同國民を

衰亡にまで陥し入れると信ぜられる方向に進まんとし、而もこれに反對な國民をば敢へて權力を以

其かる場合、則ち國家（嚴密には統治者乃至政府）が國民の必要及び意志に反して正に同國民を
其にまで陥し入れると信ぜられる方向に進まんとし、而もこれに反對な國民をば敢へて權力を以
つて彈壓掃倒せんとまでする場合、その國民たる者は一體如何にすべきであらうか？ 如何にする
ことが眞に『愛國的』たるであらうか？ 問題のオーストリアの場合に於いては、國家は皇室を中
心とし先頭として斯かる反國民的方向——但し同國ドイツ民族から見ても——へと進んだのである
が、斯かる場合、眞に國家を愛し同胞を愛する者は果して如何にしたら宜いであらうか？

これは困難な問題である。と共に重大な問題である。『君・君たらずも、臣・臣たらずるべから
ず』といふ見地よりすれば、國家・國家たらずも、民・民たらずるべからずで、國家が如何にその
道を誤り、或ひは腐敗墮落・惡道無道を極め、一路崩壞に進まうとも、國民は唯々諸々これに従つ
て進まねばならず、さうすることが『愛國的』たるであらう。が、『君誤れば臣これを正すを以つて
その道とす』といふ見地よりすれば、國家誤れば民は敢然起つてこれを是正し改組更生せしむべき
であり、それが眞に『愛國的』たるであらう。また更に遡つて、古支那の『天の政治』思想よりす
れば、結局その場合『天』が如何に考へるかに依つて決せられ、中世歐洲の『神の政治』思想より
すれば、『神』が如何に考へるかに依つて決せられるであらう。が、その場合も、『天』乃至『神』は
そのいづれを望むかの解釋に於いて、結局分裂を免れないことは歴史の示してゐる所である。凡そ

る『天の政治』、凡ゆる『神の政治』は斯くして、いづれも『天』を擔ぎ『神』を擔ぎつつ、相争ひ、相亡び、そして遂に近世に於いて『人間の政治』に取つて代られたのである。この世界史の過程を究明することは、重要なことでもあり面白いことでもある。が、我々は今これを研究することは目的ではなく、『マイン・カンフ』研究が目的である。ヒトラーはこの問題に就いて如何に考へ、如何に言つてゐるか？ 彼れは實に次の如く言つてゐる。この彼れの所論の中に我々は既に、第二卷に於ける國家論の研究を俟つまでもなく、『國家は二の手段 (ein Mittel) なり』とする——但し人間がその生存を確保せんが爲の手段なりとする——彼れの國家觀をその根柢に於いて窺ふことが出来る。

『國家權威 (Staatsautorität) なるものは、それが一國民の必要に適應し、少くともこれに危害を加へざる限りに於いてのみ、尊敬と擁護とを要求する權利を有するものであるといふこと、このことを明瞭に且つ端的に確定したことは、九十年代のドイツ・ナーストリアに於ける汎ドイツ運動の功績であつた。

それ自身目的としての國家權威といふが如きものは有り得ない。何故ならば、國家權威が斯くの如きものである場合には、この世に於ける如何なる暴政も排撃すべからざるものとなり、神聖なものとなつて了ふのである。

若し統治權力 (Regierungsgewalt) の手段に依つて、國民が衰亡に迫ひやられるが如き場合には、その時によ、該國民の凡ゆる成員にとつて、これこそ最善のことと當に權利たるのみならず、實に義務たるも

ふのである。

若し統治權力 (Regierungsgewalt) の手段に依つて一國民が衰亡に迫ひやられるが如き場合には、その時には、該國民の凡ゆる成員にとつて、これに反逆することは實に權利たるのみならず、實に義務たるものである。

たゞ、如何なる時が斯かる時であるかは、理論的討究などに依つて決せられるのではなく、該權力と而して實にその結果とに依つて決定される。

一切の統治權力は、例ひそれが如何に劣悪なものであり、如何に屢々國民の利害を裏切る様なものであらうとも、國家權威維持の義務を自らの爲に要求するであらうことは言ふまでもない。それ故に自己を確保せんとする國民は、斯くの如き勢力を克服し、自由や獨立を獲んが爲には、相手が自己維持の爲に用ひると同一の武器を取つて戦はねばならぬ。闘ひは、従つてその打倒さるべき權力が謂はゆる合法的手段を利用する限りは、矢張り「合法的」手段を以つて闘はれるであらう。が、抑壓者が非合法的手段を用ひる時には、被抑壓者も非合法的手段と雖も辭すべきではない。

一般に、實に、次のことが忘れられてはならない。——人間の生存の最高目的は一國家の維持や況して一政府の維持などに在るのではなくして、自らの種族の防護に在るといふこと、これである。

然るに、この自らの種族の防護そのものが既に壓迫されたり排撃されたりするが如き危険に陥る場合に於いては、その場合には、合法性などといふ問題は、たゞ全く第二次以下の問題たるに過ぎなくなつて了ふ。その場合、支配勢力の方は尙ほ幾十度ともなく謂はゆる「合法的」の手段を自己の行動に利用すると

いふこともあるかも知れないが、然し被壓迫者側はその自己保存の本能よりして常に、如何なる武器を以つてその闘争を遂行して差支へない最も崇高なる權利を與へられてゐるものである。

この原則を認めることよりしてのみ、始めて、この地上に於ける諸民族の内部的及び外部的の奴隷化に對する自由獲得の幾多の闘争は、斯くも著しき歴史上の事例として現れて來るのである。

人間の權利は國家の權利を越る (Menschenrecht brecht Staatsrecht)。

若し、然るに、或る國民が人間の權利の爲の戦ひに於いて敗北するならば、その時には、その國民はこの地上世界に生存維持の幸福を得るには、運命の枠量に於いて餘りに輕過ぎることが發見されたものである。蓋し、自己の生存の爲に戦ふ意思の無いもの、またその能力の無いものに對しては、永しに正義なる神慮は既に見切りをつけてゐるのである。

世界は賸病なる國民の爲に存在するものではないのだ。(C. I. + 105)

右に謂ふ『國家權威』とは國家の權力及び威信と言つた様な意味のものと思はれ、國家權威はそれ自身目的に非ずと言へる時の國家權威は、結局國家の意味になることは、後に國家論を直接論ぜる個所に於いて『國家はそれ自身目的に非ず』と言つてゐる所にも窺はれる所であるが、ヒトラーに據れば實に國家は以上の如きものである。國家はこれを構成する人間の爲に存在するものであつ

て、それ以外の何者でもない。人權は國權に優越する。國家がその國民を不當に抑壓し若しくは誤導し、その生存を危うからしむる時に於いては、該國民は當然起つてこれを打破革新すべきであ

に據れば實に國家は以上の如きものである。國家はこれを構成する人間の爲に存在するものであつ

て、それ以外の何者でもない。人權は國權に優越する。國家がその國民を不當に抑壓し若しくは誤導し、その生存を危うからしむる時に於いては、該國民は當然起つてこれを打破革新すべきである。その爲には、場合に依つては、『非法的手段』と雖も辭すべきではない。『人間生存の最高目的は、一國家の維持や況して一政府の維持などに在るのではなくして、自らの種族の防護に在る』ものである。この自らの正義の爲に敢然起つて戦ひ得ない様な國民乃至民族は、既にその生存の權利を自ら棄てたものである。ヒトラーは斯く言ふのである。

我々乃至人々はこのヒトラーの説を肯定するか否定するかは、元より各人の自由である。たゞ、眞に國家社會を革新する所の革新運動は、大體この見地より非ざれば出て來ないことは明らかである。蓋し、國家乃至國家權威そのものが最終目的なりとすれば、ヒトラーの言つてゐるが如く、國家の爲すことは如何なることもこれを認めねばならず、この世の如何なる惡政も否定し得ないものとなるのである。

十 汎ドイツ黨とキリスト教社會黨の教訓

ヒトラーをして前記の如くにまで激言せしめてゐる所のハプスブルグ國家のその國內ドイツ民族

の迫害なるものは——それは殊に一八七〇年の獨佛戰爭後であつたといふから、前世紀の八・九十年代から今世紀の初頭に掛けての頃と思はれるが——果してどの程度のものであり、如何なる形態に於いて行はれたものかは、一般の西洋史書などには出て居らず、茲には詳かにし得ない。また敢へて詳らかにする必要もないであらうが、兎に角、ヒトラーがその迫害をドイツ民族の *ausrotten* (剿滅) だの *vernichten* (根絶) だのと言つてゐる所を見ると、相當ヒドイものであつたらうと思はれる。と共に、この迫害の初つた頃は、オーストリアに於いても自由主義が既に隆盛を極め、マルクス主義も次いで將に勃興せんとして居り、國內は二重三重の混亂に在つたらしい。

ハプスブルグ國家が愈々意を決してこの國內ドイツ民族の抑壓に乗り出した時、そのオーストリアの混亂の中から、斯かる國家狀態への『反動』として生れ出たものに——それはヒトラーが尙ほ生れたか生れないかの頃であつたが——先づ汎ドイツ黨の運動があり、次いでキリスト教社會黨の運動があつた。前者は『ヨリ多くナチオナルの觀點に立つ』ものであり、後者は『ヨリ多くソツィアルの觀點に立つ』ものであつた。ヒトラーはこれに就いて先づ次の如く記してゐる。

『八十年代の頃には、ユダヤ的根本見解に立つマンチエスター自由主義はこの君主國に於いても頂點に達

し、未だこれを超ゆるに至らなかつた。然しこれに對する反動は、舊オーストリアに於いては他の凡ゆる場合と同じく、先づ第一に、社會的觀點からではなく、民族的觀點から出て來たのであつた。自己保存の

『八十年代の頃には、ユダヤ的根本見解に立つマンチエスター自由主義はこの君主國に於いても頂點に達

し、まだこれを超ゆるに至らなかつた。然しこれに對する反動は、舊オーストリアに於いては他の凡ゆる場合と同じく、先づ第一に、社會的觀點からではなく、民族的觀點から出て來たのであつた。自己保存の衝動がドイツ民族をして峻烈極まる防衛に起たしめたのであつた。第二に、その次に至つて始めて、經濟的考慮が漸次その決定的影響を及ぼして來た。斯くて一般的政治的混亂の中から、二つの政黨組織が生れ出て來た。一つはヨリ多く國民的の觀點に立つものであり、他の一つはヨリ多く社會的の觀點に立つものであつたが、その兩者共に將來に對して極めて興味深く且つ教訓深きものである。』(p. 102)

『ヨリ多くナチオナル』な運動と『ヨリ多くソツイアル』な運動——それが既にナチオナルソツイアリストたるヒトラーによつて重大な關心の對象たるべきは、我々のおのづから諒解し得る所でないければならぬ。彼れは實に、そのウイン時代諸考察の最後にこの兩運動に對してその批判考察を集中し、同章六十餘頁中の三分の一以上を費やしてこれを論じてゐる。蓋し、前にも言へるが如く、既に革新の志を懷き、その如何に革新すべきかも大體明らかになつた者によつては、今や、その如何なる方法、如何なる運動に依つて、その目的を達すべきか重大な關心でなければならぬ。ヒトラーの汎ドイツ黨及びキリスト教社會黨の兩運動研究は取りも直さず斯かる意味を持つたものであり、この兩運動を研究することに依つて、實は、自らの採るべき運動方法を明らかにせんとしたも

のである。彼れの運動は勿論この兩運動のいづれとも甚しく異なるものであるが、然し彼れはこの兩運動から可なり多くのものを學んでゐる。主として第二卷に論述してゐる所の彼れの運動方針なるものは、この貴重な研究の上に打ち建てられたものであつて、この場合に於いてもまた、『マイン・カンフ』に於ける他の多くの場合と同様に、この第一卷に説いてゐる所のものを知らなくして、第二卷に説いてゐる所のものを正當に理解することは困難である。夙に緒言の中にも述べた如く、『マイン・カンフ』を一の建築に例へるならば、第一卷は基礎構築、第二卷は上部構築であり、またこれを一の植物に例へるならば、前卷は根、後卷は幹であるのである。ヒトラーにとつてこの兩運動の研究が如何に重要なものであるかは、次の彼れの言にも窺はれる。

『この兩黨の失敗の原因を研究することは、我等の今日の時代にとつて無限の教訓となるものである。殊にそれは我が盟友達にとつて有益である。何故ならば、今日の情勢と當時の情勢とは多くの點に於いて同じものがあり、この研究に依つて我々は、曾つてこの兩運動の一つをばその終末へ、他の一つをばその無結果へと導いた所の諸々の過誤をば、これを避けることが出来るからである。』(p. 100)

然し問題は主として運動の方法そのものに關するものである。革新の實踐的志しを持つ者にとつ

ては大なる意義を有するものであるが、左様な志しなどを持合せぬ者にとつては、反對の必要からでもせざる限り、凡そ無用のものである。出来ることこの問題に就いてのヒトラーの論議は可なり長

然し問題は主として運動の方法そのものに關するものである。革新の實踐的志しを持つ者によつ

ては大なる意義を有するものであるが、左様な志しなどを持合せぬ者にとつては、反對の必要からでもせざる限り、凡そ無用のものである。加ふるにこの問題に就いてのヒトラーの論述は可なり長大且つ多岐に亘つて居り、これを詳細に茲に紹介することは實に本研究の豫定上困難である許りでなく、却つて謂はゆる林に入つて樹を見て森を見ずで問題の要點を逸せしむる恐れがある。それ故に私は、これをば出來るだけ要約してその骨子を紹介するに止むるものであるが、篤志の讀者諸氏に於いてはこれをば、寧ろ自らに與へられたる一の課題として考讀されんことを望む。彼れは先づこの兩運動の消長とこれに對する彼れの注目の経緯に就いて、次の如く記してゐる。

「謂はゆる『合法性』の外衣をまといふことが壓制政治にとつては如何に容易なことであるか、このこともまたオーストリアの例が最も明瞭に且つ最も痛切に示してゐた。

當時オーストリアに於いては合法的國家權力は、非ドイツ人が多數を占むる反ドイツ的な議會と、而して實にこれと同じく反ドイツ的な皇室から成り立つてゐた。この二つの要素の中に全國家權威が體現されてゐた。斯かる状態の下に於いてその内部から、オーストリア・ドイツ民族の運命を變へようといふことは、そも／＼ナンセンスであつた。と共に、専ら『合法的』方法のみを可能としてこれを尊崇する連中や、國家權威そのものの禮拜者達の考へからすれば、その場合、一切の反抗は合法的手段を以つてして

は遂行し得られないが故に、結局これを断念しなければならなかつた。……………

眼鏡を掛けた學者は勿論常に、自己の民族の爲よりも自己の教説の爲に喜んで死んで行くであらう。人間は初めは自らの爲に法律を造るのであるが、後には法律の爲に人間が存在するかの如く考へる。

斯かる不合理を根本的に覆へ、凡ゆる理論的天降り主義者や其他の政府の土偶の妨共を驚愕せしめたことは、オーストリアに於ける當時の汎ドイツ運動の功績であつた。

ハプスブルグ人士が凡ゆる手段を以つてドイツ民族を掃倒すべく肉薄するや、汎ドイツ黨は「高貴」なる皇室に向つて而も遠慮暫釋も無く攻撃して行つた。同黨はこの腐敗せる國家に始めて探針を突き込み、幾百萬の人々にその眼を開かした。このあさましき王朝の手から祖國愛の貴重な概念を救ひ出したことは正にこの黨の功績である。

汎ドイツ黨が現はれた最初の頃はその支持者の數は非常なものであつて、正に文字通り雪崩なだれをうつて押寄せるの觀があつた。然しその後がウマク行かなかつた。私がウインに來た時には、この運動は既に遙か以前から、その間に勢力を得たキリスト教社會黨に依つて壓倒され、正に殆んど完全に無意義なものにまで成り下がつてゐた。

この一方に於ける汎ドイツ運動の發生とその發退、他方に於けるキリスト教社會黨の未曾有の進出——この全過程は、私にとつては、極めて重要な意義を持つ典型的な研究問題たるものであつた。

ウインに出て來た當時は私は、完全に汎ドイツ運動の側に共鳴を寄せてゐた。

人々が議會に於いて勇を鼓して、敢へて「ホーヘンツォルレルン家萬歲」を叫んでゐるのを見て、私は甚しく心うたれると共に、また深く喜んだ。人々は自らを以つて常に、單に一時段の利權を以て喜んだ。

ワインに出て來た當時は私は、完全に汎ドイツ運動の側に共鳴を寄せてゐた。

人々が議會に於いて勇を鼓して、敢へて「ホーヘンツォルレルン家萬歲」を叫んでゐるのを見て、私は甚しく心うたれると共に、また深く喜んだ。人々は自らを以つて常に、單に一時假りに引離されて居るに過ぎぬドイツ帝國の構成分子と考へ、且つこのことをまた公然世に示すことを隨時も忘れないのを見て、私は信頼の喜びを起させられた。人々はドイツ民族に關する凡ゆる問題に於いて誠實なく自己を表明し斷じて妥協を許さないのを見て、私は我が民族救済の尙ほ一縷の望みあるものと考へたのであつた。然るにその汎ドイツ運動が、その初めはあれほどまでに素晴らしい勳業を示してゐながら、その後に至つてあれほどまでに沈没したといふことは、私には當時理解出来なかつた。と共に實に、汎ドイツ黨が衰へた丁度その時に、キリスト教社會黨があれほどまでに驚くべき勢力を占めることが出来たといふことは、私にはヨリ一層不可解であつた。キリスト教社會黨は當時正にその名聲の絶頂に達してゐたのである。

斯くて私はこの兩運動を比較考察するに至つたのであつたが、この場合に於いてもまた運命が、私の曾つこの悲しき境遇に促されて、私にこの謎の原因を理解すべき最上の手ほどきを與へて呉れたのであつた。』(S. 105—107)

汎ドイツ黨(Alldeutsche Partei)の運動といふのは、要するに、前述の如き舊オーストリアの事情の下に於いて、ハプスブルグ政權の迫害から同國ドイツ民族を救はんとしたものであり、キリスト教社會黨(Christlich Soziale Partei)のそれは、ドイツ民族よりも、全體としてのオーストリア

自體を救はんとしたものであつた。この兩者共に一時は隆盛を極め、殊に後者即ちキリスト教社會黨は戦後のオーストリア時代にまで亘つて、新たに勃興せるマルクス主義の社會民主黨と並んで支配的政黨であつた。然しこの兩運動共にその本來の目的を達することが出来なかつた。即ち、汎ドイツ黨は舊オーストリアのドイツ民族をハプスブルグ支配から救ひ得ず、キリスト教社會黨も舊オーストリアをその崩壊から救ひ得なかつたのである。舊オーストリアは直接的には戦争に依つて崩壊したのであつたが、然しヒトラーに據ればそれ以前に於いて既に四分五裂に陥つて居り、單に戦争に依つてその崩壊の機會を興へられたに過ぎなかつたのである。キリスト教社會黨は、その名の示すが如く、歐洲の普遍宗教たるキリスト教の立場に立てるものであつたが、神様を以つてしても遂にオーストリア國內諸民族を統一する能はず、またマルクス主義の勃興を如何とも爲し得なかつたのである。ヒトラーが兩運動を『失敗』と言つてゐるのは、取りも直さずこの意味のものである。然らばそれは何故であつたか？これが今やヒトラーの研究題目であるのである。

十一 兩黨指導者シエーネレルとリユーゲル

汎ドイツ黨及びキリスト教社會黨が遂にその用を爲さなかつた原因は何處に在つたか？ヒトラー

はこれが研究をば先づこの兩黨黨首の比較研究から始めてゐる。

汎ドイツ黨及びキリスト教社會黨が遂にその用を爲さなかつた原因は何處に在つたか？ ヒトラ

ーはこれが研究をば先づこの兩黨黨首の比較研究から始めてゐる。

『私は私の比較研究をば、先づ兩黨の指導者にして、且つ創設者であると目するべき二人の人物から始める。ゲオルグ・フォン・シエーネレル (Georg v. Scharner) と、カール・リュエゲル博士 (Carl Kraft Jaeger) の二人、これである。』

純粹に人間といふ點からこれを見る時は、この二人とも同じ様に、謂はゆる議會政治なるものゝ標準乃至程度を造かに抜いてゐた、一般の政治的腐敗の泥沼の中に在つて、この二人の全生活なるものは固くまで純潔にして且つ優し難きものであつた。……………

二人の能力を比較する時には、當時既に私には、シエーネレルの方が原理的諸問題に於いてヨリ優れヨリ根本的な思想家である様に思はれた。彼れは他の何人にも勝つてヨリ適確に且つヨリ明瞭に、オーストリア國家の必然的滅亡を認識してゐた。若し人々殊にドイツ帝國の人々が、ハプスブルグ君主國に對するシエーネレルの傳書をもっと良く聞いてゐたならば、かの全ヨーロッパを敵としてのドイツの世界大戰の不幸なるものは決して起らなかつたであらう。

たゞシエーネレルは、諸々の問題をばその内部的本質に於いて認識したのであつたが、それだけまたヨリ多く人間の觀察を誤つた。

茲に反對にリュエゲル博士の長所があつた。

リユーゲル博士は稀に見る人間通であつた。彼れは殊に、人間をばその實際以上に善く考へる様なことをしない人物であつた。従つてまた彼れは、實際の生活上の諸々の可能性なるものをヨリ多く考慮した。然るにシエーネレルの方はこれに對して餘り理解を有しなかつた。理論上から見れば、こゝに「主義者の考へたことは凡て正しかつた。が、彼れは、その理論的認識を大衆に傳へる力と理解、換言すればその認識をば、現實に甚しく制限され狭小である所の國民大衆の受容能力に適應する様な形態に於いてこれを表はす力と理解とを缺いてゐた。これが爲にその凡ての認識は、遂に實際に現實化し得るなき豫言的知識に止つたのである。

ところでこの實際上の人間認識の缺如は、その更に進むに及んで、凡ゆる運動並びに舊來の諸制度の力の評價を誤らしむるに至つた。

畢竟するにシエーネレルは、世界觀の問題が肝腎だといふことは確かに認識してゐたが、然し、斯くの如き殆んど宗教的とも言ふべき信念の擔當者たり得る者は、先づ第一に常に國民大衆有るのみであるといふことを理解しなかつたのである。

彼れは、遺憾乍ら、謂はゆる「ブルジョア」階級の闘争意志なるものは甚しく貧乏なものであるといふこと、何故ならば、彼等の經濟的地位はその各人をして餘りにもその失ふことを恐れしめ、従つてまた彼等をして寧ろ保守的ならしむるからであるといふことを、殆んどと言つて宜い程に、僅かしか考へなかつた。

ところが、一般に一つの世界觀なるものは、廣汎なる大衆がその新たな教説の擔當者となり、その必

ところが、一般に一つの世界観なるものは、廣汎なる大衆がその新たな宗教の擔當者となり、その必要なる闘争を擔ふことの明らかになつた時に於いて、始めて勝利の見込みを持ち得るのである。

然るに彼等は、この下層國民層の重要性に對する理解を缺いてゐた爲に、社會問題に對してもまた充分なる理解を全く缺くの結果に至つたのであつた。

然るにリユージェル博士は、以上の點に於いて全くシエーネレルの反對であつた。
リユージェルは、人間といふものに就いて深い知識を有してゐた爲に、諸々の可能な勢力を正しく評價することが出来たと共に、それに依つて更に現存する諸制度を餘りに低く評價することから免れたのであつた。否、これが爲に彼等は、これらの制度をば却つて彼れの目的達成の單なる補助手段以上に利用する、とが出来たのであつた。

彼等は、今日の時代の上層ブルジョア階級の政治的闘争力なるものは全く微弱なものであつて、新たな大運動の爲に勝利を闘ひ取るには不十分なものであることも、ヨク知り抜いてゐた。それ故に彼等は、その生存が常に脅やかされて居り・その爲にまたその闘争意志を鈍らせられるよりも寧ろ益々潰成される所の諸階層の獲得に、その政治活動の重點を置いた。と共に、既存の權力手段をば悉くこれを利用し、既成の有力な諸制度をばこれを自派に傾かせ、以つてこれらの古き力の源泉から自己の運動の爲に出来るだけ大なる利益を引出し得る様に努めたのであつた。

斯くて彼等はその新黨をば、先づ第一番に、今や滅亡の危機に曝されてゐる中産階級に立脚せしめた。

而し、さうすることに依つて、強大な執權心と共に頑強なる闘争力を有する全く搖ぎなき支持者層を確保したのであつた。彼れはまた、飽くまで賢明にカトリック教會と關係を結び、忽ちの間に多數の若い僧侶達を獲得した。……………

然し單にこれがけを以つてこの人物の本質的特徴と思ふならば、それは彼れに對して重大な不當な犯すものである。蓋し、この賢明なる職術家には、更に、眞に偉大にして且つ天才的なる改革者の諸性質も具はつてゐたのである。……………

この眞に秀でたる人物の追求した目的なるものは、飽くまでも實際的なものであつた。彼れは先づウインを手に入れようと思つた。ウインはこの君主國の心臓であつた。この都から、腐敗せる帝國の病根を悉くせる身體へと何は最後の生氣が通つてゐた。心臓が健全になれば、それにつれて爾餘の全身體もまた再び生氣に生き返つて來ることは必定であつた。而してこの考へは原則としては正しかつた。が、それは、一定の時の制約の下に於いてのみ實現され得ることであつた。

而して此處にこの人物の弱點があつた。彼れはウインの市長として擧げた功績は、言葉の最上の意味に於いて不朽のものであつた。然しそれを以つてしても遂に彼れは、該君主國を最量救ひ得なかつたのである。——時は既に餘りにも遅かつたのだ。

この點に就いては彼れの競敵シェーネレルの方かヨリ明瞭に看取してゐた。

リューゲル博士が實際に着手した仕事は素晴らしい成功を示した。が、彼れがそれから期待した所のも

のは遂に出て來なかつた。

シェーネレルの望んだ事は成功しなかつた。然し、彼れの憂へてゐたことは、遺憾乍ら、全く恐ろしき

のは遂に出で来なかつた。

シェーネレルの望んだ事は成功しなかつた。然し、彼れの憂へてゐたことは、遺憾なく、全く恐ろしきまでに實現したのであつた。

斯くてこの二人は共にその強大な目的を達するに至らなかつた。リューゲルは最早オーストリアを救済する能はず、シェーネレルは最早ドイツ民族をその衰亡から護り得なかつた。(X 107-110)

凡そ政治指導者たるの資格は何處に存するかといふことは、一の困難にして且つ重大極まりなき問題である。私は、これに就いて今茲に立ち入つて論述の自由を持たないが、これをば(一)人格・(二)識見・(三)才腕の三者に求むるものであり、ヒトラーの右に言つてゐることもまた結局この觀點に綜合し得られると信ずるものである。而してこの觀點より見る時、(一)人格の點に於いては、汎ドイツ黨のシェーネレルもキリスト教社會黨のリューゲルも、申し分が無かつた様である。が、(二)識見及び(三)才腕の點に於いて、二人は各缺くる所が有つた。シェーネレルは、その理想及び大局の認識に於いては正しくして遂かにリューゲルに勝つてゐたが、その社會認識に於いて甚しく缺くる所があり、殊にその運動展開の實際的手腕を缺いてゐたものらしい。これが爲にその運動は遂に大を成さず、彼れ及び彼れの運動は單に一の豫言者的存在に終つたのである。これに反してリ

ユーゲルは、稀に見る人間通及び世間通にして且つ實際的手腕に卓越し巧みに凡ゆる力を利用し、その運動は忽ちにして大を成したのであつたが、時代の大局の見透しを誤つて居り且つその理想目標に於いて誤れるものがあつた爲に、その運動は遂に何んにも成らなかつたのである。

これは一國の政治自體に就いても大なる教訓たるものであるが、殊に革新を志す者にとつて重大な教訓でなければならぬ。蓋し、人格・識見・才腕の三者共に勝れたる人物は、何處の國に於いても殆んど稀にしか存在しない。斯かる場合我々は如何なる指導者、この三條件の中のいづれをヨリ多く具へた指導者を撰ぶべきか？ 汎ドイツ黨は敗れたが、その存在は意義があつた。この黨は獨逸合併の先驅をなせるものであり、而してその目的は後にナチスに依つて達せられたのであつた。

「キリスト教社會黨は大を成し政權にまで就いたのであつたが、戦前のオーストリアに於いても戦後のオーストリアに於いても、この黨は遂に國家も國民も救ふことにならなかつた。殊に戦後のオーストリアに於いては同黨は全く一個のブルジョア反動黨化し、政權に在つて最後には共產黨からナチスまでを禁止解散して獨裁を事とし、遂にドイツ・ナチスに依つて血を以つて倒されたのであつた。人々は三者その一を撰ばざるを得ない場合、そのいづれを採るべきか？ 汎ドイツ黨の途か、キリスト教社會黨の途か？ 前者は飽くまで悲しく、後者は少くとも一時は盛榮を極めたのであつた。

が、結局、前者は敗れて勝ち、後者は勝つて敗れたとも言へる。而してその孰れが眞に世に貢獻したかは、一個の問題でなければならぬ。

た。が、結局、前者は敗れて勝ち、後者は勝つて敗れたとも言へる。而してその孰れが眞に世に貢獻したかは、一個の問題でなければならぬ。

が、實際は苟くも革新運動たるものは勿論その孰れに陥つてもならない。ヒトラーの研究もこれが爲に物されてゐるのであつて、彼れは更に進んで兩運動實踐上の過誤を指摘論述してゐる

十二 National 黨 汎ドイツ黨の失敗原因

ヒトラーに據れば、汎ドイツ黨が失敗した原因には主として三つあつた。

その第一は、前掲のシェーネレルに對する批評の中にも既に見られる如く、同黨は下層無産大衆にその基礎を求むべきであつたのに、逆に謂はゆる『ブルジョア階級』^{ブルジョア階級}にこれを求めたことであつた。これは、ヒトラーに據れば、同黨は元來『社會的』^{ソシアリ}たるよりも『民族的』^{ナチヤナル}であつて、『社會問題』といふものを理解しなかつたことに深く原因するものであつたが、これが爲にその運動はその本來の革命的性質を失ひ、一般ブルジョア黨と大して變るなき『低調』なものとなつて了つたのであつた。曰く、

『オーストリアに於ける汎ドイツ運動の崩壊には、私の見る所に據れば、三つの原因があつた。

第一は、その内部的本質よりすれば當然革命的なるべきこの新なる黨が、社會問題の重要性に就いてハッキリした觀念を持たなかつたことである。

シェーネレル及びその一黨は、先づ第一にブルジョア諸階級、と其の足場を求めた爲に、その運動は徒らに甚しく微弱微温なものとなざるを得なかつた。

ドイツのブルジョア階級、殊にその上層階級は、その各個が必ずしも意識してではないが、國民乃至國家の重大問題に關する場合に於いても、全く自己肯定的である程にまで事勿れ主義である。泰平の時代、即ちこの場合で言へば善き統治の時代に於いては、これらの階級の斯うした態度も、國家にとつて極めて有益なる一つの所以であり得る。然し惡支配の行かれる時代に於いては、斯かる態度なるものは、國家を益するどころか、反對に全くこれを害するものである。汎ドイツ運動は、眞に眞誠な職ひを廣く遂行し得るが爲には、何よりも先づ第一に大衆の獲得を志さなければならなかつた。然るにこれを爲さなかつたが爲に、同黨はその最初から、斯かる運動がやがてその衰退する様なことのない爲には必ずする必要とする所の本元的な運動力といふものを失つたのである。

斯かる根本要件が最初から考慮もされず實行もされなかつたと共に、この新黨は更にまた、後に至つてその遅れを取戻す可能性をも全く失つたのであつた。蓋し、微温的なブルジョア分子が甚しく多數を占むるに至る時には、勢ひその運動の内部的志向といふものは益々さうした階級へと向けられて行く。而して

その結果は、國民大衆の間から言ふに値ひするほどの勢力を更に獲得する一切の見込みといふものは失はれてしまふのである。……

その結果は、國民大衆の間から言ふに値するほどの勢力を更に獲得する一切の見込みといふものは失はれ、こゝに在る。……………

汎ドイツ運動に於いても正に然りであつた。而してそれは、同黨はその最初から廣く大衆の間にその同志を求めることに重點を置かなかつた結果であつた。斯くて汎ドイツ運動は「ブルジョア的に上品にして低調にラヂカルなもの」となつたのである。(『』 110—111)

その第二の原因は、右の第一の原因と不可分に關聯してゐるものであつて、同黨はその目的よりしても當然日常闘争黨に行動せざるべきであつたのに、議會黨となつたことであつた。議會に代議士を養ふといふことも必ずしも悪いことではなく、寧ろ一つの必要なことではあつた。然し其處に重點が置かるべきではなかつた。議會に於いて目的を達しようなどといふことは、汎ドイツ黨の場合に於いては最初からナンセンス的誤謬であつた。何故ならば、併オーストリアに於いてはドイツ人は全人口の五分の一を占めるに過ぎず、議會に於いても汎ドイツ人が常に多數を占むべき事情に在つたからである。汎ドイツ黨は、議會に入つてその内部からこれを崩壊せしむるといふ理由の下に議會に入つて行つたのであつたが、それは要するに名目であつて、外部からこれを叩き壊すといふ困難な闘争を忌避したからに外ならなかつた。而も敢て議會に『身賣り』した結果は逆効果を

見たのであつた。外部的には却つて馬鹿にされ、信用を失ひ、内部的にはお定りの『議員病患者』を輩出し、腐敗墮落を招來したのであつた。これは珍らしい現象でも珍らしい議論でもないが、ヒトラーがこれに就いて言つてゐることの中には、寧ろこれに關聯せる他の點に於いて、幾多の疑念が見出される。

『右の第一の誤謬よりして更にその衰亡を早める第二の原因が生じた。

汎ドイツ運動の起つた時には、オーストリアの状況なるものはドイツ民族にとつては既に絶望的なものであつた。議會は年を追ふて益々、ドイツ民族を逐次掃滅するの制度と化して行つてゐた。この最後の時に及んでこの状態から救はれんが爲には、議會といふ制度そのものを廢止することに一縷の望みを懸けるの外はなかつた。

斯くて汎ドイツ運動は根本的な重大問題に直面したのであつた。即ち、議會を打破する爲には、議會に入つて行つて、人々の間に嫌々言はれるが如くにこれを『内部から喰ひ破る』べきか、それとも外部からこの制度そのものに對してこれを破壊するの闘ひを進むべきか、といふことであつた。

汎ドイツ黨は議會に入つて行つたのであつた。そして叩き出されたのであつた。
尤も、彼等は入つて行かざるを得なかつたのだ。

外部から斯かる權力に對して、闘争を遂行するには、搖ぎなき勇氣を具へると共に、また限りなき犠牲を覺悟して掛らねばならぬ。それは牡牛をその兩角を以つて抑へつける様なものである。人々は幾度となく

外部から斯かる權力に對して闘争を遂行するには、搖ぎなき勇氣を具へると共に、また限りなき犠牲を覺悟して掛らねばならぬ。それは牡牛をその兩角を以つて抑へつける様なものである。人々は幾度となく手痛く突かれ、また腰々地上に突き倒されるであらう。恐らく斯うして身體をあちこち傷つけられることに依つてのみ、再び決然立ち上ることも出来るのである。……………

だが、それには、廣汎な大衆の間からの青少年を必要とする。

獨り彼等のみが、血染れとなつて最後までこの戦ひを戦ひ抜く決意と根氣とを有してゐるのである。然るに汎ドイツ運動は斯かる廣汎な大衆なるものを持つてゐなかつたのである。それ故に彼等は議會に入つて行くより外に途が無かつたのだ。(五二—一二)

汎ドイツ運動は議會に入ることに依つてその攻撃力を高め得ると考へたのであつたが、實際に於いては結果は全く逆なものとなつた。

汎ドイツ運動の代議士達が演説した論壇はコリ大さくならずして、寧ろコリ小さくなつてゐた。何故ならば、彼等は凡て、その演説を直接聞くことが出来るか、或ひは新聞の報道に依つてその内容を知り得る範圍の人々に演説したに過ぎなかつたからである。

聴衆に對して直接最大の論壇を成すものは實に、議會の議場ではなくして、公開の民衆大會である。蓋し、この民衆大會には幾千幾萬人もの人々が集り、而もその人々はたゞ演説者が語るべきことを聴か

んが爲にのみ、其處に來てゐるのである。これに反して議會の議場には僅か二・三百名が出席するに過ぎず、而もその多くはたゞ口實を買はんが爲に來てゐるのであつて、決して、その中の甲又は乙の「國民代表」の職の知識に依つて發せられ爲になど來てゐるのではないのだ。

就中問題なのは、それは實に常にようきも宜いといつた聴衆であつて、最早決してヨリ以上に何も學び加ふることのない連中だといふことである。……………

これらの國民代表達は、人として、決して自發的にヨリ正しき眞理を敬ひ、その爲に自らを捧げるといふべきことはないであらう。……………

斯かる「議壇」で演説することは、正に周知の動物豚に眞珠を投げ與へるやうなものである。……………

事實またその通りであつた。汎ドイツ黨の議員達は喉を哽らして演説することが出来たが、その効果は全然現れなかつた。

新聞は新聞でその彼等を全く黙殺するか、或は官方的にのみ彼等の演説を掲載した。その爲にその相互の懸隔が分らないのみか、厭々その意味も歪曲され或は全く失はれざへした。これが爲にまた風論は、この新運動に就いて極めて悪い印象のみを與へられたのであつた。……………。(五二二—二二二)

『若し一の世界觀の爲の闘争が眞に犠牲的な英傑に依つて指導されないならば、其處にはやがて絶死の男ある闘士も最早存在しなくなるであらう。自分自身の存在の爲に戦ふ様な者は、世間の爲には最早多くを

害與し得ないものである。

然しこの前提が確保される爲には何人も次のことを知る必要がある。即ち、新たな運動は後世に對し

寄與し得ないものである。

然しこの前提が確保される爲には何人も次のことを知る必要がある。即ち、新たな運動は後世に對して聲譽を與へるものであつて、現在に於いては何も與へるものではないといふことである。……

且ドイツ運動が議會に身を置くや、同運動は指導者や烈士の代りに「議員」を獲たのであつた。レ兵に同義は、普通の政治的目標し滿の水準に成り下り、殉教者の氣概を以つて運命の災禍に對抗するの力を失つて了つた。……

彼等が一度は議會に席を占むるや、その外部の支持者達は何か變つた驚異すべきことの起るのを期待し待望し始めた。が、勿論、その驚異すべきことも何等起りもせず、また起る筈もなかつた。……

汎ドイツ運動の新しい國民代表達が國會や地方議會に於いて甚だ穩かなる種類の「革命的」闘争に趣味を感じれど感ずる程、益々彼等は腹立た國民層の危險、啓蒙運動に歸る氣になれなくなつた。……

大衆集會場のピーラの卓聲が結局議會の假めしい演壇に換へられ、その壇上から演説が、民衆にはなく、謂はゆる「選ばれたる者」の頭に注ぎ込まれるやうになるや否や、汎ドイツ運動もまた國民運動(Volkbewegung)たることをやめて、やがて多かれ少かれ尤もらしいアカデミツクな討論クラブに墮したのちあつた。

斯くて、新聞に依つて與へられた惡印象も最早、各層々自らの集會活動に依つて訂正されるといふことは全然無かつた。これが爲に結局「汎ドイツ」なる語は、國民大衆の耳には極めて悪い響きを持つに至つ

たのであつた。

そも／＼文筆の職士及びその^{うゑはれや}諸君、殊にその今日、諸君は、凡て、次のことを爲し心得て置くが宜い。――この世の最大の變革なるものは、決してペンに依つて導かれたものではないといふことを！

然り、ペンは常にたゞ變革を理論的に理由付けることが出来るだけである。

宗教的及び政治的性質の歴史上の諸々の大變動を捲き起した所の力は實に、原始以來、話される言葉の不思議な力であつたのだ。

殊に、一國民の廣汎な大衆たるものは常にたゞ演説の力にのみ服従する。凡ゆる大運動は實に國民運動であり、人間的情熱と心靈的感覚との噴火山的爆發である。それは冷酷なる困窮の女神に依つて惹起されるか、又は大衆の間に投ぜられたる言葉の燃え立つ烽火に依つて惹起される。それは決して、美文の文筆家や社交家の勇士などのラムネ氣分の發現たるものではない。

國民の運命は、たゞ熱烈なる情熱の嵐のみがこれを變へ得る。而してその國民的情熱は、自らこれを内に抱く者のみが、これを呼び起すことが出来る。

獨り情熱のみが鐵錘で打つ如く國民の心の門を開き得る言葉を、同じく情熱に選ばれたる者に與へる。情熱に燃え立つこともなくまた口も結ばれてゐる者は、天の意志の宣告者として選ばれた者ではない。

それ故に一切の文筆の徒は、若しそれに對して充分の理解と能力とを有するならば、「理論的に活動すべく彼れのインキ罐の側に留まるべきである。彼れは決して、指導者たるべく生れた者でも選ばれた者

でもないのだ。

大目的を有する一切の運動は、斯かる次第で、國民大衆との聯絡を失はない様に常に銳意努力しなければならぬ。

でもないのだ。

大目的を有する一切の運動は、斯かる次第で、國民大家との聯絡を失はない様に常に銳意努力しなければならぬ。……………

獨り困難な現實のみが眞に目的への途を與ふるものでなければならぬ。厭な途に行くことを欲しないことは、この世に於いては餘りにも厭々、單にその目的を放棄することを意味する。而して人々はこれをば欲することも出来れば、欲しないことも出来る。

汎ドイツ運動がその議會参加に依つて彼等の活動の重點を、國民にはなく、議會に置くに至るや、その運動は將來を失つて、その代りに目前の安閑な効果を獲たのであつた。

それは、ヨリ安閑な闘争を撰んだのである。而してそれと共に最早その最後の勝利に値ひしなくなつたのだ』(『H. H.』)

汎ドイツ黨が失敗した第三の原因は、ヒトラーに據れば、同黨がカソリック征伐、坊主征伐を始めたここに在つた。宗教は何處でも神祕乃至佛様が第一義であるから、稍々もすれば反民族的反國家的に陥り易いのであるが、舊オーストリアの場合に於いてはそれが複雑深刻であつた。ハプスブルグ國家はその政權を維持せんが爲に、カソリック教會はその勢力を延ばせんが爲に、相利用し相

結託してオーストリア・ドイツ民族の勢力驅逐に努めたのであつた。これにはドイツ人の多くはカソリック教の謂はゆる舊教に對して謂はゆる新教たるプロテスタントの信徒であつた關係も、少なからず與かつてゐたであらうと思はれるものであるが、いづれにしてもそれはオーストリア・ドイツ民族にとつては穩やかならぬものであつたことは疑ひない。これに對して汎ドイツ黨は、ハプスブルグ支配を憎むの餘り、謂はゆる『坊主憎けりや袈裟まで』の比喩通り——但しこの場合は「袈裟」の方がホントウの『坊主』であつたわけであるが——敢然戦ひを起し、敵の本源を突げと許りに、『ロス・ノオン・ローム（ローマよりの離脱）』運動なるものを起したのであつた。『ローマからの離脱』といふのは、世界のカソリック教の本山はローマに在り、謂はゆるローマ法王がその元締めだからである。

これは、ヒトラーに據れば、勇敢なことであつた。が、誤れるものであつた。といふのは、舊オーストリアに於いてカソリック教が著しく反ドイツ民族的であつたのは、舊オーストリアの國內政治事情に基づくものであつて、必ずしもカソリックそのものの本性ではないからである。若し人々が一定の宗教乃至宗派の教義そのものに問題ありと認め、これを打破乃至改革せねばならぬと考へるならば、須らく宗教改革者となつてこれを改革すべきである。加ふるに、ハプスブルグ支配を敵

とせる上に、更にカソリック教までも敵とするといふことは、根本的な目的を二重にせるものであり、戦術上誤れるものであつた。汎ドイツ黨はこれが爲にその闘争力の分裂を來たし、且つその獲

とせる上に、更にカソリック教までも敵とするといふことは、根本的な目的を二重にせるものであり、戦術上誤れるものであつた。汎ドイツ黨はこれが爲にその闘争力の分裂を來たし、且つその獲得し得たであらう勢力まで逸して了つたといふのである。この問題に就いてはヒトラーは可なり長きに亘つて論じて居り、彼れの宗教に對する見解を示すものとしても重要なものがあるが、私は次に問題の要點だけを紹介する。

『汎ドイツ運動を挫折せしめたる最初の二つの過誤は互ひに密接な關係に立つてゐた。大變革の内的發動力に對する認識缺如は、國民大衆の重要性に對する評價不充分を來たしたのであつた。……………』

然しその第三の過誤もまた、大衆の價值に對する無識にその窮極の原因を持つてゐた。……………』

汎ドイツ運動がカソリック教會と戦つた苦難の闘争は、彼等が國民の精神的傾向に對して持ち得た所の理解の不充分からのみ説明される。

ローマに對するこの新黨の烈しい攻撃の原因は次の點に存した。

ハプスブルグ家がオーストリアを一のスラヴ國家に改變しようといふ宛極的に決心を固めるや、彼等はこの目的に役立つと思はれる一切の手段を採つた。宗教諸制度もまた、この極めて良心なき皇家に依つて購置する所なくその新たなる「國家理念」の用に供せられたのであつた。

チエコ教民及びその牧師の利用は、この目的即ちオーストリアの全般的スラヴ化の爲にやる多くの手段の中の一つに外ならなかつた。(p. 117-118)

『それと共に實に、教會もまたドイツ民族と共に在ることをせずして、却つて不當にもドイツ民族の敵側に立つてゐる様に思はれた。而してその全弊害の根源は、殊にシエーネレルの見解に従へば、カトリック教會の指導がドイツ國內に存在しないことに在り、それに依つて既に専ら約束されてゐる所の同教會の我が民族の利害への背反性に在つた。……………』

デオルグ・シエーネレルは、物事を中途半端にして置く男ではなかつた。彼れは、たゞそのみがドイツ民族を尙ほ救ひ得るとの確信の下に、教會に對する闘争を起したのであつた。「ローマからの離脱 (L'Événement)」運動は、勿論極めて困難ではあるが然し極めて有力な攻撃行動と思はれ、敵の牙城を粉碎せずば止まざるものと思はれたのであつた。若しこの闘ひが成功してゐたならば、ドイツに於ける不幸なる教會分裂も克服されてゐたであらうし、ドイツ帝國及びドイツ民族の内部的力はこの勝利に依つて、極めて顯著に強化されてゐたであらう。

然るに、この闘争たるやその前提に於いても、またその結果に於いても、まことに香んばしからざるものであつた。(p. 119-120)

『疑ひもなく、ドイツ民族に關する凡ゆる問題に於いて、ドイツ人カトリック牧師達の民族的反抗力は、非ドイツ人殊にチエコ人牧師達に劣つてゐた。

と共に、ドイツ民族の利害を公然代表するといふことは、ドイツ人牧師達にとつては、殆んど全く思ひ

「疑ひもなく、ドイツ民族に關する凡ゆる問題に於いて、ドイツ人カソリツク牧師達の民族的反抗力は、非ドイツ人殊にチエコ人牧師達に劣つてゐた。

と共に、ドイツ民族の利害を公然代表するといふことは、ドイツ人牧師達にとつては、殆んど全く思ひも及ばぬことであつたことは、餘程の無知な者に非ざる限り何人にも認められる所であつた。

然し同時にまた、苟くも眼の開いてゐる者は何人も次のことを認めなければならなかつた。即ち、斯うしたことは何よりも先づ或る一つの事情に基因するものであつて、その爲に我々ドイツ人の凡てが苦しまねばならぬのだといふこと、而してその事情とは、我々ドイツ人の自らに對する態度が恰かも他國民にでも對するが如く客觀的であるといふこと、これであつた。

チエコ人牧師達はその自らの民族に對しては主觀的に對し、教會に對しては専ら客觀的であつたのとは正に反對に、ドイツ人牧師達は教會に對しては主觀的に仕へ、自らの民族に對しては客觀的に止つたのであつた。これは然し我々が他の場合に於いても、不幸にして、幾度となく觀ることの出来る現象である。

それは決して單にカソリツク教だけの特別の持前ではなくして、今日急速に我々の殆んど凡ゆる組織殊に國家的乃至思想的の組織を侵蝕して來てゐるものであるのだ。

例へば、今日我國の官僚共が民族的更生の諸企圖に對して採つてゐる所の態度を、同様の場合に他國民の官僚達が採るであらう所の態度と比較して見るが宜い。果して他の凡ゆる國の官僚達中も、我國に於いて殊にこの五年來當然のこととされてゐるところか實に特に功勞あるものとさへされてゐると同じ様に、

これを「國家權威」の名の下に蹂躪してゐるものと信ぜられるか？……」(7 150-151)

「それは悲しむべきことである。が、それは一の事實であり、これを改革せんとすれば、その前に先づこの事實を認識して掛らねばならない。

僧侶界の一部に依るドイツ人利益の代表の軟弱さに就いても事情は同じである。

それは敢へて彼等自身の意地悪き惡意自體の現れでもなく、また必らずしも「上」からの命令に依つて起るものでもない。我々は斯かる民族的果敢の缺如をば擧ろ、幼少よりのドイツ民族主義への教育の缺如の結果と見ると共に、他方、偶像化せる理念への徹底的屈服の結果と見るものである。」(7 151)

「私はウィーン時代にこの問題をも虚心坦懷に吟味するの餘暇と機會とを充分に有してゐた。而してその際尙ほ日常の交際の中に、この見解の正しいことを幾度となく確認することが出来たのであつた。

種々雑多の民族の燃焼地たるウィーンに於いては、次のことが直ちに極めて明瞭に看取された。たゞドイツの平和主義者のみが自國民の利害を常に客觀的に考察しようとするのに反して、ユダヤ人は決してユダヤ民族の利害に對して斯かる態度を採るものでないこと、たゞドイツの社會主義者のみか、國際的同志の間を泣き付き廻ることに依る以外には、自國民の正當を主張することを敢へてせず、たゞその意味に於いて彼等は「國際的」であるに過ぎないが、チエコやポーランドや其他の社會主義者達は決してさうではな

いこと、これである。約言すれば、私は當時既に、斯かる不幸は單にその一部分のみが彼等の教説そのものに原因し、他の一部分は我國の全く不充ちな國民教育そのものと及びそれに依つて招來されたる自國民

いこと、これである。約言すれば、私は當時既に、斯かる不幸は單にその一部分のみが彼等の教説そのものに原因し、他の一部分は我國の全く不充分なる國民教育そのもの及びそれに依つて招來されたる自國民に對する冷淡さに原因することを知つたのであつた。

これと共に、カソリック教そのものに對する汎ドイツ運動の鬭争の第一の純理論的理由も、その根據なきものとなつたのである。

若しドイツ國民を既にその幼少の頃より、自國民の正義を専ら承認せしむる様に教育し、自己の利益を守る事柄に於いても謂はゆる「客觀性」なる禍ひを以つて少年達の心を毒しない様にしたらば、その場合には勿論急進的な國民的政府を前提として必要とするのであるが——アイルランドやポーランドやフランスに於けると同様に、我がドイツに於いてもそのカソリック教徒は矢張りドイツ人たることが間もなく明白にされるであらう。

これが最も有力な證據をば、我が國民がその存在を守る爲に遂に歴史の審判の前に立たせられて、その生死の戦ひをなしたかの大戰時代が提供してゐる。

當時、上からの指導が尙ほ崩壊せず存在した間は、國民は極めて嚴肅にその義務と責任とを果してゐた。新教の牧師であらうが、新教の僧侶であらうが、彼等はいづれも同じく、實に戦線に於いてのみならず、また戦後に於いてヨリ多く、我が抗戦力を久しきに亘つて維持することに限りなく貢獻したのであつた。大戰の數年間といふものは、殊にその勃發當初に於いては、新教舊教の兩陣營共に正にたゞ一つの神

聖なるドイル帝國が有るのみであつた。……『(S. 155—156)

『勿論、何時の時代でも良心なき徒黨は、宗教をもその政治的仕事の道具に用ひて憚らない（蓋し斯かる野郎共によつては、殆んど常に取らざうしたことのみが問題であるのだ）。然しそれだからと言つて、斯かる宗教を聖用する若し、の黨黨共の責任を宗教乃至信仰に負せせることもまた、同じく確かに間違ひでなければならぬ。斯かる徒黨は、他の如何なる事でも恐らく同じ様に彼等の低劣な本能の用に供するのである。』(p. 133)

「更に、個人個人の罪過の責任を宗教そのものや教會にまで負はすことも、別の點からして正しからぬものである。……………勿論僧侶牧師の中にも、聖職を單に政治的野心を満足さす爲の手段となすのみか、政權に際しては屢々歎かへしき極みにも、自分達は崇高な眞理の番人たるべきものにして、決して虚言や中傷の代表者であつてはならぬことを、忘れ去つて了ふ様な者もある。然し乍ら斯かる下劣な牧師一人に對して、極めて忠實に傳道に専念してゐる敬すべき牧師が千人以上も有るのである。……………」(215)

『若しまた人あつて、これに對して、この場合左様な日常の小さな事柄が問題なのではなくして、根本原則上の眞實性乃至教義内容全般が問題たるものであると言ふならば、それに對しては次の如く問題を新た

にしてその必要な解答を與へることが出来る。

若し汝がこの場合眞に眞理を傳ふべく運命に依つて選び出されたものと信するならば、それを爲せ。然るに汝は、女流などといふ迂路を経ずに、直接これを爲すの勇氣を持つべきである。何故ならば、政

にしてその必要な解答を與へることが出来る。

若し汝がこの場合眞に眞理を傳ふべく運命に依つて選び出されたものと信するならば、それを爲せ。然しその時には、政黨などといふ迂路を経ずに、直接これを爲すの勇氣を持つべきである。何故ならば、政黨の方法を以つてすることもまた一の掛引であるからである。汝は斯かる掛引に依らずして、直接今日の醜惡を打破して、これに代ふるに汝の考ふるヨリ善良なる將來を樹立すべきである。

若しその場合汝にその勇氣が無い、或ひは汝自身にもそのヨリ善良なるものが完全に明らかなでないならば、須らくさうした企圖から手を引け。如何なる事があらうとも、汝がその直接公然の方法に依つて爲し得ない所のものを、政治運動などの間接的方法に依つて巧みに欺き達成せんとしてはならない。

政治的黨派なるものは、宗教が民族的異端者として自民族の倫理道德を破壊する様なことの無い限り、宗教問題に係はるべきではない。同様に宗教側もまた政黨の争ひに介入してはならない。

教會の顯職者達が宗教制度及びその教説を利用して彼等の國民を阻害せんとする場合でも、人々は決して彼等と同じ方法を採り同じ武器を以つて戰つてはならない。

その國民の宗教上の教説及び制度は常に、政治指導者の觸れてはならないものである。若しこれに觸れんと欲し、而してそれに對して天分を有するならば、彼等は政治家たるべきではなくして、宗教改革者たるべきである。

これと異つた態度は、就中ドイツに於いては災禍を來たすであらう。

私は汎ドイツ運動及びそのローマに對する闘争を研究して、既に當時及び殊にその後の數年の間に、次の如き確信に到達したのであつた。即ち、この運動は社會問題の重要性を理解することの少かつた爲に、眞に闘争力ある國民大衆を手に入れることが出来なかつた。更にこの運動は議會に参加した爲にその大なる飛躍を失ひ、議會制度に附き物の凡ゆる弊害を持つに至つたのであつた。而して次にカソリック教會に對するその闘争は、數多の中小階級の間にこの運動の發展を不可能ならしめたと共に、この運動よりして結局民族的國民的たり得る所の無數の最善分子を奪ひ去つたのであつた。

この運動のオーストリアに於ける文化闘争の實踐的結果といふものは、殆んどゼロに等しいものであつた。

成るほどそれは教會から約十萬の信徒の引離すことは出来た。然し教會はそれに依つて殆んど何等の特別の打撃をも蒙らなかつた。教會はその場合、その失はれたる「小羊」の爲に實際に何等涙を流す必要とはなかつた。何故ならば、教會は既にずっと以前から最早心から歸依してゐなかつたものを失つたに過ぎなかつたからである。……………(S. 126-128)

『思ふに次の一事は確かに正しいものである。』

若し汎ドイツ運動が一般大衆の心理といふものに對して相當の理解を有してゐたならば、同運動は決して斯様な過ちを犯さなかつたであらう。若しこの運動の指導者達にして、苟くも成功を克ち得んが爲に

は、純心理的理由よりして既に、大衆に決して二つ乃至それ以上の對敵を指し示してはならないといふこと、何故ならば二つ乃至それ以上の對敵を指し示す時はその闘争力の完全な分裂を來たすからであるといふことを知つてゐたならば、たゞその點だけからしても既に、同運動の攻撃目標はたゞ一つの敵に對して

は、純心理的理由よりして既に、大衆に決して二つ乃至それ以上の對敵を指し示してはならないといふこと、何故ならば二つ乃至それ以上の對敵を指し示す時はその鬭争力の完全な分裂を來たすからであるといふことを知つてゐたならば、たゞその點だけからしても既に、同運動の攻撃目標はたゞ一つの敵に對して集中されてゐたであらう。實際には何一つ錄に成就することも出來ない辭に、凡ゆることを爲さんと欲する用い、やばり共に依つて指導され、有りと凡ゆる方面に互つてその態度の決定を行ふほど、一つの政黨にとつて危險なるはない。

個々の宗派に假令實際に如何に非難すべきものがあらうとも、政黨たるものは一掃と雖も次の事實を心から忘れてはならない。即ち、從來の凡ゆる歴史上の經驗に據れば、同じ事情に在つた純政黨にして一つとして宗教改革を行ひ得たものは無かつたといふことである。……………

一般に凡ての眞に偉大なる國民指導者の要訣は、いづれの時代に於いても先づ第一に、國民の注意を分散せしめず、常にこれをたゞ一つの敵に集中せしめるに在る。この國民鬭志の喚起が統一的行はれれば行はれるほど、その運動の磁石的吸引力はそれだけ大であり、従つてまたその衝撃力はそれだけ強い。互ひに無關係に存在する諸々の敵でさへも、これを常にたゞ一つの仲間に屬するものの如くに思はしめることは、偉大なる指導者に必要な天才の一つに數へらるべきものである。蓋し、多くの相異なる敵を認識することは、性格の弱くして且つ不確かな人々にとつては、單に餘りにも容易に自己の正義に對する疑惑の端緒をなす恐れがあるのみであるからである。

動搖定りなき大衆は餘りにも多くの敵との戦ひの中に自己を見出すや、謂はゆる客観性なるものが直ちに燦然と來たり、果して他の凡ての者が不正であつて、たゞ自國民又は自分達の運動のみが正當であるかどうかといふ疑問を起すであらう。

これと共にまた早くも自己の力の不隨化が起り始める。それ故に、内部的に異れる多數の敵をもこれを常に一括して、以つて味方の大衆の眼には闘争はたゞ一つの敵に對して行はれる様に映ぜしめなければならぬ。然る時は大衆は自己の正義に對する信念を強めると共に、この正義の侵害者に對する憤激を高めるに至るであらう。

曾つて汎ドイツ運動がこのことを理解しなかつたことは、同運動をしてその成功を失はしめたのであつた。

これを要するに汎ドイツ運動の目標の見定めは正しく、その意圖もまた清純であつたが、然しその採つた方法が誤つてゐた、この運動は次の如き一人の登山者にも例へらるべきものである。即ち、この登山者はその攀ぢ登るべき山頂をば確かに眼に把握し、また非常な決意と非常な力とを以つてその道程に上つたのであつた。が、この道程そのものに何等の考慮をも注がず、常に眼を目標に向けるのみで、その登山の特性を観察もしなければ吟味もせず、これが爲に遂に失敗したのであつた。』(G. 128—130)

汎ドイツ黨の失敗に對するヒトラーの研究批判は大體以上の如きものである。私はその所論をば

可なり省略しつつ、而もその骨子をば殆んど餘す所なく原文に忠實に紹介せるものであるが、ヒトラーが右に汎ドイツ黨に就いて指摘してゐることは、實にヒトラー乃至ナチス黨にとつて重大な意

可なり省略しつゝ、而もその骨子をば殆んど餘す所なく原文に忠實に紹介せるものであるが、ヒトラーが右に汎ドイツ黨に就いて指摘してゐることは、實にヒトラー乃至ナチス黨にとつて重大な意義を有するのみならず、苟くも革新を期する者にとつては、國境を起えて多くの學ぶべきものと與へてゐるものである。

十三 Sozial黨—キリスト教社會黨の過誤

汎ドイツ黨の失敗原因を批判考究せるヒトラーは、次に進んでキリスト教社會黨のそれを批判してゐる。後者に就いての彼れの論述は、前者に就いてのそれに比較する時は遙かに短いものである。然し其處にもまた、世の愛國革新を求むる者の採つて以つて参考とすべき多くのものが提示されてゐる。

ヒトラーに據れば、汎ドイツ黨は畢竟するに社會的認識に於いて甚しく缺くる所があり、『大衆の意義を理解しなかつた』爲に失敗したのであつたが、キリスト教社會黨はその點に於いては別に缺くる所が無かつた。否、社會乃至大衆に對する認識及び運動に於いては、同黨黨首リューゲルに對する批判の中にも見られし如く、寧ろ稀に見る賢明且つ巧妙を極めたものであつた。曰く、

『この關係は、その一大競争相手たりしキリスト教社會黨に於いては正に逆であつた様に思はれる。キリスト教社會黨の選び進んだ途は、賢明にして且つ正しいものであつた。唯だその目標に關する明瞭な認識を缺いてゐただけであつた。

汎ドイツ運動が誤つた殆んど凡ての重要な點に於いて、キリスト教社會黨の採つた態度は正しくして且つ計画的なものであつた。

キリスト教社會黨は大衆の重要性に就いて必要な理解を有してゐた。そして、その運動の最初の日よりして、同黨の社會的性質 (social character) を公然強調することに依つて、少くとも大衆の一部を確實に手に入れたのであつた。キリスト教社會黨は、下層の小さな中間階級乃至手工業者階級の獲得に本格的に自らを傾倒することに依つて、忠實であると共に根氣強くして且つ犠牲心に富める支持者達を獲た。同黨はまた宗教機構に對する一切の鬭争を避け、さうすることに依つて、教會の今日形成してゐると正に同様の強大な組織の支持を獲たのであつた。従つてまた同黨は、唯だ一つの眞に大なる主敵を有するのみであつた。更にまた同黨は、大規模宣傳の價值を知つて居り、その廣大な支持者大衆の心理的才能に隨ふき掛ける上の名人でもあつた。』(C. 188)

キリスト教社會黨が如何に運動上手・宣傳上手であつたかは、ヒトラールが後に『戦争宣傳』に就いて論ぜる箇所 (第一章第六章) に、『この宣傳の手段なるものは、夙にマルクス社會主義の諸團體がまことに黨に入つた巧妙さを以つて、これを驅使し適用することを心得てゐたものであつた。……この術は、ブルジョア諸黨にあつてはこれまで殆んど尙ほ未知のものであつた。唯だキリスト教

社會黨の運動、殊にリユール時代に於けるそれだけは、或る程度まで巧みにこれを手段として用ひ、そのお蔭で極めて多くの成功を収めたのであつた。』と、言つてゐる所にも凡そ窺はれる、當時

社會黨の運動、殊にリューゲル時代に於けるそれだけは、或る程度まで巧みにこれを手段として用ひ、そのお蔭で極めて多くの成功を収めたのであつた。』と、言つてゐる所にも凡そ窺はれる、當時のドイツ及びオーストリアに於いては、キリスト教社會黨の運動は正にマルクス主義運動に次ぐ巧妙を極めたものであつたのだ。

が、それにも拘らず、このキリスト教社會黨もまたそのオーストリア建直しの目的を達成する能はず、これを崩壊から救ふことが出来なかつた。その原因は何處にあつたか？

ヒトラーに據れば、その原因は勿論オーストリアといふ國の特殊事情にも深く存して居り、この黨自體にのみ歸せらるべきものではなかつた。が、この黨自體に就いて言へば、前掲引用文の中に既に見られるが如く、同黨は先づその目標の認識に於いて明瞭を缺くものがあつた。本個所に於けるヒトラーの論述は運動方法の批判を目的としたものであるので、この運動目標上の不明瞭に就いては、彼れは單にこれは指摘してゐるに止まり、立ち入つてこれを説明してゐないが、今ヒトラーに代つてこれを少しく説明するならば、大體次の如きものと思はれる。

前にも言へるが如くこの黨は、二重三重の混亂に在りしオーストリア國家及び國民を全體としてその崩壊の危険から救はんとしたものであり、これが爲には最も好都合にして最も手つ取り早く最

も無難と思はれる——皮肉に言へば最も安直なる——歐洲普遍宗教キリスト教を以つてその統一信條となし、謂はゆる世界觀となしたのであるが、然し、何を如何にすれば眞に所期の國家國民を救ふことになるか、明らかなかつた。況ドイツ黨の場合に於いては、善かれ惡しけれ、ハプスブルグ支配を倒してオーストリアを大ドイツと合併することに依つて、オーストリア・ドイツ民族を救はんとしたのであり、その間にはハツキリしたものがあつた。然るにキリスト教社會黨にはそれが無かつたのである。勿論、抽象的觀念的には、キリスト教社會黨にも目標が嚴存したと言へるであらう。それは何よりも先づ國內の統一強化を以つて肝要となし、その爲には先づ國內諸民族及び諸階級の精神的物質的向上及び融和を以つて急務と考へ、種々とこれに努力盡瘁したのであつた。その點に於けるキリスト教社會黨の活動は正に劃期的なものであつたと言へるであらう。同黨が社會民主黨と輿論を争ふオーストリア最大の黨となり得たのも、畢竟するにこれが爲に外ならなかつたのであるが、然し同黨はその『社會黨』と稱すると雖も、ハツキリと資本主義に反對して一の新たな社會主義社會を招来しようといふのでもなく、單に謂はゆる社會問題乃至社會主義に對しても理解を示したといふに止まり、それ以上にどうといふことは無かつたのである。後に、戦後の新たなオーストリア時代に至つて、同黨は全く一の反動ブルジョア黨化し、遂にナチスに依つて血を以

つて倒されるに至つたのも、結局この目標の認識の不明瞭に基づくものと言へるのであるが、ヒトラーに據れば、何よりも先づ茲にこの黨の弱點乃至缺陷が存在したのであつた。斯かる中途半端な

つて倒されるに至つたのも、結局この目標の認識の不明瞭に基づくものと言へるのであるが、ヒトラーに據れば、何よりも先づ茲にこの黨の弱點乃至缺陷が存在したのであつた。斯かる中途半端な曖昧な態度乃至方針を以つて救ふには、當時のオーストリア内外事情は餘りにも深刻であり、且つ餘りにも時既に進捗してゐたのである。

が、キリスト教社會黨がその目的を達成し得なかつた原因には、ヒトラーに據れば、單に前記の目標の不明瞭といふことの外に、更にその運動方法上の重大な過誤があつた。その第一は宗教的立場よりせるユダヤ人排斥であり、その第二は民族的力の看過放棄であつた。この二つのものは一同じ根源——キリスト教的超民族主義——から由來せるものであつたが、これが同黨の運動をして殆んど全く無意義なものたらしめたのであつた。これに就いてヒトラーは次の如く論じてゐる。

『それにも拘はらず、キリスト教社會黨もまた、オーストリアの救済といふその夢想せる目的を達成することの出来なかつたのは、その目標自體の不明瞭なりしことと共に、その採りし方法の二つの缺點に基づくものであつた。

この新運動の反ユダヤ主義は、人種の認識の上ではなく、宗教的觀念の上に依據してゐた。何故にこの過失が行はれたか、その原因は、同時にまた第二の誤謬を犯さしめた所の原因と同じもので

これを要するにキリスト教社會黨は、内部的に一の革命的變革を必要としてゐた多民族國家「オーストリア」をばそのまゝ全體としてこれを教はんとした爲に、而してまた本來普遍的人類愛をモットーとするキリスト教の立場に立てる爲に、この運動は該多民族國家の持つ凡ゆる民族に都合の宜いものでなければならず、如何なる民族乃至民族主義にも偏することが出来なかつたのである。これはオーストリアに於いては——單なる功利的見地からすれば——或ひは『賢明』なことであつたと言ひ得るであらう。何故ならば、これが爲に同黨は、ハプスブルグ政權から迫害されることもなく、また例ひ一時でも大を成し得たのである。が、これが爲にこの運動は凡てに亘つて中途半端な不徹底なものとなり、何んの爲の運動か分らなくなつて了つたと共に、最早如何なる民族及び階級からも眞の精兵分子を獲得し得なくなつたのである。

斯うなればその運動は先づ、如何に尙ほその大を保持しようとも、お終ひでなければならぬ。前にも言へるが如くこの黨は戦後のオーストリアにまで亘つて存続し、社會民主黨に拮抗しつゝ大體これと代り番つこに同國を支配したのであつたが、ヒトラーは戦前に於いて既に、同黨黨首リューゲルの死せる時に、早くもこの黨の終焉を認めてゐる。この黨が戦後にまで亘つてオーストリアを支配し、殊にその末期に於いては獨裁を取へて、遂に彼れ自身に依つて倒されようとは、ヒトラー

も豫想してゐなかつた様である。曰く、

にも豫想してゐなかつた様である。曰く、

「私は曾つてこの二つの運動（汎ドイツ黨とキリスト教社會黨のそれ）をば最長の注意を以つて見守つたのであつた。一方は衷心よりの胸の極きから、他方は、當時既に私にはキリストリア全ドイツ民族の悲壯な象徴の様に思はれた稱に見る人物（リューゲル）に對する驚異の念に心惹かれて。

リューゲルの葬式の大行列がこの死せる市長を市役所から環狀道路へと運んで來た時、私もまたこの葬列を見送る幾十萬の人々の間に伍してゐた。その時私は心から感動に打たれつつ、我れと自ら次の如く叫びやいたのであつた。この人の事業もまた、この國家を不可避に没落に導いてあらう所の災厄の爲に、必然的に無駄とならねばならぬであらう。若し彼れカール・リューゲル博士がドイツに生れてゐたならば、彼れは我が民族の偉人の中に入つてゐたであらう。彼れがこの仕様のない國家（キリストリア）に於いて働いたことは、彼れの事業及び彼れ自身の不幸であつた、と。

彼れが死んだ時には、既にバルカンには小さな火焰がそれからそれへと次第に燃え擴がつて行つてゐた。従つて、運命が彼れをして彼れの尙ほ阻止し得ると信じてゐた所のもの（舊キリストリアの崩壊）を見せず終つたのは、彼れにとつては寧ろ幸福であつたであらう。」（F. Test 1887）

十四 民族主義的と社會主義的

キリスト教社會黨の運動に對するヒトラーの批判は、前節に紹介せる所に見るが如くである。こ

あつた。

キリスト教社會黨がオーストリアを救はんとすれば、同黨の創立者達の意見に據れば、同黨は「人種原理」(Ethnoprincip)の立場に立つてはならなかつた。何故ならば、若し「人種原理」「民族主義」の上に立つ時は、忽ちにしてこの國家の全般的崩壊を見なければならなかつたからである。殊にウイン自體に於ける事情は、この黨の指導者達の見解に據れば、一切の分裂的要素を出來くだけ廣範に取除き、これに代ふるに一切の統合的觀點を高揚することが必要であつた。

この時代にはウインは既に特にチエコ分子に依つて著しく浸透されて居り、その爲に一切の種族問題に對する最大の寛容のみが能く彼等チエコ分子をして、元來反ドイツ的ならざる一の黨の中に獲得することが出來たのであつた。而してまたオーストリアを救はんとすれば、彼等チエコ分子を放棄してはならなかつた。そこで人々は、マンチエスター流自由主義に反對して戦ふことに依つて、このウインに於ける極めて多くのチエコ系小營業者を獲得しようとしたのであつた。と共に彼等は、そのユダヤ人との鬭争に於いて舊オーストリアの一切の民族的差別を超越する所の一の標語をば、宗教的基礎の上に見出したと考へたのであつた。

斯くの如き基礎に立つ斯くの如き鬭争が、ユダヤ人といふものに對してホンの僅かの憂慮しか與へなかつたことは極めて明白である。最悪の場合に於いても、注意の洗禮の水は常にユダヤ人とその商賣とを同時に救つたのであつた。

と共に、斯かる皮相の立場からしては、到底全問題を眞剣に科學的に取扱ふことが出来なかつた。これが爲にまた、極めて多くの人々にはこの種の反ユダヤ主義は必然的に不可解なものならざるを得ず、彼等をして却つて唯だ反撥を感じしめただけであつた。而も人々キリスト教社會黨の人々は純感情的考へを去つて現實の認識に到達しようとしなかつたので、その理念の影響力は殆んど全く一部の精神的に限ら

たたる人々の間に止まつたのであつた。知識階級は根本的に反對の態度を採つた。斯くてキリスト教社會黨の反ユダヤ主義なるものは、その全體に於いて要とする所は、唯だ單に新たにユダヤ人を改宗せしめんとするに在るか、然らずんば唯だ全く競争的嫉妬の現れに過ぎないかの如き視を呈するに至つたのであつた。然らずんば唯だ全く競争的嫉妬の現れに過ぎないかの如き視を呈するに至つたのであつた。然らずんば唯だ全く競争的嫉妬の現れに過ぎないかの如き視を呈するに至つたのであつた。然らずんば唯だ全く競争的嫉妬の現れに過ぎないかの如き視を呈するに至つたのであつた。

たたる人々の間に止まつたのであつた。知識階級は根本的に反對の態度を採つた。斯くてキリスト教社會黨の反ユダヤ主義なるものは、その全體に於いて要とする所は、唯だ單に新たにユダヤ人を改宗せしめんとするに在るか、然らずんば唯だ全く競争的嫉妬の現れに過ぎないかの如き觀を呈するに至つたのであつた。從つてまたその鬭争は一の精神的な高尚な感激の特徴を失つて、極めて下劣な連中以外の多くの人々には非道徳にして非難すべきものに思はれたのであつた。これを要するに其處には、問題は全人類の生死に關するものであつて、その解決如何に依つて凡ての非ユダヤ民族の運命が決定されるといふ確信が缺けてゐたのである。

斯うした生半可の爲に、キリスト教社會黨の反ユダヤ主義の活動はその價值を失つたのであつた。それは一の僞裝反ユダヤ主義たりしものであり、全然無いよりも寧ろ惡かつた位のものである。何故ならば、人々は斯くして油斷に導かれ、敵をシツカリ抑へ付けたと考へたのであつたが、現實目體に於いては鼻毛を抜かれたからである。……

更にその場合人々は、多民族國家の爲に既に大なる犠牲を擧げなければならなかつたほどならば、ドイツ民族自體の主張の爲にはヨリ遙かに多くの犠牲を擧ぐべき筈であつた。

然るに人々は、ウイン自體に於いてその足下の地盤を失ふまいとすれば「民族主義的」であることは出来なかつた。人々はこの問題をば穩やかに避けることに依つて、ハブスブルグ國家を救はうと考へたのであつた。而してさうすることに依つて正にハブスブルグ國家を逆に衰頹に追ひやつたのである。と共に、この運動は、孤りそれのみが斯かる政黨に對してその内部的推進力を不斷に供給し得る所の・巨大な力の源泉を失つたのであつた。斯くてキリスト教社會運動は實に、正に他の一切の黨と何等變るなき黨と化したのであつた。(C. TROTSKY)

それを要するにキリスト教社會黨は、内部的に一の革命的變革を必要としてゐた多民族國家「オーストリア」をばそのまゝ全體としてこれを教はんとした爲に、而してまた本來普遍的人類愛をモットーとするキリスト教の立場に立てゐる爲に、その運動は該多民族國家の持つ凡ゆる民族に都合の宜いものでなければならず、如何なる民族乃至民族主義にも偏することが出来なかつたのである。これはオーストリアに於いては——單なる功利的見地からすれば——或は「賢明」なことであつたと言ふ得るであらう。何故ならば、これが爲に同黨は、ハプスブルグ政權から迫害されることもなく、また例ひ一時でも大を成し得たのである。が、これが爲にその運動は凡てに亘つて中途半端な不徹底なものとなり、何んの爲の運動か分らなくなつて了つたと共に、最早如何なる民族及び階級からも眞の精兵分子を獲得し得なくなつたのである。

斯うなればその運動は先づ、如何に尙ほその大を保持しようとも、お終ひでなければならぬ。前にも言へるが如くこの黨は戦後のオーストリアにまで亘つて存續し、社會民主黨に拮抗しつゝ大體これと代り番つこに同國を支配したのであつたが、ヒトラーは戦前に於いて既に、同黨黨首リューゲルの死せる時に、早くもこの黨の終焉を認めてゐる。この黨が戦後にまで亘つてオーストリアを支配し、殊にその末期に於いては獨裁を敢へてし、遂に彼れ自身に依つて倒されようとは、ヒトラー

も豫想してゐなかつた様である。曰く、

にも豫想してゐなかつた様である。曰く、

「私は曾つてこの二つの運動（汎ドイツ黨とキリスト教社會黨のそれ）をば最長の注意を以つて見守つたのであつた。一方は衷心よりの胸の痛きから、他方は、當時既に私には「キリストリア全ドイツ民族の悲壯な象徴の様に思はれた種に見る人物（リューゲル）に對する驚異の念に心惹かれて。

リューゲルの葬式の行列がこの死せる市長を市役所から環狀道路へと運んで來た時、私もまたこの行列を見送る幾十萬の人々の間に伍してゐた。その時私は心から感動に打たれつつ、我れと自ら次の如く呟やいたのであつた。この人の事業もまた、この國家を不可避に没落に導くであらう所の災厄の爲に、必然的に無駄とならねばならぬであらう。若し彼れカール・リューゲル博士がドイツに生れてゐたならば、彼れは我が民族の偉人の中に入つてゐたであらう。彼れがこの仕様の無い國家（「キリストリア」に於いて働いたことは、彼れの事業及び彼れ自身の不幸であつた、と。

彼れが死んだ時には、既にバルカンには小さな火焔がそれからそれへと次第に燃え擴がつて行つてゐた。従つて、運命が彼れをして彼れの荷は阻止し得ると信じてゐた所のもの（「舊キリストリアの崩壊」）を見せずに終つたのは、彼れにとつては寧ろ幸福であつたであらう。」（*Die Zeit*）

十四 民族主義的と社會主義的

キリスト教社會黨の運動に對するヒトラーの批判は、前節に紹介せる所に見るが如くである。こ

れを要するにヒトラーに據れば、汎ドイツ黨は民族的であつたが、社會的でなかつた爲に失敗し、キリスト教社會黨は反對に社會的であつたが、民族的でなかつた爲に失敗したのである。換言すれば、汎ドイツ黨やキリスト教社會黨の如き運動は本来 National であると共に Social でなければならなかつたのに、兩者共に各その一面しか有しなかつた爲に失敗したのである。彼れはこの問題の最後に兩黨の運動を綜合批判して次の如く言つてゐる。我々はこの綜合批判の中に、彼れのナチオナルゾツイアリスムス即ち國民社會主義（或ひは民族社會主義）の考へ方及び性格を最も端的に窺ふことが出来る。私に據れば、このヒトラーの研究批判はそれだけでも既に一書に値ひする立派なものである。

『私は、前者の運動の無爲と後者の運動の失敗とから、その諸原因を見出さうとしたのであつた。而して私は、舊オーストリアに於いては其の國家を保護することの不可能なりしことは暫らく全く別問題として、この兩黨の誤謬は次の如きものであるといふ確信に到達したのであつた。』

汎ドイツ運動は、ドイツ人更生の目標に對するその根本的見解に於いては確かに正しいものであつたが、然しその方途の選擇に於いて不幸であつた。この運動はナチオナリスティッシュ（民族主義的乃至國民主義的）であつたが、遺憾乍ら、大衆を獲得する程に充分ゾツイアル（社會的）ではなかつた。が、その反ユダヤ主義は、種族問題の意義の正しい認識に立脚して居り、宗教的觀念などには立脚してゐなかつ

た。唯がその一定宗派（カソリック）に對する闘争は、これに反して、事實上からも戰術上からも間違つてゐた。

キリスト教社會運動は、ドイツ人再生の目標に就いては明瞭な觀念を持つてゐなかつたが、黨派として

た。唯だその一定宗派（カソリック）に對する闘争は、これに反して、事實上からも戦術上からも間違つてゐた。

キリスト教社會運動は、ドイツ人再生の目標に就いては明確な觀念を持つてゐなかつたが、黨派としてのその方途の追求に於いては理解と幸福とを有してゐた。この運動は社會問題の意義を理解してゐたが、そのユダヤ民族に對する闘争に於いて誤つたと共に、民族思想（National-Gedanke）といふものの力に就いて何等の自覺をも有しなかつた。

若し、キリスト教社會黨がその大衆に對する賢明な認識の上に、更に、汎ドイツ運動が有してゐた様な人種問題の意義に就いての正しい觀念を有して居り、そしてそれ自身究極的にナチオナリスティッシュであつたならば、或ひはまた汎ドイツ運動がそのユダヤ人問題の目標と民族思想の意義に就いての正しい認識の上に、更にキリスト教社會黨の様な實踐的賢明さを有し、殊にその社會主義に對する態度を受け容れてゐたならば、その運動は、私の考へに據れば、當時に於いて既にドイツの運命を効果的に支配し得たであらう様な運動となつてゐたであらう。

尤も、それがさうならなかつたといふのは、主としてオーストリアといふ國家そのものの本性に因るものであつたが。（*cf. 1922-1924*）

National と Sozial（民族的と社會的）乃至 Nationalismus と Sozialismus（民族主義と社會主義）——それは我國に於いては、明治大正以來、謂はゆる『思想普導』學者に依つては元より、謂はゆる『右翼』『愛國派（民族主義派）』に依つても、謂はゆる『左翼』『無産派（社會主義派）』に依つ

ても、相容れないものとして説かれて来たものである。如何にこの議論が従来我國思想界を支配して来たことか！ 而してまた現在支配してゐることか！ 若し我國に於いてこの兩者の一體不可分性を夙に認識し、主張し、而してその爲に戦つて来たものありとすれば、それは唯だ明治・大正・昭和の三代に亘つて幾度か姿を失ひつゝ而も尙ほ絶えざる我が國家社會主義派あるのみである。然るにヒトラーに據れば、否ヒトラーに據つても亦、この兩者は實にその根本理念に於いて一致し得るものたるのみならず、その實踐に於いてもまた相伴はなければならないものであるのだ。

『眞の國家主義者は必らず社會主義者たらざるべからず。眞の社會主義者は必らず國家主義者たらざるべからず。』とは、ドイツに於けるナチスの標頭に先づて従つてまたこれを知ることなくして死した私の師高島素之の言であるが、ヒトラーの見解もまた正にそれなのである。

前にも言へるが如く、ヒトラーはこの兩運動から可なり多くのものを學んでゐる。勿論彼れの國民社會主義の考へは、我々の既に見た如く、彼れ自身の獨自の經驗と研究とに依つて到達したものであつて、この兩黨の研究に依つて知つたものではない。彼れは豫め既に Nationalsozialismus の思想を持つて居つたればこそ、この兩運動にも着目したのである。が、この兩運動から彼れは、その實踐方法、運動の進め方を學んでゐる。即ち、汎ドイツ黨から民族的國民的進み方を學び、キリ

スト教社會黨から社會的進み方を學んでゐるのである。而してこれを深く參考として建設されたものが、取りも直さず彼れの國民社會主義運動であるのだ。たゞ、キリスト教社會黨の『社會的』は、キリスト教の教義に基いて、彼れはこれを公認した社會主義。これまで推し進めてゐるだけである。

スト教社會黨から社會的進み方を學んでゐるのである。而してこれを深く參考として建設されたものが、取りも直さず彼れの國民社會主義運動であるのだ。たゞ、キリスト教社會黨の『社會的』は不十分なものであつたので、彼れはこれをば公然『社會主義』にまで推し進めてゐるだけである。キリスト教社會黨の『社會的』は不徹底なものであり、そんなことでは最早時代の進展にも適應せず、マルクス主義にも對抗し得るものでなかつたのだ。

十五 神權國家遂に救ふべからず

私はヒトラーのウイン時代諸考察を紹介して漸やくその最後にまで到達した。彼れは最後に、このハプスブルグ國家Ⅱ『寄木細工』國家に對する悲哀・憂鬱・憎惡とドイツ本國に對する憂慕・憧憬に就いて語り、以つてこの『苦難の學校』時代Ⅱウイン時代の考察を終へてゐる。

彼れに據れば、ハプスブルグ國家に於ける彼れの生活は憂鬱そのものであつた。爲政者はハプスブルグ皇室を始めとして惡逆・無自覺・低劣を極め、革新運動は、どいつもこいつも出來損ひであり、ユダヤ人を始めとする異種人は跋扈し、右を向いても左を向いても不愉快なもの許りであつた。ハプスブルグ國家は到底救はるべくもなかつた。それは唯だ崩壊を俟つのみであり、且つ一日

も早く崩壊すべきであつた。斯かる國家は國家として存在の資格なきものであり、オーストリア・ドイツ民族の黎明はこの國家の崩壊よりに始まるべきものであつた。而して彼れは、この考へ及び事情よりして益々ドイツに對する思慕を高め、ドイツ行を決定するに至つたのであつた。彼れはこの彼れの快意及び心情を叙して次の如く言つてゐる。

「私はその後、他のいづれの黨にも私の考へが現れてゐないのを見たので、その既存のいづれの團體にも最早加入するのを却て共に闘ふ決意にふれた。私は當時既に、當時の政治運動の凡てが誤つて居り、ドイツ民族の國民的再生を大規模に且つ徹底的に實現することが出来ぬものと思つてゐた。然し、ハプスブルグ國家に對する私の内部的憎惡は、またこの時代に益々増大したのであつた。

私は殊に外交問題を研究し始めたのであつたが、これを研究すればするほど、この國家權威なるものは必然的に唯だドイツ民族の不幸を來すだけであるといふ確信を強めたのであつた。斯くて結局私は、ドイツ民族の運命はこの場所「オーストリア」から決定されるものではなくして、ドイツ自體に於いて決定されるものであるといふことを、益々明瞭に認めたのであつた。而してこのことは、常に一般政治問題に就いてのみならず、また全文化生活の凡ゆる現象に就いて一般に言はれることであつた。

オーストリア國家は純然たる文化的乃至藝術的關係領域に於いても、凡ゆる衰頹の徴候、少くともドイツ民族に對する意義喪失の徴候を示してゐた。このことは建築の領域に於いて最も然りであつた。……斯くして私は益々一の二重生活を行ひ始めた。理性と現實とは私に對して、オーストリアに於いて一の

困難な然し疲る所多き學校を完了すべく命じたのであつたが、然し私の心臓は他の場所に鼓動してゐた。

當時私は、この國家の内部的空虚を知り、これを尙ほも救済することの不可能なるを知り、それと共に、この國家が有りと凡ゆる事に於いて唯だドイツ民族の不幸を來すのみであることを凡ゆる點からハッキリと感ずれば感ずるほど、これに對する遺る懶なき不満に抗はれた。

困難な然し癒ふ所多き學校を完了すべく命じたのであつたが、然し私の心臓は他の場所に鼓動してゐた。

當時私は、この國家の内部的空虚を知り、これを尙ほも救済することの不可能なるを知り、それと共に、この國家が有り且凡ゆる事に於いて唯だドイツ民族の不辛を來たすのみであることを凡ゆる點からハッキリと感ずれば感ずるほど、これに對する遺る瀾なき不満に抱はれた。

私は、この國家が眞に優れたるドイツ人をば凡て迫害窮迫し、反對に非ドイツ人の凡てを援助するに至るべきことを確信してゐた。

私には、その首都の示してゐた諸人種混合からして忌ま／＼しいものであつた。チエコ人、ポーランド人、ハンガリー人、ルチニア人、セルビア人、クロアチア人等の諸民族混淆の凡てが忌ま／＼しかつた。而もその到る所に人類永久の分別隔たるユダヤ人の横行してゐたことが、更に忌ま／＼しかつた。

私にはこの大都市は血の汚辱の横化である様に思はれた。

幼少時代の私のドイツ語は、下バワリア地方でも話されてゐた所の方言であつたが、私はこれを忘れることも出来ず、またウィンの合の子言葉を感じることも出来なかつた。私はこの都に長く住めば住むほど、この古きドイツの文化都市を蠶食する所の混合異民族に對して益々嫌惡の念を強くした。

この國家が尙ほも久しきに亘つて存続するであらうといふ考へは、私には笑止至極のものであつた。當時ミーストリアは、バラ／＼の木片をつなぎ合せた接合劑が最早古くなつてボロ／＼になつた一の古い密木細工の如きものであつた。この細工物に何も觸れない限り、それは尚ほその存在をどうにか續けることが出来た。が、これに何か衝撃が加へられるや否や、それは幾多の木片にまで分散してしまふものであつた。従つて問題は唯だ、何時この衝撃が来るかといふことだけであつた。

私の心臓は一度としてオーストリア王國の爲に鼓動したことはなく、常に唯だドイツ帝國の爲にのみ鼓動してゐた。私には唯だ、この國家の崩壞の時こそはドイツ民族の解放の始まる時であると考へられた。

斯うした凡ての理由から私には、夙にその幼少の頃より密かなる憧憬と密かなる愛着とを感じてゐた所の地に、終局的に赴かうといふ切なる願望が益々強く擡頭して来た。

私は信じて、建築家として、かどの人間となり、以つて運命がその場合私に命ずる所の小なり大なるの世界に於いて、自分の民族の爲に忠實なる奉仕をしようと考へてゐた。

然し私はその場合結局、私の燃ゆるが如き切たる望みを何時かは實現して呉れるに相違ない所の土地に於いて、働らき得るの幸福に異からんことを欲したのであつた。その望みといふのは、我が愛する故郷を共同の祖国ドイツ帝國に合併するといふこと、これであつた。(G. 194-195)

善くも悪くもオーストリアハプスブルグ國家は、ヒトラーにとつては生國であり故國である。その生國、その故國を斯くも呪ひ、眞の『父なる國』、『母なる國』とは言へ、少くとも形式上は明らかに一の他國たる所のものを、斯くも慕ひ、斯くも追ひ求めねばならぬとは、何んなる此世の悲劇であらうか！それは、斯かる境遇に置かれたことの無い者には、容易に理解されない所爲であり心事でなければならぬ。が、ヒトラーはこれに就いて次の如く記してゐる、

「多くの人々には、斯かる思慕の如何たるものであるかは今日でも尙ほ理解され得ないであらう。が、私は、運命に依つてこれまで斯かる幸福（眞の祖国への所屬）を拒まれて来た人々、或ひは冷酷無情にも新たにまたこれを奪はれた人々に向つて訴へる。私は、母國から引き離されて、神聖なる自らの言語の使

用の爲にさへも戦はねばならぬ凡ての人々、祖國へのその忠誠の精神の爲に彈壓され迫害されてゐる凡ての人々、そして悲嘆當惑の中に再び親愛なる母の胸に連れ戻される日を持ち望んでゐる凡ての人々に訴へる。然り、私はこれらの人々の凡てに訴へる。而して私は信ずる。——これらの人々は私を理解して呉れ

用の爲にさへも戦はねばならぬ凡ての人々、祖國へのその忠誠の爲に彈壓され迫害されてゐる凡ての人々、そして悲嘆當惑の中に再び親愛なる母の胸に連れ戻される日を待ち望んでゐる凡ての人々に訴へる。然り、私はこれらの人々の凡てに訴へる。而して私は信ずる。——これらの人々は私を理解して呉れるであらうことを！

この愛する祖國に所屬することを許されずしてドイツ人たることが如何なるものであるかをば、それ自身身を以つて體驗してゐる者のみが能く、母なる國より分離されてゐる子達の心に絶えず燃えてゐる所の深き思慕の如何なるものであるかを推知することが出来る。それは、祖國の戸が開かれて同一の血族が同一の國邦に平和と安靜とを再び見出すまでは、この抱ける者をして懊惱せしめ、これに満足と幸福とを與んでしまふものであるのだらう。(五二二)

我々には幸ひにして祖國から分離せしめられた經驗はない。が、この氣持は、少くとも祖國を愛して祖國から容れられない者、而も尙ほこれが爲に戦はんとする者には、凡そ理解されるであらう。

『神聖國家』II オーストリアへの重なる憎惡、同一民族國家ドイツへの罅や増す思慕——彼れのウイン時代はこれを以つて終る。斯くて彼れはウインを去つて、ドイツはミュンヘンへと終局地に向き、其處で前大戰に會し、彼れの生涯に一大影響を與へられたのであるが、これに就いては我々もまた席を改めて研究するであらう。

附記 本書續刊諸分冊に就て

以上の私の『マイン・カンフ』研究第一分冊の前半（緒論より第二章に至るまで）は、昭和十五年十月より本年三月に掛けて雑誌『國際評論』に掲載されたものであり、後半（第三章）は今回單行本として出版に際し新たに書き下せるものであるが——因に第二分冊も大半は既に前記『國際評論』に發表掲載中である——私は本書をば次の如く、前篇後篇各三冊の六冊に分ち、漸次これを執筆同行し、以つて本書を完成したいと思つてゐる。

前篇 批判篇

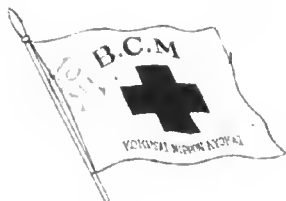
- 第一分冊——單なる Nationalist たる National-socialist に至る迄の研究
- 第二分冊——前大戰に於けるヒトラーとドイツ敗戦崩壞の原因の研究
- 第三分冊——國民社會主義運動の開始とその基本思想殊に民族觀の研究

後篇 建設篇

- 第一分冊——ヒトラー・ナチズムの世界觀乃至國家觀の研究
- 第二分冊——ヒトラー・ナチズムの運動方針及び運動組織の研究
- 第三分冊——ヒトラー・ナチズムの内外政策殊にその對外政策の研究

右の十六冊の中、前篇批判篇三冊は本年中に、後篇建設篇三冊は明年中に、脱稿同行する積りである。が、私の生來の渾身筆鋒重に加ふるに周知の如き時局であるので、果して豫定通り進み得るかどうか、私は自分でも保証出来なない。幸ひにして無事に續け得たならば、讀者諸君に於いては續けて讀んで頂き度い。

著者



昭和十六年十一月十五日 印刷
昭和十六年十一月二十日 發行

ヒトラー著

「マイン・カンフ」研究(第一分冊)



定價壹圓五十錢

(滿洲、中東は二刷題)

著者 石川準十郎

東京市神田區西幸町一ノ二 五ビル
發行者 五十嵐 隆

東京市神田區三崎町二ノ二六
印刷者 小倉 貞司

發行所

東京市神田區西幸町一ノ二 東所ビル
(二番目五五)
振替口座東京二四二〇四番
電話銀座(五)八二八二番

國際日本協會

配給元

京市神田區池路二ノ九
日本出版配給株式會社

(行印社書賣合刷印和盛)



行發・會協本日際國・京東